

30/  
C  
6a

青山書院刊

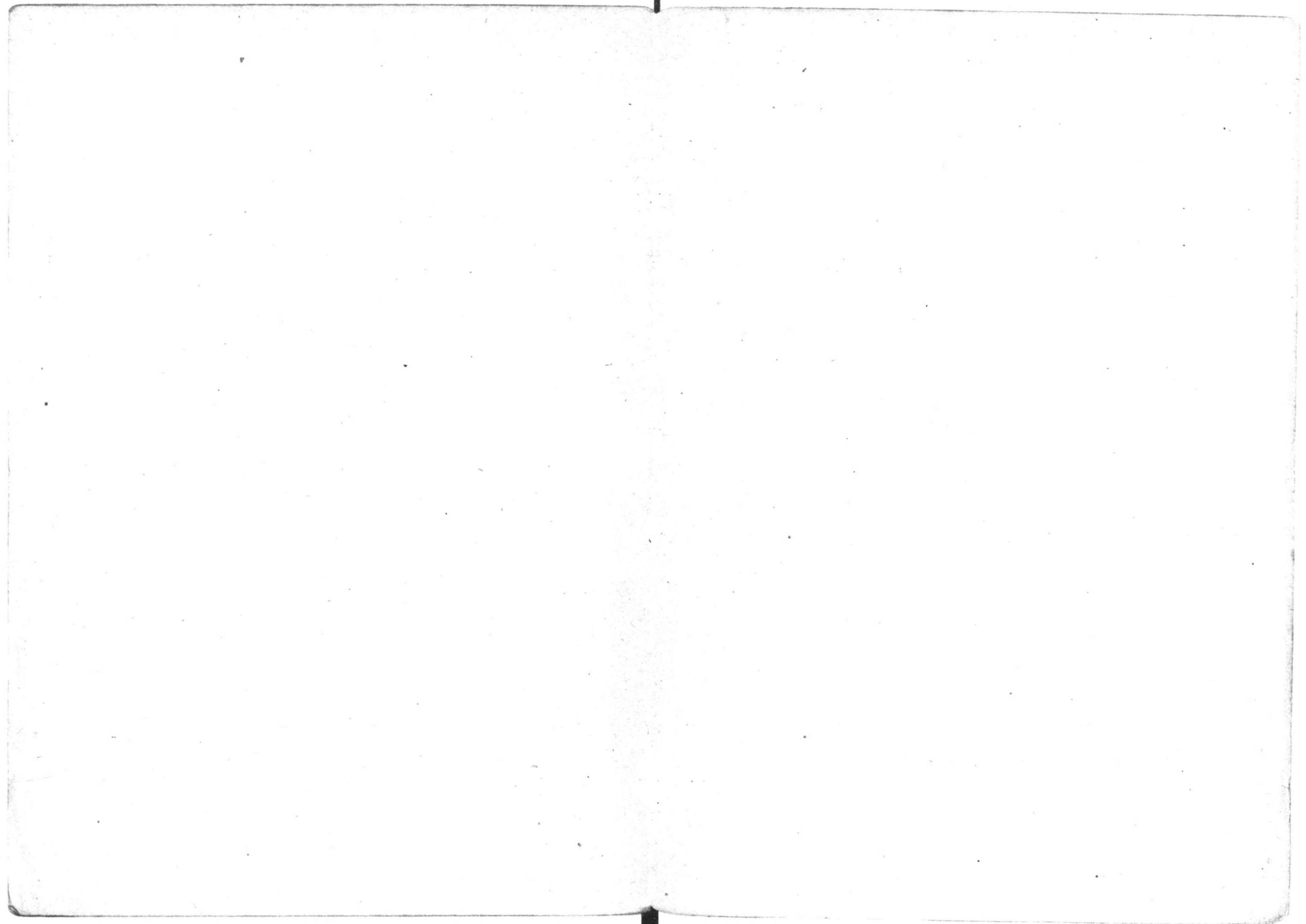
松本潤一郎著

現代社会学

m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始





松本潤一郎著

現代社会学

青山書院刊

301  
6a



133133

### 小序

敗戦日本の現状において、全國民の希望する唯一のことは、我國の社會再建を順調ならしめる、諸方策の考案と、その一日も早い現實への適用であらねばならぬ。われわれ、學問に志さす者においても、その念願に變りはないが、特別、社會學關係者としては、過去の過誤を繰り返へすことなきため、將來の社會再建を遂行して行くことのために、國民の間に社會學知識の普及を冀がひたい考へに充ち満ちてゐる。

私自身、他の著述においても、早くから、社會學的認識の國家的必要性を唱導してゐたのであるが、いま、新狀態のもとに、いよいよ、そのことを叫ばなければならぬと思ひである。それがためには、専門學者として、著述の手段によつて、斯學の研究、理論の現下の緊要性を説かなければなるまい。こゝに、これまでの著述と違つた氣持で、この書を書き下ろす決意を生じた。私としては、特に、日本青年教養層にこの書を捧げる。けだし、青年教養層こそ、現下の艱難な時局を救ひ、もつて、社會再建を完遂するところの役割を擔當する者であらうからである。

昭和十八年末から、十九年春にかけて、東京工業大學は、著者を招いて、同大學の専門違ひの社會學の講義をさせた。今日は、技術人にも、社會理論は、必要な知識であらう。私は、その舉に對して、衷心、敬意を表する

小序

とともに、その講義草稿をもととして、いまこの書を綴ぐる。しかし、出来上つて見ると、これまでのと類似の點が、少なからず反唱してゐるところも氣にかかるが、もともと、科學研究や理論は、さう急激に變はるべきものではない。變らぬことに、確實性さへ認められるであらう。

殊に、ゲーテは、「三度も言はなくてはならぬ」と稱する位である。自己の學說、理論は、反覆主張しなければ、仲々、周囲の者にも徹底しないのである。私は、自己の社會學理にひそかな自信をもつのであるから、本書においても、主張の點は、どこまでも、繰り返へすのである。戦火に、郷里、東京居宅と、二重に罹災し、家具、什器、衣類はもちろん、全藏書と、研究書類を喪つた著者は、學者として、まことに哀れな存在であるが、しかし、自己の樹てた學理の残されてゐるのは、満足に感ずる。この満足感を、これからの平和日本の社會再建に、結びつけたい希望に燃えて、この書を著らばす。

昭和二十一年、秋、疎開先、信州、伊那谷において

著 者

目 次

緒 論

青年と社會再建

- 1、敗戦日本と青年……………三
- 2、デモクラシーと青年……………六
- 3、新生活と青年……………九
- 4、政治・經濟と青年……………二二
- 5、文化と青年……………二四

本 論

一、社會認識

- 1、人間と理知……………三三

2、理知の認識……………二四

3、初期の社會認識……………二七

4、社會研究の發芽……………三〇

5、社會研究の發育……………三三

6、社會の發見……………三六

7、社會科學の濫觴……………三九

8、社會學の創始……………四二

9、社會學の發展……………四五

10、研究組織の整頓……………四八

二、人間團結……………五一

1、個人と社會……………五三

2、團結、すなはち集團……………五五

3、全體社會と部分社會……………五八

4、共同社會と利益社會……………六一

5、集團構成の三原理……………六四

三、共同生活……………六五

1、社會生活……………六五

2、生活原動力と生活環境……………六八

3、社會的行爲……………七〇

4、社會過程の内容……………七三

5、社會關係現象……………七六

6、基礎的社會諸現象……………七九

7、社會的模倣……………八二

8、傍觀者の役割と社會的距離……………八五

9、集團活動……………八八

10、無政府主義、自由主義、全體主義……………二四

四、文化問題……………一九

1、文化とは何か……………一九

2、文化の事實……………二三

3、文化の生成……………二五

4、文化の強制力……………二六

5、文化の傳承・傳播……………二三

6、文化の變遷……………二五

7、唯物史觀批判……………二六

8、集團意識……………二四

9、社會統制……………二四

10、集團的性格……………二四

五、社會動向……………二五

1、社會進化……………二五

2、歷史主義……………二五

3、社會進動……………二五

4、人間團結の擴大……………二六

5、共同生活の調和……………二六

6、文化内容の充實……………二六

7、社會進動の意義……………二七

8、現實社會……………二七

9、社會再建……………二七

10、これからの問題……………二八

附録

文獻解題……………二七

一、はしがき……………二七

二、社會學の理論……………二八

三、社會學の學說……………一九二

四、諸事實の研究……………一九五

五、文獻の探求……………一九七

緒 論



## 青年と社會再建

### 1、敗戦日本と青年

日本が敗れた。思ひ掛けぬことであつた。二千六百有餘年、不敗を誇つた祖國日本の敗北は一體、誰の責任とすべきであらうか。

戦争責任者の裁判が、現に進行中である。そして、そのうち、戦争責任者は明らかにされるであらうが、それは、戦争開始や、戦争煽動の責任者であつて、敗戦責任者でないかも知れない。敗戦責任者は、それ以外に、あるかも知れないのである。しかし、戦争開始や、戦争煽動や、敗戦責任者が、舊日本の所謂指導階級層のうちにあつたのは、事實である。そして、この所謂指導階級層が、年若い青年群から構成されてはゐず、むしろ、年寄つた老人群から成り立つてゐたのを見れば、敗戦責任は、大方、老人群の負ふべきものであり、青年群の關知しない事柄だともいへよう。

社會や、國家は、しばしば、有機體に譬へられる。萬人が同じ仕事を擔當するのではなく、各々部署を異にして、分業的に仕事を行ひ、それによつて全體のはたらきが營まれるのである。高度の組織體が、そこに認められ、あ

たかも各種の機能を擔當する細胞から成り立つ生物的存在が聯想されるといふわけである。かくて、生物そのものが有機體といはれる結果、社會や、國家の有機體觀が生じて来る。この社會や、國家の有機體において、全體を率ゐる中樞機能を司るものは、如何なる階級層であらうか。指導階級といはれるものが、それであるが、多くの社會や、國家では、これが特殊の老人群から成り立つと見做される。すなはち、社會や、國家各分野の成功しな人々であつて、彼等は各分野において相當のはたらしをしてゐる間に、壯年期を過ぎ去り、老年期に入り、老年期にいたり始めて各界のリーダーとして、社會や國家を率ゐる立場を認められるのである。

それであるから、老人支配は、社會や、國家のつねの現象だといふことにもなる。未開時代以來、高度民族の段階に及ぶまで、青年群は、ひろく被指導的地位におかれる。被指導的地位とはより年寄つた階級層への服従を意味するのであるが、しかし、この被指導的服従の地位において青年群は生活經驗をつみ、教育されて、やがてそのうちから各分野の成功者を出だし、指導的老人群なきあとでの後継者を出すのである。後継者は、指導的老人群の過去のはたらしを繼承するとともに、自らの經驗と教養とによつて、社會や、國家を率ゐる。したがつて、その指導はこれまでの老人群のそれのよい點を保存すると同時に、新にそれには若干のものを付け足し、時代に適切な新指導階級の役割を演ずる。しかしその時、彼等もいつの間にか、老年期に到達してゐるのが、事實である。

かやうに考へて來ると、日本の敗戦の責任が過去の指導的老人群の肩にかゝり、青年群の係はりないことが、

解かつて來よう。社會理論の一應の説明、かくの如くであるが、しかしよくよく再吟味して行くならば、次の、一層進んだ究明に接して行くであらう。すなはち、あらゆる社會關係が相互的である如く、社會や、國家の指導問題においても、一方的指導といふことはあり得ないところであつて、指導に對して被指導、すなはち追従があり、この追従なき場合にすべて指導は成り立ち得ざるものである。社會や、國家の場合において、指導的老人群が如何に指揮命令を出したところで、一般國民層がそれに追従して行かないならば、指導といふ現象は起こつて來ない。つまり、指導現象は雙方的である。指導は、追従なきところに生じ得ないのであるから、もし、指導の失敗ある場合においては、追従にもまた過誤ありといはなくてはならぬ。日本敗戦の責任が、指導的老人群にありといふとき、それは直ちに、追従的一般國民、したがつて、追従的老年群もまた、一半の責任を分かつたなければならぬ關係にあるのである。

これを要するに、敗戦責任は、一應のこととして、青年群にはないやうに見えるが、深い社會理論をもつてすれば、青年群といへども、その責を免がれ得ないのである。日本青年として、よくよくその點を反省しなければならぬ。他事のやうに、敗戦責任を老人群におしつけることは出來ない。自らのこととして責任感をもたなければならぬのである。日本歴史あつてこの方、未だ會てなかつた汚辱を、衷心悔ゆるところがあつてよいのであるが、しかも、老人群とは異り、青年群は前途に幾春秋の將來性をもつものであり、且つ、前述する如く、そのうちから、他日、新指導的階級層を構成して、社會や國家の指揮命令を擔當する分子をなすべきであるから、單

なる悔悟や、責任感をもつことのみで能事終れりとする事は許されない。先輩たる舊指導的老人群の失敗を檢討し、自己の過つた追従に深い反省を行ふとともに、新指導方針を案出して、社會や、國家のこれからの運命を開拓して行かなければならぬ。一言にしていへば日本社會再建といふ重大使命を擔ふべく、考究、努力を費やす必要があるのである。

## 2、デモクラシーと青年

新局面において、デモクラシーが、社會や、國家の指導原理たるべきことが、いはれてゐる。これまでの國家主義が、敗戦の結果、打ちのめされたからだともいへるであらう。そして、國家主義に對照する、戰勝國のデモクラシー原理を學ばなければならぬ破目に立ちいたつたとも考へられるであらう。

しかし、われわれが警戒すべきことは、國家主義にしても、デモクラシーにしても、それらを棄て、或は新に採用することを、恰も流行を追ふ如く、なすべきではないといふ點である。服装や、髪飾りの流行などは、衛生上に害のない限り、大して問題としなくてもよいが、社會や、國家の生活原理たる國家主義や、デモクラシーにいたつては、さう輕輕に取捨すべきではないであらう。それであるから、いまや戰勝國として我國に對して命令的立場にある米國の識者の如きも、日本は、日本としてのデモクラシーを考究し、實現すべきであるといつてゐる。

る。

先づ、デモクラシーが如何なることを意味するか、日本として、その如何なる長所を採つてもつて社會や、國家の再建に資すべきかを、研究する必要があるのである。我國青年群が、日本社會再建の使命を帯びて、最初になすべき考究、努力の一つが、まさしく、その點に存する。

デモクラシーといつても、新聞や、雑誌を賑はす言葉だけの話であつて、内容は雲を掴むといふやうな、漠然たる感じのするのを、如何ともし難いであらう。國家主義といふ如き、全體主義的な、なんらか強制的なものに對立することだけは、分かるであらう。それはその筈であつて、デモクラシーを最もよく説明したといはれる、米國大統領リンカーンは、その指導原理が「人民に屬し、人民の手による、人民のための政治である」と述べて、デモクラシーは、個人を本位とする主義なること、個人に對して外部から強制するすべてのものを敵視すること、をば、明らかにしてゐる。リンカーンのこの解釋は、最も端的なデモクラシーの説明だといはれてゐるが、しかし、これはその言葉にも窺はれるやうに、政治中心の説明であつて、今日問題となる國家、社會の、廣汎な指導原理としてのデモクラシーの解釋には、多少、物足りない點が残らうと思ふ。

デモクラシーの深い意味は、國家や、社會の生活萬端を、その構成員各自の意志に基づかせることである。その點では、明らかに個人主義であるが、しかし、個人の意志は、つねに利己主義的にはたらくものでないのであるから、個人の意志に基づかせるといつても、利己主義に流れるのみと斷定することは出来ないのである。こゝ

に、各自の意志に基づかせるといふのは、個人個人の判断と行動に基づかせるといふことであり、これによつて、健全な國家、社會が運営されるとするわけである。思ふに、社會、國家を構成する國民個個が、もし、十全な智能を有し、適切な經驗をつむものであるとしたら、如上のデモクラシー原理は、最も適切な集團的生活原理であつて、他のいかなる指導原理よりも、賢明であり、安全であり、且つまた、愉快なものであるに相違ないのである。

結局、デモクラシーは、國民的教養の高さを前提として、社會や、國家の指導原理としての價值を立證する。したがつて、今日、われわれが日本社會再建に當つてデモクラシーの内容をよく噛み分け、國民的教養を一段躍進せしめることを、眞先心掛けなければならないことが當然である。過去においても、國民的教養が全く缺けてつたのでないが、それが偏してゐたとか、十分深められずにあつたとかいふ疑ひがある。國民各自は、十分な智能をみぎき、適切なる經驗をつんでつたかどうか。例へば、自然科學の智能を十分もつてゐたかどうか。歴史の經驗をば、適切ならしめてつたかどうか。

自然科學の智能にしても、歴史の經驗にしても、最後のこととして、自己及び集團の生活を四圍の環境條件に對して矛盾なく適應せしめて行く手段である點を、忘れてはならない。この點では、生物が周圍に對して適應生活を送るのと、根本的な差はないことであるが、デモクラシーは、各自に對して、その判断を問ひ、適應行動の實踐を求めるのである。盲目的でない、自覺した生活方を要求するといふもよい。

かやうに考へて來ると、デモクラシーは一種の哲理であるともいへるが、哲理として、今の日本が學ぶべき、ある根本的なものを藏するのである。とりわけ、今後、社會再建を雙肩に擔ふ日本青年群として、味ふべき、採るべき、多分の要素をもつのが分からう。

### 3、新生活と青年

敗戦日本は、今日以後、好むと好まざるとを問はず、舊生活を脱して、新生活に入らなければならない。新生活といへば、如何にも響きがよいのであるが、敗戦のいま、嚴然たる生活程度の切り下げの事實が存し、生活分野の狹隘化といふこともある。いはゞ、悲しむべき新生活に入つて行かねばならないのであつて、それは、すでに、不足勝ちの經濟生活や、限定づけられた政治生活の面に、犇々と感得せられるところである。

われわれが、好むと好まざるとを問はず、舊生活を斷念して、新生活を身につけて行かねばならないことは、敗戦を契機に、周圍の生活條件が一變したからである。ある意味からすれば日本は、最早や、獨立國家の體面なき社會であるともいへる。それほど、生活條件は激變してゐるのであるから、生活そのものも變らざるを得ないことは、當然である。すべての生物が、周圍の環境條件に適應してのみ、生活する如く、個人も、社會も、同じく周圍の生活條件の指數として、その生活を營む。敗戦を境として一變した生活條件のもとに、新生活が始ま

らなければならぬことは、必然的であるといへる。

われわれの住むべき領土の上からいつても、われわれの利用すべき資源、資材の點からいつても、さらに、われわれの展開すべき文化についていつても、敗戦日本は限定づけられ、制限をうけ、また、條件づけられてゐるのである。あらゆる社會生活が、つねになんらか限定され條件づけられてゐることは、社會學的公理だといへるが、しかし、いまいふところの諸規制は社會の平常日におけるそれではなく、戦敗國として受けとつてゐる、非常日の悲しむべきそれなのである。きびしい、冷たい生活諸條件だといはなくてはならぬ。

もちろん、文明國間のことであるから、戦勝國も戦敗國に對して、野蠻國間に見られる如き過酷な征服條件を強むることは、ないのである。過去一年間に互る、聯合國のわが領土進駐事實に照してからが、そのことは、よく分かるであらう。しかし、われわれは、たしかに戦敗國民として制壓せられてゐるのである。そして、その制壓条件下に、新生活を開始しつゝあり、今後、永い間、その生活を繼續せねばならない運命におかれてゐるのである。

いやが應でも、かくの如き新生活は始まり、それが、永く繼續されなければならないはずであるが、この問題に處して、われわれは、如何に對應して行くべきであるか。とりわけ、青年群は、如何に振舞ふべきであるか。よくよく、その點を考へて行けば、一に、課せられた新生活條件のもとに、出來得るだけの能率的生活形態を工夫し、實現して行くこと、二に、課せられた生活諸條件のうち、好ましからぬところのものを、漸次、更改すべ

く努める以外に、方途のないのが知られるであらう。

すべての生物、個人、社會は、周圍の環境條件に適應した生活を營むといつたが、いまわれわれの新生活が、敗戦日本の嚴然たる生活條件の、指數たる意味で開始されるが、しかし、われわれの工夫、創意の如何によつて、新生活は低い程度のもので止むこともあれば、高度に上昇することもあり得る。そもそも、同じ土地や同じ氣候のもとにおいても、諸生物は千變萬化の差異ある生活形態をとるのであつて、社會の場合についても、同じことがいへるのである。けだし、一定した生活条件下の決定された生活形態とはいつても、生活條件への適應程度に段階が存するのであつて、より低く、即ちより拙なく適應して行く場合と、より高く、即ちより賢く適應して行く場合とが分れ、それによつて、生活形態に種々相があらはれるといふわけである。

一般生物や、愚鈍な個人の場合において、その生活は、なんら工夫、創意なくして、自然のまゝに、委せられるであらう。しかるに、賢明な個人や、社會の場合においては、自己の生活を検討して、始終、その改善、向上のため、工夫と創意をめぐらすのである。われわれが、新生活をとるに當つて、原理となすべきものは、前者の態度に非ず、必らず、後者の行き方であらねばならぬ。しかし、將來に互つて永く國運を擔ふ青年群は、爾餘の國民に率先して、後者の積極的行き方をもつて、敗戦日本の社會再建に盡して貰はなければならぬ。

## 4、政治・經濟と青年

敗戦日本の社會再建は、課せられた生活條件に即應する、新生活の積極的工夫、創意にあるのをいつたが、他に、一つの道は、この課せられた生活諸條件のうち、好ましからぬものを漸次、更改すべく努めることにあるであらう。しかし敗戦的生活條件更改のためには、再び起つて軍國主義的手段に訴へると、平和的手段によつて、條件緩和の希望を達成する行き方がある。第一次歐洲大戰後のナチス化したドイツは、前の行き方を試みたが、今次の世界大戰によつて、あへなく失敗した。もちろん、日本として、その覆轍をふむべきではないであらう。われわれは、すでに死力をつくして闘ひ、總力を傾けつくした上に、惨敗したのである。軍國主義的に再武装して立つとしたところで、聯合諸強國を向ふに廻して、何の成算があるか。

況んや、今後の文明的國際關係は、武力闘争の時代ではない。むしろ、平和的競争の時代であると觀念しなければならぬ理由があるに於いてをやである。武力闘争は、平和的手段によつて、解決し得られぬ場合、止むなくとられる非常手段であるが、今後のデモクラシー的世界秩序のうちにおいては、實力、言論、宣傳の平和的手段の蓄積、放下によつて、十分、我が正當なる主張を貫徹し得る状態にある。かゝる状態にしたがひ、好ましからぬ敗戦的條件更改の努力を費すことが賢明であるが、それには、課せられた生活條件のもとにおいて、新生活を

能率的に切り開き、一番本となる社會的實力の培養、蓄積をなさねばならぬ。これが、社會再建と稱するところであるが、以下に、政治、經濟、文化各方面に互つて、具體的にそのあらましを説いて見たいと思ふ。

政治の面においても、經濟の面においても、文化の面においても、すでにいふデモクラシーの指導原理を生かして行くことが中心であるが、リンカーンの言葉にも知られる如く、デモクラシー的政治生活こそ、重點中の重點だといはなければならぬ。全國民が、政治に関心し、その最もよい内容を工夫、創意し、それをさらに實踐に移して行くことに努めたいのである。こゝに、婦人參政などの眞意義も認められるが、それと同時に、政治教育の緊急性が考へられる。われわれは、新生活上、自然科学と歴史の經驗を重要視したのであるが、政治教育上において、特に後者の歴史の經驗を盛り上げる必要をば、大聲疾呼したいと思ふ。

こゝに必要とされる歴史の經驗とは、要約すれば、人間の生活法則の把握だといへる。人間自身の心理作用と、行動作用のたしかな理解である。しかし、すべての人間は集團生活を営むものであるから、その把握、理解は、社會的になされる必要があるが、心理学のみならず、今後社會學が政治的新生活の打開のために、十分活用されなければならぬ順序となるのである。人間の社會生活の十分なる法則理解の上において、日本の政治の刷新と上昇を期し、それにそつて、新生活の全面的能率化を達成すべきであるが、その教養は、老人群といふ頭腦の硬化した階級層に期待することが出来ない。どうしても、新教育を身につけて行く青年群に俟たなければならぬ。

經濟生活は、生産、分配、消費等、廣汎に互るが、こゝに新生活を切開くがために、自然科学が本となるのは、

何人にも、分かるであらう。すべて、生産、消費は物を相手とすることであり、物の性質、法則に暗くは、その利用も、使用も満足には行かぬ。耕地の手入れ、資材の加工、榮養の攝取、悉く、みな、しかりであらう。生産増強の叫ばれる今日、根本的にそのことを達成するには、たゞ高度の自然科学と、その應用である技術の培養あるのみである。我が日本はいま、軍事科學の必要を見ない。たゞ一途に、生産科學と、消費科學の發達を庶幾すべきである。

しかしながら、經濟生活が生産と消費に互るといひ條、その中心をなすものは、交換と分配であつて、經濟學が、主としてこれらの事實を扱ふ理由が、そこに存する。しかるに、生産、消費から轉じて、交換、分配の問題に及べば、われわれはその能率化のために、もはや自然科学に頼ることは出来ない。人間間の交換、分配の事實であるから、人間心理と社會法則に支配されるのであつて、心理學、就中社會學的致意こそこの面の刷新、上昇になくはならないものであるのに、氣付くであらう。そして、こゝにおいても、硬化した老人群の頭腦に俟つのでなく、澁刺、清新の青年群の研究に、すべての期待をかくべきであつて、經濟的新生活の健全なる發達と、青年群の修養とが、如何に緊密に結びつくかが、考へられるところである。

## 5、文化と青年

政治や、經濟面における新生活の開始と、その能率化に並行して、文化の面における新生活が發足されるを要する。文化面の新生活は、政治、經濟等に比して、ともすると閑却され勝ちであるが、その重要性は、決して後者に譲らないのであつて、下に述べる如く、敗戦日本の場合、特別顧慮をおかすべきものでもある。しかし、この文化面における新生活の問題こそ、就中青年群の活躍を求めるところを、銘記せねばならないところである。

文化は、精神的な事項であるが、精神的事項として、かへつて現實的な政治や、經濟生活の根幹をなすものであり、眞に政治や、經濟生活の發展を庶幾せんとする場合においては、より根本的なこの文化の面を充實して行く必要がある。例へば、教育の普及や、さきにもいつた科學的知能や、歴史の經驗を十分ならしめることなくしては、政治、經濟面の進歩は、いふべくして實際には成り立ち得ないのである。殊に學問、科學、道徳、藝術、娛樂等の文化面の生活の昂揚は、敗戦的生活條件のもとにおいて、最も緩やかな規制を受けつゝあるものであつて、むしろ聯合國側としては、日本が、今後、この方面に伸びて行つてもらひたい希望をさへ強くしてゐる。敗戦日本の活路は、それらの點からいつて、専ら文化の面の新生活の打開にありといつてもよからう。

しかし、かくの如く重視される文化生活の、今後における培養、發展のために、一つ注意しておかねばならないことは、宗教問題である。文化面の生活上、宗教的信仰は極く大切な一要素であるが、宗教は屢々迷信をふくみ、且つ獨斷的信念に流れる傾向をもつてゐる。この迷信と獨斷は、今後の日本の新生活に根本的に不必要である。科學精神に背反すること極めて大であつて、宗教的迷信、獨斷を許すならば、科學精神は、決して十分な發

展を遂げ得ないであらう。故に、われわれは宗教的信仰の必要性は認めつつも、新生活のうちにおいて、過去におけるが如きその非文明性を極力排除してかゝらなければならぬ。眞の信仰を培養しつつ、似而非宗教を打倒して進まなければならないのである。

文化面の新生活においても、かくして、科學的特質を附與さるべきであるが、元來、科學は正確な觀察と、合理的推論の上に成り立つところの近代精神なのであるから、科學的であるべきことは、即ちわれわれが事物をたしかに見聞し、違ひなく考へるといふこと以外にはない。文化面の學問、道德、藝術、娛樂等を通じて、今後この特質を發展せしめて行くならば、日本の學問も、日本の道德も、日本の藝術も、日本の娛樂も、國際的に飛躍すべきであるのは、いふまでもないであらうが、その精神のもとにおいては、政治も、經濟もまた推進せられて、眞に文明社會の公明なる政治生活と、活力ある經濟生活が展開せられるやうになるはずである。

しかし、いまいふ正確な觀察と、合理的推論といふことは、各人が自覺をもつて行はなくては成、立ち得ない。こゝに、國民各自の自覺そのものが要求される。自覺せる國民各自が、そのやうな科學的精神をもつて生活するところに、彼等の意志に基づかせる社會、國家の生活原理としての、かの、デモクラシーの眞髓が實現される。かくの如く考へて來れば、今後、デモクラシーの新生活が、主としてその文化生活面に現はれて來なければならぬことが、益々、よく理解されて來るのである。

一言、最後につけ加ふべきは、今後の平和的國際關係において、政治力や、經濟力が物をいふこと以上に、文

化力が非常な決定的要素となるといふ點である。文明社會において、個人の腕力や、財産が支配せず、むしろ教養が第一の尊敬を受ける如く、高度の國際關係において、武力や、財力はその偉力を減じ、かへつて文化が壓倒的勢力となり行く事實がある。けだし、世界の政治的安定や、經濟的秩序の實現されとともに、殘る文化生活の昂揚が、國際的要求と信望の對象となつて行くからである。平和的デモクラシー日本の新生活において、文化面の生活刷新と向上が如何に重大使命を託されてゐるかが、この角度から、またわかつて來ようと思ふ。



本  
論

## 一、社會認識

1 人間と理知 もとより人間は生物の一種であり、生きることを重要である。生きんとすれば、食はざるべからず、着ざるべからず、住まざるべからず。そこに、衣食住といふ、最少限の要求が起る。衣食住のことは、それ自體、生活内容であり、最少限の生活でもあつて、それ以上、經濟生活もあれば、政治生活もあり、また、文化生活もあらう。經濟生活、政治生活、文化生活等も、一面からいへば、衣食住の生活そのものを満足にいとむための、手段、方法たる點もないが、それぞれ獨立した目的をもつであらう。古人は、衣食足つて禮節を知るといつたが、最少限の衣食住の上に、それ以上の經濟生活や、政治生活や、文化生活がなされ、そこに、人間らしい複雑した、全生活が展開するのである。

人間の場合において、全生活が單に複雑なるのみならず、理知を交へていとなまれる點をあげなくてはならぬ。多くの生物の場合では、その生活は無意識になされ、また本能のみによつて嚮導される。植物は感覺さへもなく、動物にいたつて感覺が具はり、その感覺は、生きる意欲となつてあらはれて來てゐる。それを本能と呼ぶのであるが、人間にいたつての本能は、精神といふところまで上昇し、單なる生の意欲たる以上、思索要素をつけ加へて、理知と呼ばれることになる。この理知要素の存することによつて、人間は、生物においても、はるか高度の

生活を行ひ得る。高度の生活といふのは、よりよく周囲の環境に適應し、より充實した存在をなすことといふのである。人間特有の理知は、ひろく生物界内において、人間のものを特徴づけるものだといはなくてはならぬ。

しかし、ドイツのフィアカントが説いたやうに、人間にも高下の區別があり、未開社會のそれと、文明社會のそれとの間に、大きな開きがないわけではない。未開人と、文明人の區別であつて、野蠻蒙昧の未開人は、衣食住の點においても、經濟・政治・文化生活の點においても、文明開化の近代人に比較にならぬ幼稚さを示す。彼等は裸體で、自然の草木・果實・鳥獸を生食し、野山に起臥する。物々交換の經濟、長老支配、咒術・迷信の虜であるが、近代人には、もはや、さういふことはない。これまた、未開人が、同じ人間でありながら、生物たるに近い本能から嚮導されて生活するに反して、近代人が、向上・發展した理知から指導されて生活するからである。

これをもつて人間、殊に近代人の生活に對して、理知が如何に重大役割を演じてゐるかが、分かるであらう。人間は、生物本能以上の、理知の指導のもとに、その複雑・高尚の生活をなし、近代人の場合、特にしかりといふことになるが、しからば、人間的理知は何ゆゑ、かくの如き生活指導力を發揮するやうになるのであるか。理知の生活指導力の成り立つ所以は、何處にありやといふに、それは、理知がその持主たる人間をして、周囲の事物・現象を認識せしめて、これらの環境に扞格・矛盾なく、よく順應・一致した生活をなさしめるからだといは

なくてはならぬ。

例をあげて説かう。普通、本能によつて生活する生物においては、敵である他の生物や、危険の接近に對して、闘争本能とか、脱走本能とかの命するところによつて、敵對行動に出でたり、或は遁走する。犬が猿に挑戦し、鳥が物音によつて飛び立つ如く、そして、本能は多くの場合々々に、その持主の適時の行動を嚮導する。しかるに、如何に本能に基づく行動であるとはいへ、螻蛄が斧に挑戦し、兎が獵師の追ひ出しに引掛かるやうな、誤まつた行動もまた、結果せられよう。狩獵・捕獲・漁業の類は、みな、動物の習性と叫ぶ、本能による彼等の行動の間隙を狙ひとするといへるであらう。かくの如く、生物的本能はしばしば生活嚮導力を失ふことがあるが、人間的理知は、よくその間隙を補つて、より大なる生活指導力を發揮するのである。高度の理知は、本能の陥るところあるべき、生活上の誤まを正だし、錯綜する環境のもとにおいて、適正行動を指示するものである。

もちろん、理知といへども、その持主たる人間に對し、うねに適正行動のみを指導するとはかり、斷言出來ないこともあるのである。いくら考へても、よい智慧が出ないとか、智慧者が智慧に倒れるとかいふことのあるのを見ても、そのことは分かるであらう。ある場合では、理知のために、行動が鈍ぶるといふ事實さへ見られるのである。しかし、それらは、正しい理知に拘はりない事實であるのも、たしかである。正しい理知であれば、必ず、その持主をして正しく行動せしめるであらう。正しい理知を缺くとか、それが誤りとか、不十分のものであるとかいふ場合において、適正ならざる行動が結果され、身の破滅や、失敗が引き起こされるのである。

理知は、正しいものであるかぎり、人間に適正行動を得しめる。けだし、それは、動物本能と異つて、周囲の環境をよく見分け、判断する能力たるゆゑだといはなくてはならぬ。理知は、畢竟、認識能力をなすのである。

2 理知の認識 人間理知が、何ゆゑ生活を指導し、適正行動を指示するかは、理知が周囲の環境をよく観察し、判断する能力だからだといつたが、そこに、認識と呼ぶ問題が存する。

認識とか、認識不足とかいふ言葉があるが、これは、人間が生活を行ふ際、周囲の環境を観察・判断する能力についていふであらう。あたかも、われわれが座臥・起居するとき、事物につまづかず、適当な態度に出るために两眼を要する如く、生活の全營爲に關して理知を必要とし、两眼をもつて事物を見分ける如く、理知をもつて環境を判別し、それに好適した行動に出でる。これが、環境への適應といふものであつて、それなしには、本能に頼る生物以上の複雑・高尚な、人間生活をよくし得ないことは、すでに示唆した通りである。認識なきところに、人間生活は生物生活に墮し、認識不足のとき、人間生活は、十全のものたり難いであらう。

しかるに、この重要な、人間を取り巻いて認識的對象をなす環境たるや、簡單なものでないのであつて、それを大よそ、三つに分けることが出来る。誰も気がつくやうに、その一つは、自然環境である。土地・海洋・山川・草木・動物等がそれであつて、所謂物質界に當るのであるから、建造物・交通機關・工場・器具・機械等の物的設備が、悉くこれに入る。われわれ人間は、その認識を自然認識として行ふわけであつて、自然認識の結果として、その指導のもとに、耕作し、狩獵し、家畜を養ひ、居住し、旅行し、航海し、工作し、運輸するといふことになる。人間最初の自然認識は、個人的にも、社会的にも十分とはいへず、観察不足や判断の誤まちに充ち満ちてゐるが、それらを精密ならしめ、正確ならしめるところに、自然認識の進歩がいたされるのである。認識不足や、常識といふものから、科學的認識に達するものが、それだと稱してよいであらう。

人間生活環境が、この自然環境のみであるとの誤解があるが、それであるなら、人間も、他の生物と變りのない、ごく單純な生活條件のもとにあらう。しかるに、人間はこの世の中に生れるとともに、他の生物のもつ自然環境以外の、重大環境に取り卷かれるのである。社会環境と文化環境とがそれであつて、一は、人間同類の世界であり、他は、この同類とともに作る文明事物である。ある種の動物にあつては、彼等が群居生活をなす結果として、社会環境らしいものがあらう。蟻や蜂、鳥類や羊や、牛馬の場合が、それであらう。しかし、社会環境の發達したのは、人間の場合に限られ、人間の場合においては、さらに文化環境が独自の環境として發現するのである。

人間に對して、社会環境は自然環境に次ぐ第二の環境であり、文化環境がさらに第三環境をなすのであるが、これら第二、第三の二つの環境は、密接不可離の關係を有することをあげなくてはならぬ。けだし、社會を俟つて文明的事物が成り立ち、文明的事物こそ、社會の重要要素をなすからである。いま、その詳細を述べないのであるが、社会環境と文化環境の密なる關聯は、否定出来ないところであつて、古來、人間がこれら二つの環境の認識を行ひ、それによつて生活營爲を計つたことは、當然すぎるところであらう。論語を見よ、バイブルを見よ。

みな、社會、文化兩環境への適應生活を指示したものでなかつたであらうか。とはいへ、人間認識は、この場合にあつても、始めのうちは、極く幼稚なものに止まつたといはなくてはならぬ。觀察不足や、判斷の誤まちに充ち満ちてゐたのである。認識不足と迷信が横行してゐた。その點では、當初の自然認識と全然一致するのであるが、自然認識の發展の比較的速やかであつたのに對し、社會的・文化的認識の方は、非常に遅れをとつたといふことが出来る。認識不足や常識といふものから、科學的認識に達する徑路が、こゝでは、いたつて難事であつた。近代自然科學の長足の進歩に比して、社會科學・文化科學の發達の滯滞が、よく、そのことを語るであらう。

社會的・文化的環境の十分なる認識として、社會科學や文化科學は、何ゆゑ、發達を滯滞せしめてをつたか。けだし、この方面は自然環境は轉へて一層複雑なものであり、且つ、われわれ身邊の事實として、かへつて、感情や主觀性が、その精密なる觀察と正確なる判斷を歪曲し易かつたゆゑである。よく、自分のことは分からぬといふが、人間自身の形成し、生成してゐる社會的・文化的環境の事實に對し、人間は永い間、餘りに無知であり、認識不足であつたのである。しかし、それは、永く許さるべきことではない。身近かの環境であればある程、その認識重要性は、反つて大である。われわれは、今日、その重要性に鑑み、この方面の認識の増強をはからなければならぬ。

社會的・文化的環境といへば、人間が同類と形成する團結であり、共同生活であり、またその上に成り立つ文

明的事物であるが、それらの事實は、關係する人間の意志如何によつて、どうにもなるものだとの舊觀念を、先づ、一擲しなければならぬ。そこにも、自然環境のその如き、多くの法則が支配するのである。われわれは、それらの法則をよく認識して、その法則の上に立ち生活設計をなすことを要する。環境への適應生活があらゆる生物の運命である以上、それを可能にする社會的・文化的環境の認識と、それによる生活設計の緊急性に目醒めてよいのである。

### 3 初期の社會認識

社會的・文化的環境に對する人間認識は、極く古いところから無いではなかつた。人間は、自然に取り巻かれて生活し、また、社會・文化を友とするのであるから、これらの環境に關心をもち、それらの環境を理解しつゝ生きなければならぬことは、前にもいつた。そこで、自然認識が劫初の時代から起つてゐるやうに、社會認識もまた、最古の時期から始められてをつたであらう。たゞ、劫初・最古の段階においては、それらいつれの認識も、いたつて不完全なるものであつたことは、止むを得ない事實であつたのである。

自然認識が、まだ、研究といはれる程の積極性をもたなかつたと等しく、社會認識も、また研究といふべきやうな系統立つたものではなかつた。いたつて獨斷的な考へ方が支配したのであつて、多くは、神がかりの解釋をしてゐた。何か不思議な因縁が、社會を操つる如く想像し、この想像をもとに、對社會的態度がとられてゐたのである。フランスのレヴィ・ブルニールは、初期の人間認識一般、——したがつて社會認識のみならず自然認識も

が、神秘的な感應法則によつて支配されて、いはゞ「論理以前の思考」に墮してゐたのを指摘し、また、人類學者が、未開人を名づけて「呪術人」としてゐるのも、そのためである。

一の社會事實、例へば戦争が起こると、未開人はこれを、彗星の出現に結びつけ、殺した動物の祟りだとし、或はまた、氏神の怒りの結果だとする。戦争といふ出來事が、彗星や、殺された動物や、氏神と不思議な因縁をもつて想像され、その間、神秘的感應關係があるとされる。したがつて、好ましい事實については、その不思議な因縁の源を作爲・培養する仕方を取り、これに反して、好ましくない事實については、それと神秘の感應關係にあるものを緩和し、滅却する態度に出るやうになるが、とにかく、事物・現象間に、恣意的因果關係を考へるのは、近代人の科學精神から見れば、全く話にならぬところである。近代人は、もつともつと、論理に合ふ、筋の通つた考へ方をする。しかるに、未開人は、論理に合つた、筋の通つた考へ方をなさず、それ以前の荒唐無稽な考へ方に捉はれるのであるから、レヴィ・ブリューネルが、それを「論理以前の思考」としたことも、當然の次第であらう。

未開人は、所謂「論理以前の思考」に墮して、自然認識を行ふことも、社會認識をも不十分にしてゐる。それであるから、社會認識は、彼等の場合、誤つことが多く、また、極めて幼稚だといはなくてはならぬ。しかし、彼等は、それ以上の進歩した認識に達し得ぬ事情のもとにあるのであつて、眞面目に荒唐無稽の認識に頼り、好ましい事實については、その不思議な因縁の源を作爲・培養する仕方を取り、好ましくない事實に對しては、そ

れと神秘の感應關係にあるものを緩和し、滅却する態度に出るのである。豊年滿作を願ふときには、異様の儀式を行ひ、或は守護神の宥慮に協なふやうな犠牲を奉まつる。凶年饑饉に見舞はれるならば、その仇をなしたとする異部族の者を殺し、或は自己部族内の不吉の事物を取り除かうとあせる。

未開人が、かくの如く、論理以前の思考にしたがつて、事物の間に神秘の感應關係を立て、それに基づいて生活設計をして行くことは、もちろん、たしかなものとはいへぬ。われわれ近代人であるなら、科學研究をもつて、事物の因果關係を捉へて、よき結果を得べく、その原因を作り上げる方途をとるであらう。すべての文明的技術が、そこに見られることになるが、それにいたり得ない、哀れな未開人は、恣意的因果關係を盲目的に信奉しつゝ、無駄な努力を費やすのである。その仕方は、いまだ科學的技術ではなく、非科學的な呪術だと稱さなくてはならぬ。

そこで、ひろく人類の生活状態を研究する人類學者が、近代人をもつて「技術人」と見做し、未開人に對して「呪術人」の稱號を與へたことは、ことわりだといふべきであらう。呪術人たる未開人は、その認識において近代人と鋭く對照し、その結果として、生活態度において、それだけの缺陷を示してゐるのである。われわれは、人間認識が、如何に人間生活の實際に深い關係をもつかを、この點から、よく理解出來るが、こゝでは、初期の社會認識が、如何に、荒唐無稽になされてゐたかを説明すれば足りる。

初期の社會認識は、要するところ、近代人の常識にも及ばざること遙かに遠しといはなくてはならぬ。けだ

し、近代人は祖先の無限の生活経験をわがものとし、廣大なる同類の見方や、考へ方にも接してゐる。たしかな傳統のうちに育ち、且つ井の中の蛙でもないのである。しかるに、未開人は、それらいろいろの點においても、十分なる境涯に達してゐない者であるから、彼等の社會認識の誤謬と幼稚なことは、仕方のないところであらう。われわれは、彼等を責める前に、彼等のおかれてゐた生活關係に同情の眼をもつて對す必要があらうと思ふ。そして、こゝでも、社會認識といふ一の社會事實が、社會的方面から決定され、解釋されるといふ關係について、注意を拂つておきたいと考へるのである。

#### 4 社會研究の發芽

人間初期の社會認識は、大體、以上述べた如くであつて、無知蒙昧の費りを免れ得るものではない。しかし、人間は一般生物に比して、もとより格段の相違ある理知的存在であつて、理知を有するところに、その認識も發育して行く。それを絶えず刺戟するものは、生活實驗の累積と、次第々に擴げられて行く、同類との接觸といふ事實である。すなはち、生活経験を豊富ならしめるところに、認識正誤の機會が與へられ、同類との接觸によつて自他の認識の比較が成り立ち、より進んだ認識への通路が開かれるのである。すでにいふ、認識そのものの社會的決定性といふことが、また、その間に示されてゐる。

未開人の「論理以前の思考」たる、不思議な因縁關係を想像する認識は徐々に崩れて、近代人特有の論理的因果關係を把握する科學的思考に向ふ道が、そこに、開かれる。それが、開け行くとともに、未開人はあらゆる面において生活を改善し、もはや未開人ではなくなり、近代人の仲間入りをするのであるが、人間の存在が古く、

その來歴の長期に亘るが如く、認識の進歩も永い年月を要し、決して一足飛びに、理想状態に入ることとは出來ない。恐らく數萬年をそれに費し、始めて初期の認識が文明時代の、高度の認識に進み得たのである。

社會認識にかぎり、特に、そのことを略記するを要する。初期の荒唐無稽の認識が、徐々に高度の正確な認識は上昇されるまでは、無限の年代を費さなければならなかつた。社會學の始祖コントは、人間初期の認識が總じて宗教的であつたことを指摘し、その宗教的認識が、偶像崇拜・汎神論・一神論の順序をもつて發展すると稱したのであるが、それにしても、なほ幾多の岐路を附帶せしめ、個々の場合に、迂餘曲折のあつたのを勘考すべきである。況んや、コントにあつては、この初期の認識に次ぐ、中期段階として法律的認識といふ廣大な分野があつて、それから漸く近代人らしい科學的認識に踏み入るといふにおいてをやである。また、社會認識についていつても、初期のものから後期の發展状態までを、一筋の進化段階に綜合することは、慎まなければならぬところである。人間現象は、決して、そのやうな單純化を許容するものでなく、もつともつと、事柄は複雑するゆゑである。したがつて、初期の社會認識は、實に長年月を通して、近代的なそれへ進むといふことがいはれ得るのみ。

さて、初期の社會認識は所謂「論理以前の思考」であるが、一層正確にいふなら、これは認識そのものもつ二要素のいづれについても、缺陷ある認識だつたと稱さなければならぬ。すなはち、人間認識は、一に事實を観察する方面と、二に、觀察した内容を整理する方面とがあり、戦争の事實を見てとることと、見てとられた戦争

事實が、何故起こつて來たかと追及することに分かれたるが、初期の社會認識は、事實の觀察についても、事實の推論についても、ともに不十分だと稱し得るであらう。あらゆる恣意性が觀察面にも、推論面にも入り込んでゐるからである。そこで、それは「論理以前の思考」であるのみならず、「觀察以前の見方」だと稱してもよい種類である。

かくの如き「觀察以前の見方」と「論理以前の思考」といふ認識上の二大貧困本、正確な觀察と推論にまで上昇せられるところに、社會認識もまた、適當に社會研究と呼び得る段階に到達する。そして、社會研究の發芽は、ある意味では、遠く劫初に近い人間にまで溯はられるが、しかし、妥當な見方としては、有史以來の事柄だと見做してよいであらう。部族と稱する未開人の社會が、部族聯合によつて次第にその團結形態を擴大して行き、生活經驗も、他族との接觸も豊富・多様化して、所謂民族形態に發展するとともに、歴史の記録がなされ、社會認識もまた、格段の進歩を來たし、こゝに社會研究の發芽に接することが出来る。古代支那・印度・近東諸民族における社會認識が、それであつたのである。

支那において、印度において、また近東諸民族において、なんらかの社會研究を生ぜぬ處はなかつたのであるが、その研究が、みな、實際面の要求、特に政治の要求に推進せられたことをあげなくてはならぬ。儒教のふくむ社會研究を見よ。バイナルの藏する社會研究を見よ。すべて、社會認識はもともと生活のためにする環境把握に他ならないのであつて、實際的要求に源を發することは疑ひを容れぬ。しかしたゞあまりにその要求に直結せと断定せねばならぬ。

コントは、この發芽する社會研究の特徴をもつて法律的だとしてゐる。それだけ立法者の立場の介入を認めるわけであるが、被治者側のものとしても、バイナルに見る如く、怨嗟的・適世的に墮せざるを得ない。曇りなき觀察眼をもつて、筋道正しく社會事實を觀察し、推論するには、まだ、大なる距離が存したことを證するものであつた。

5 社會研究の發育 古代支那や、印度や、近東諸民族において社會研究が發芽したが、それらのものが實際的要求や、特に政治的要求に追ひかけられて、嚴正なる科學研究として、まだ十分資格を得るにいたらなかつたのを指摘したが、これも根本的にいへば、當時の人間の生活經驗と他民族との接觸が、當時餘程豊富となり、推し擴ろげられたにもかゝらず、近代人のそれに較べて、なほ限定されてゐたからのことだといはなくてはならぬ。繰り返していふやうに、認識の適正化は、認識の實際的試煉と反省に俟つものであつて、それには、一層累積された生活經驗の寶庫と、より擴張された諸國家・諸民族の文化的交流を必要ならしめるのである。

しかるに、東洋においても、支那民族の繼續的存在と、それを中心とする四方への交通の發達は、いまいふ二



條件を徐々に充實して行つたのであるから、社會研究は、次々進歩する状態のもとに考へられたのである。しかし、これを西洋の場合に比すれば、稍や後退性を示した點を如何ともしがたい。すなはち、ギリシヤ、ローマ等では、急速なる民族的・國家的發展あることによつて、生々しい生活經驗の増強が行はれ、一方、地中海周邊の多數の異社會と交通關係が緊密となり、この好ましい認識促進條件下に、社會認識は、つとに、飛躍的發展をあらはすにいたつた。ソクラテスよりプラトーンを経てアリストテレスに系統をひく、ギリシヤに早熟した社會研究や、中世期を通して、ローマのキリスト教學中に示されたものが、その事實であつたのである。

西洋において、認識高度化を刺戟する二條件は、さらに、ギリシヤ・ローマの傳統文化を繼承しつゝ、西ヨーロッパ諸民族が新たに接觸を起し、ヨーロッパ以外の世界各地と交通關係をもつにいたつて、いよいよ良好な狀況のもとにおかれた。ルネッサンスが、その結果現象であつて、ルネッサンスは文藝の復興たる以上、社會研究上劃期的な意味を有する。かくて、マキアベリが、國家や、政治や、法律や、道徳に關して、冷酷なる解釋を與へた如きも、一面から見れば、それだけ客觀的に嚴正な科學的研究に近づいた證據と見做して、差支へないであらう。そして、この趨勢をうけて、近世の初め、ベーコンが、自然認識のみならず、社會研究が客觀的に嚴正のものであるべきことを、人間現象についても、觀察研究は大切だとして説いた言葉は、近代社會科學にセマメの扉を開いたものであつたとしてよい。

とはいへ、注意せねばならないことは、こゝに發達して來た社會研究は、今日、われわれが社會研究と指稱するのは許されるにしても、その當時においては「研究對象たる社會」の觀念を、全的に氣付いてゐなかつた事柄である。マキアベリが専ら國法を論じ、ベーコンが主として國事にふれた如く、當時の人々は、國家の存在を知つてゐたが、社會の存在に、無關心であつたのである。人々は、高々、民族生活を云々することはあつても、その政治的表現である國家の儼然たる存在に眩惑されて、表立たない社會諸事實を正視する暇まがなかつた。そこに、社會研究は、研究態度の逐次的進歩のあつたにかゝらず、對象把握の面において、十分でない事情のもとにおかれたのである。

今日でも、人間生活が全面的に國家の枠内に行はれ、國家が人間生活を總體的に抱擁するといふ見方が存する。この見方は、世間の常識であるのみならず、強盛なる國家の場合、多分の眞理をもつ見方であるともいへよう。しかし、國家崩壞のときとか、民族や、政團や、階級等の勃興のときとか、人はその見方の十分ならざる點に目醒め、また、平常でも、事實を深く分析するにいたるならば、必らず、疑ひを生ずるようになるのである。國家が、人間生活を總體的に抱擁するのは、その統制作用に關することであつて、統制される對象面に係はることはではない。換言すれば、政治に關するかぎりの形式的なものであり、生活營爲に關する内容的なそれではない。さらに平たくいへば、取締りが國家から來るといふだけであつて、生活自體は社會的になされる。畢竟、國家は社會といふ下部構造に對して上部構造をなすのであるが、永い間、人々は、この上部構造のみを認めて、下部構造把握に立ちいたらなかつたのである。

「國家及び社會」といふ對句があるが、これにおいては、國家的上部構造と社會的下部構造とが、示唆されてゐるのを見よう。われわれは、この見方の方が、より事實に近く、一層真相をつかんでゐるのを見出すであらう。しかるに、この見方自體、人間がそれに達するまでには、大なる試練を要し、且つ、幾多の年月を閑しななければならなかつたのである。

とにかく、ルネッサンスを経て近世に入つて、社會研究は、劃期的段階を迎へたのであるが、すでに長足の進歩を來たした研究態度が具はつたにもかゝらず、對象把握の面に、いまだ十分の意識化が伴はないのは悲しむべきであつた。そして、こゝにも、生活經驗、或は文化交流の外的刺戟が、それをそれとして放置してゐた、現實理由が指摘されるであらう。

6 社會の發見 人間が、社會研究の對象たるべき、社會に氣付き、これを把握することに成功したのは、フランス革命を契機たらしめることであつた。十八世紀末に勃發したこの革命は、いまだから政治革命と見られる如く、國家の政治機構の改革を企圖し、それによつて、國家に屬すと考へられた、すべての人間生活の積弊・舊態を破棄しようとしたのである。かくて、革命運動の進行とともに、フランス憲法の如きは、十數回に亙つて改正され、國家はその度毎に、より望ましいものに編成替へされて行つた。したがつて、もし國家が人間生活の總體を完全に内包するものであつたならば、革命により積弊・舊態の悉くは所期の如く破棄せられて、人間生活は、こゝに、その相貌を一新すべきであつたのである。

しかるに、フランス革命の經過は、果して、そのことを立證したであらうか。不思議にも、結果は、豫想を裏切り、殆んどその効果があらはれなかつたのである。なるほど、多少の積弊・舊態は除去せられたのであるが、それらは、直接、國家統制、すなはち政治に關係したのみであり、爾餘の廣汎な人間生活の全領域は、舊態のまゝ、殘留したのである。革命の目指した、人間の自由・平等・友愛等の、光輝ある理想の如きは、その片影すらあらはさなかつた。しかれば、豫想に反するこの結果は、何を人間に教へたであらうか。もともと、理知的人間のことであるから、そこに、なんらか、解釋と説明を求め、解釋・説明を行ふところに、啓蒙と發見が成り立つたのである。

この時代を代表して、問題の解決に努め、それぞれ成功を謳はれた思想家として、ドイツのヘーゲルと、フランスのサン・シモンをあげ得るであらう。ヘーゲルは哲學者として形而上學的解釋を與へ、これに反して、サン・シモンはより現實的な研究者として、むしろ科學的な説明を下した。ヘーゲルが、得意の辯證法をもつて事實をいひくるめんとしたのに反し、サン・シモンは、觀察・推論ともに、卓抜なる力量を示し、前者が、古い學問態度を承けついでゐたのに對して、後者は、斷然、研究上の新態度を表明したのである。

すなはち、ヘーゲルは、革命の渦中に立つフランス國家をもつて、いまだ眞の國家をなさないものだとして斷定する。それは、國家といふべき至高の形態にいたらざる、市民的社會と呼ぶ、精神的動物界たるものに他ならぬ。それであるから、この不完全な市民的社會が、革命の前後を通じて、缺陷・弊害に充滿するのは、當然すぎ

こは當然だとする。そもそも、人間のなす團結には、道德中心の家族と、これに對立する法律を原理とする市民的社會と、さらに、それらの兩者をより高きレヴェルにおいて綜合する、倫理を基準とする國家との三形態が存する。これら各形態が、辯證法の正・反・合といふ論理系列を代表するのは、もちろんであるが、もし革命的フランス國家が眞にいまいふ國家形態をなすものであるなら、内部のあらゆる人間生活は、必らず、理想状態を現出すべきであつたのである。

このヘーゲルの解釋は、何と評すべきであらうか。彼の解釋は、畢竟、事實を無視する獨りよがりの説明だといはなくてはなるまい。フランス國家は、ヘーゲルが何といはふと、現實のたしかな國家であつた。このたしかな國家が、革命せられた後においても、積弊・舊態に充滿した事實は、ヘーゲル自身の獨斷辯證法をもつてしては、遽かに説明しがたいものだと思ふべきであらぬ。

サン・シモンの説明するところによれば、國家は人間生活の法律的形式に過ぎないものであつて、その現實共盤として、別に「社會」が存するのである。社會が本であつて、社會のあるところに、國家形態が、制定されて來る。そこで、國家形式のみに如何なる改革を行ふとしても、社會共盤にいたらない間、人間生活が改善されないことは、當然のわけである。フランス國家が、革命を經過し、實質・内容を變へないのは、不可解の如くであつて、實は、至當のことだといふべきである。サン・シモンは、この説明を本に、國家の政治革命よりも、社會の經濟革命の必要を示唆してゐる。彼の門下に、バザール、アンファンタン等の、改革運動を代表する社會思想

思想家を出だし、その運動が、フランス革命に次ぐ、七月革命、二月革命に母體化せられたのは、著明な事實であつた。それ以後、マルキシズムの擡頭にいたる、社會思想と社會運動が、彼の傳統のもとに展開したのも、周知の事實であつたのである。

要するに、サン・シモンの説明するところは、ヘーゲルのそれに比して、一層進んだ觀察たり得たのである。われわれは、その科學的價値を高く買はなければならぬ。しかし、それぞれの説明の當否は別にし、これら兩思想家によつて國家以外の社會の把握が、始めて行はれたのは、注意したいと思ふところである。ヘーゲルは、社會に對して市民的なる形容詞を冠し、且つ、事實を形而上學上の概念とした。サン・シモンは、それを科學の對象たらしめたのであるが、しかし、それもなほ、彼特有の概念たるに止まるとなすべき點が存する。たゞ、これらの思想家によつて、社會概念が、最初に取り扱はれたといふことは、何としても劃期的なことであつた。思想史上、このことを「社會の發見」と呼ぶ所以も、ゆゑなき事柄ではないであらう。

7 社會科學の濫觴 社會研究は、近世初頭以來の研究態度の進歩によつて、殊に、社會對象の意識的把握によつて、頗る良好な發展状況のもとにおかれて來た。これら兩者の結びつくところに、社會科學の眞の濫觴が期待されるが、それは、實に、英國十七世紀後半の、經驗主義の諸學者の手によつて遂行せられたのである。十七世紀後半といへば、かの「社會の發見」に先立つこと一世紀餘りであるから、社會の發見のいまだしい當時において、それを對象たらしめて、社會科學が發生したことは、妙な話であるが、こゝでは、對象たる社會

の概念把握を問題とせず、その事實的取り扱いに重きをおいていふのである。社會の實際的考究を、科學的態度のもとに開始したのは、ホッブスなどの合理主義哲學への反動たる思索に對し、經驗を重んじた現實學者の一團だつたのである。

これらの經驗主義學者は、國家に對し、政治・法律に對し、未だひろく社會事實一般に對して、單なる思索と獨斷的論理をもつてするのではなく、直接觀察と捉はれざる推論とを適用せんとする。したがつて、彼等は研究態度において、本質的に科學的たり得たのであり、しかも、研究對象としたところのものが、今日からいつて、社會諸事實であつたのであるから、ドイツのゾムバルトが、社會科學の創始を溯つて、これら一團の英國經驗主義學者の功績だと斷じたことは、卓論だつたといへるであらう。われわれは、ゾムバルトの業績を稱へ、同時に、英國經驗主義學者の功績を事新らしく回想せねばならぬ。

しかして、いよいよ増強の一途を辿る、ヨーロッパ諸民族の生活經驗と、諸民族間の文化交流とは、國家・社會の諸問題に對して、英國經驗主義學者の着手せる社會科學を、ヨーロッパ知識階級に移植し、發展せしめる形勢を馴致したのである。このことは、當時最高の文明國家であつたフランスにおいて、特にしかりであつたといへる。モンテスキュー、コンドルセーその他の「百科全書學者」と稱せられる面々の、社會科學活動が、その結果であつて、フランスは、宛然、社會科學の祖國たる榮譽を取得するかの體を呈したのも、その頃のことであつて、この好ましい傳統のもとに、さきあげたサン・シモンの如き大立物の出現にいたつたのも、ゆるなき事柄では

なかつたといへよう。

さて、社會科學が、英國十七世紀後半の經驗主義者の中に濫觴を見た際、國家や社會がその研究題目であつたといつたが、社會科學は、發達せる形態にあつても、つねにその範圍を對象たらしめたといひ得る。ひろく國家社會について科學研究を行ふものが社會科學である。そこで、社會科學は、實際上において、國家科學を兼ね社會科學と國家科學の間に、著るしい相違はないことになる。しかし、このことは、「社會の發見」によつて得られた、サン・シモンの見解と、多少、矛盾して來ることを如何ともしがたいであらう。サン・シモンの見解にしたがへば、國家と社會とは、なほ對立を續けるものであつて、その對立において、國家科學に對する、社會科學の獨自性が、示唆せられてゐる關係さへも存するのである。

しかし、われわれは、「社會の發見」によつて得られた社會概念が、専ら概念的なものであつて、必らずしも、事實的なものでなかつたことをいつて來てゐる。國家と社會の對立問題に關しては、その點を深く掘り下げるの必要であらう。サン・シモンは、國家は法律的形式にすぎず、社會こそその實質的基盤だと稱してゐるが、よく考へて見れば、國家も社會も、人間團結たる點では、本質的に同種類のものである。「國家とし、他を社會と呼ぶは、種類以上の、種屬的名辭であらう。いま、社會科學として、人間團結諸形態をひろく研究しようとするにおいては、その一つである國家のみを故意に除外し研究外に置くのはよろしくない。もともと事實に重きをおいて、概念そのものを二の次ぎとする科學研究上、許さるべき措置ではなからう。

そこで、『社會の發見』によつて得られた、國家と國家以外の社會の並列的區別は、當然喪失すべきものであつて、爾後の研究經過は、そのことをよく完遂したのである。社會科學のヨーロッパにおける發展は、國家をもまた一の社會形態として、民族・部族・階級・農村・都會・家族等の他の社會諸形態の列位におき、それらすべての團結各形態を、上位の社會概念をもつて、綜合する。國家は、社會各形態と並列するも、社會は國家に並列せず、國家そのものにおいても實現される、より根源的な人間團結だとするのである。

社會科學のうちにおいても、社會學の新たな出現は、特にこのことを決定化したのであるが、とにかく、これによつて、舊國家諸研究は、社會科學といふ新研究群のうちに、包容される結果を生じた。舊國家諸研究も、近世の始め以來、漸次、科學的態度のもとに發育し、特に十七・八世紀の英國・フランス等の文明諸民族において、格段の發展を示すにいたつたのであるが、新しい酒は新しい革囊に盛らざるべからず、あらゆる舊套を新興科學から排除し、一層の發達を期さうとする場合において、社會科學の新旗幟を掲げることが、形式以上の意味を有するであらう。實際、社會科學のそれ以後の興隆が、よく、その事實を立證したのである。

8 社會學の創始 「社會の發見」によつて名高い、フランスのサンシモンは、社會概念の一應の提出によつて、社會科學の對象把握に貢献した思想家であり、その門下に、國家革命以上の社會革命を企圖した、最初の社會運動家の一團を出したのであるが、これら社會運動家に伍して、より眞面目に、社會科學の方面を代表する者として、オーギュスト・コントのあらはれたのは、われわれからいつて、特筆大書せねばならないところであらう。ただし、このコントによつて、社會科學のうちでも、社會學といふ新研究が着手せられ、その學名までが造語せられたからである。コントは、一七八九年、南フランスに生まれ、その主たる研究活動は、十九世紀前半に互つたのである。

このコントにおいて、國家と社會の並列的な見方の如きも、清算されてゐるのである。すなはち、國家は社會的一形態にすぎずと思惟され、それと同時に、國家が人間團結進化の一段階をなすとの考察が支配する。人間團結たる社會は、一種の生活體として、生物體に比すべき有機體をなしてゐる。したがつて、成長・發展するものであつて、社會のこの成長・發展は、進歩といふ一言につきる。社會の進歩は、その歴史的來歴に示されるものであるが、一層法則的なものとして、三段階に綜合される。最初の宗教的・軍事的段階、中間の形而上學的・法律的段階、そして最後の實證的・産業的段階がそれであつて、このことは「三段階の法則」として、社會研究上、最も根本的な理論となる。以上それぞれの大きな段階のうちには、さらに細かな發展小段階が區別せられるが、その全體の認識が社會の進歩を把握する、社會學の研究任務をなすといふ。

社會は、いま社會學において、時間的繼起關係にしたかつて考察されるわけであるが、社會はまた、その空間的存在關係に應じて、吟味せられることを要する。社會は有機體であるから、その有機的關聯を、分析する必要があるのであつて、そのことは學問上、秩序の問題である。この社會的秩序の事實を取り扱ふものを、社會學と名づけよう。さきの社會學が、社會の縱の關係を研究するのに對し、社會靜學は、横の關係を研究するの

である。これら二様の研究によつて、社會の全般的考察が満足され、その全體をもつて、社會學となすのである。社會學は、もちろん、社會の科學的研究でなければならぬものであつて、手輕な理解として、「社會物理學」としてもよろしい。

コントが、社會物理學の觀念のもとに、社會學とその二大部門を構想したのは、社會研究を社會科學として發展せしめて行く、當時の潮流に掉さすものであつたといへよう。いな、彼は、當時の諸學者に先立つて、社會研究の科學的態度を力説・強調したのである。その點を考慮し、且つ、社會研究上、彼が始めて學の體系を提出したこと、さらに、新たに學名までを冠したことを參酌すれば、コントが社會學の始祖たることは、何人も異議なきところであらうと思ふ。

コントの社會學創始の功績は、かくも顯著であるが、しかし、彼といへども單獨の力をもつては、社會學の新研究を、恐らく確定するにはいたらなかつたと惧れられる。學界は、つねに保守的であり、傳統勢力が支配してゐるのである。しかるに、幸ひなる哉、社會科學の祖國たる英國において、彼と時を等しうしてハーバート・スペンサーがあらはれ、期せずしてコントの企圖と符節を合するとき、社會學の試案を發表するにいたつたことは、斯學の確立に對して、百萬の援軍を送つたものとするを得るのである。

スペンサーもまた、英國固有の經驗主義の感化のもとに、社會科學の信念をたしかにしてゐた。そして、社會進化論の重要視や、社會有機體の力説や、社會動學・社會靜學の兩部門制の點についても、コントと偶然なる一致を示してゐる。これらの新研究に關して、スペンサーがコントから學んだのは、僅かに社會學の學名だけであるが、これら二大學者における研究内容の偶然の一致と、學名の統一とは、社會學をして、學界内部に強硬なる市民權要求をなさしめることとなつた。このことは、十九世紀半ばのことであるが、學界内のこの新事態が、さらに、當時の實際社會における、社會研究要望の客觀狀勢から支援せられたことも、われわれとして、格別、注目してよいところであらう。

すなはち、かの七月革命や、二月革命の社會動亂が、當時の文明國たるフランスに繼續的に勃發し、社會不安が爾餘の各國に瀰漫するとともに、社會運動はいよいよ猖獗となり、社會革命思想が簇生する有様であつた。すべては、産業革命以來の資本主義制度に反噴するものであつたが、この社會動搖の贊否いづれの陣營においても、いまや、社會の問題と事實は、これを出來得るかぎり十分に理解しておく必要に直面した。共產主義、社會主義、乃至無政府主義諸思想にして、この頃、理論的に體系づけられないものなかつたことは、まさしくその消息を傳へるものであつたといへよう。われわれは、マルクス主義理論の樹立を、それを表徴する事實とするが、その形勢は、側面から、社會學の建設に對して良好なる環境條件を用意したのである。

**9 社會學の發展** コントの社會學は、スペンサーの共鳴を得て、立場を強化して行つたが、こゝに、注意しておきたいことは、彼等の創始し、建設した社會學は、かの社會研究の傳統のもとに、舊國家科學を擁するものであつたからして、その形態は著るしく大規模のものであり、社會科學の全體を代表したといふこと

である。新社會學といつても、一見、その頃の社會科學と、學問形態上、變はりはなかつたといひ得る。強ひていふなら、科學的研究態度を一層推進せしめた點、社會有機體説や、社會進化論を導入した點等が、新味をなしたといふのみ。かくて、コントも、スペンサーも、社會學が特に限定された社會科學の一つだといふ意識をもたず、新形態の社會科學そのものだとする、暗黙の信念に、支配せられてゐたのである。コントが、ひろく科學全體を分類して、數學・天文學・物理學・化學・生物學・社會學等の六大科學としたことは、よく、その事實を物語らうと思ふ。

當時のヨーロッパ各國の社會狀況は、この形態にあつても、社會學に大なる期待をかけるほどのものであつた。社會學は最も斬新なる社會科學を代表し、魅力のある多くの學説にも富んでゐたからである。したがつて、斯學は、その祖國たるフランスや、英國はもちろん、爾餘の各國にも、急速の傳播を見ることになつたが、十九世紀後半の事實としては、普佛戰爭後、一敗地に塗れて社會再建の要望に燃え立つてゐたフランスが、その中心地帯をなした。ル・ブレイの社會調査や、タルドの模倣論や、デュルケムの社會拘束説等が簇出し、コントの傳統とともに、フランスは、宛然、社會學の王國たる觀を呈してゐたのである。

ル・ブレイは、研究方法上統計法を導入し、個々の社會事實を精細に調査する仕方に出てゐる。その家族調査の如きは、喧傳せられたものであつて、いまの、米國における社會調査に先鞭をつけるものであつた。ル・ブレイ自身は、調査した事實の説明に關して、社會的・文化的環境を重視してゐたが、彼の學派は、やがて自然環

境の過當の尊重に傾むいたのである。このル・ブレイ派に對して、タルドは、社會心理を重要視し、社會心理を説明する鍵として、模倣といふ現象を指摘し、それを支配する二、三の法則を顯現するに成功した。彼は、模倣の法則によつて、社會を説明し得ること、あたかも、物理學上、波動の法則の如しと誇つてゐる。タルドの出現とともに、社會心理學の傾向が、急激なる擡頭を示したことは、特別注意せられてよい點となる。

このタルドと對抗して、フランス社會學の王位についた者はデュルケムその人であつた。デュルケムは社會諸事實を分析して、結局、社會的人間生活が社會の側から著るしい教育的感化や、慣習的影響や、法制的支配を受けとり、これらの拘束下に、事實上の生活現象が展開する點に着目し、社會學において問題とすべきは、この社會拘束であり、したがつて拘束主體たる社會諸制度の把握が、努められねばならないことを宣言する。彼の學派は幾多の優秀な學者に富み、世に「社會學派」と稱せられる、社會科學者群を形成した。そして、社會拘束を原理とするこのデュルケム學派の立場は、社會學主義と呼ばれ慣らされて來てゐる。

以上の、社會學のフランスでの隆盛は、大體、十九世紀末まで續いた。しかるに、フランス的社會學の形態は、さきにもいふやうに社會科學全體を兼ねるものであつて、兩者は、その範圍において、宛然同一學問だといふ印象を拂拭できないものであつた。この點は、社會學の實際社會からする要望如何に拘はらず、學界の問題として放置すべき性質のものでない。果然、斯學がドイツ學界にも入り込まうとするとともに、入國許可如何をめぐつて、そのことが問題化して來た。ドイツにおいても、當時すでに、テニニースの「ゲマインシャフトとゲゼル

シャフト」の如き、有数の名著があらはれてゐたのであるが、社會學は、先づ、科學的市民権を争ひとらねばならなかつたのである。

社會學の市民権獲得の努力において、大なる貢献をなした者は、ジンメルなのである。彼は、社會學が人間間の相互作用、すなはち心的相互作用を主題として研究を進める點で、社會の綜合研究でありながら、しかも、特殊な一個の社會科學であると主張する。社會學は、社會科學の全體にあらず、それに屬する一獨立科學だと稱するわけであつて、彼は、その獨立性を、社會學の主題とする心的相互作用が、社會の形式たる點から、内容に關する他の社會諸科學の列位に加はらざる所以をもつて説明した。ジンメルのこの卓抜なる説明は、遂に、ドイツにおいても社會學の科學的公認の形勢を打開し、フィアカント、フォン・ヴィーゼ等、それぞれの業績を生ずる結果を招來したが、こゝでも、第一次ヨーロッパ大戰後の、彼地における社會再興の實際的要求が、社會學の發達に根源的動力たり得たことは、忘れられてはならないところである。

社會科學といへば、もともと、複数の存在であつて、主なるものをあげても、國家學、政治學、法律學、經濟學、統計學、民族學、言語學等々を數へるであらう。社會學が、それらの總體・總合であるとの見方は誤まりであらう。この誤まちを正だし、専門的な社會科學としてこそ、斯學の眞の完成の道は開ける。ドイツにおける科學的市民権の争ひの如きは、斯學の發達上、好ましい試煉であつたといふことが出来るであらう。

## 10 研究組織の整頓

第一次ヨーロッパ大戰後のドイツにおいて、社會學が頗る躍頭したのは、社會

再興の要望によるといふ點で、曾てのフランスでの先蹤を聯想せしめるものであるが、これらの事實は、ともに、學問研究が、實際的社會狀勢から條件づけられる點を、物語つて餘蘊がないであらう。すでにわれわれは、社會研究の科學的進歩が、生活經驗と文化の交流といふ社會狀勢によつて推進せられたことをいつてゐたが、社會學の如き社會的科學は、就中、社會的問題の存在によつて、世間の興味を惹きつけ、學界の研究焦點となつて來るのである。この點からいふとき、平常のヨーロッパは、何といつても、幾多の傳統のもとに、一定の社會秩序の支配する處であつて、アメリカの如く、新社會を處女地の上に建設して行く天地でない。したがつて、ヨーロッパ各國において、革命や戰爭を契機として、一時的に社會問題があらはれ、社會學を促進することのあるに對し、新社會たる米國その他においては、恒常的に社會諸問題が存し、それらの存することによつて、社會學は間斷なき發展の動因に惠まれるのである。

かくいふことにより、われわれが指摘したいのは、近年の米國社會學の急激なる進歩の足跡である。米國は、夙に、コント、スペンサー等を彷彿せしめるウオードの大規模な社會學説を展開したが、このウオードの學説は、社會心理に重きをおいた。彼の以後、米國社會學が、心理學的傾向をとり、それがギディングスの有名なる同類意識説に一度大成せられたことは、偶然でなかつたであらう。しかし、米國はその範圍においてひろく、その社會學説もまた多様であつて、サムナーの流れを汲む人類學的傾向や、はるかにフランスのル・ブレイに倣ふ社會調査派等、主なるものだけをあげても、相當なものにのぼる。社會學の數と、國柄からする彼等の活潑・進



取的なる研究は、いまや、社會學がアメリカ的科學たるかの如き印象を與へつゝあるほどである。

米國社會學は、米國の國際的地位の向上とともに、東洋に於いては、支那の學界に支配的感化を及ぼしつゝある。これに對して、我國の學界は、從來からドイツの影響を受けること多く、殊に、近年ドイツにおいて流行を見た、文化社會學と稱する一派の傾向が、我が社會學界に紹介・宣傳されたのである。文化社會學は、研究上、かの文化環境を特別主要視せんとするものであるから、ドイツ觀念論の哲學的傳統を承けつぐと同時に、一面においてマルクス主義理論とも接觸を保もち、また、フランスのデュルケム派に共鳴し、米國の人類學的傾向（文化人類學）にも連絡のある、いたつて幅のひろい研究企圖として認められる。

現代社會學の發展狀態は、大略、以上に述べた如くであるが、しかし、各國における種々なる學派や傾向の發生は、反つて斯學の印象をして蕪雜の觀あらしめないわけではない。社會學は、果たしてどこに重點があるのか怪しまれる點なしとしないのである。こゝにおいて、曾てジンメル當時の社會學の根本問題が、再び擡頭を見るのであつて、ドイツ近來の社會科學者と稱される、マックス・ウェーバーその人の如き、斯學の方法論に精根をつくしたのはゆゑなき事柄ではなかつた。われわれは、いま、ウェーバーの解決を詳述する暇がないが、彼は、彼の立場において、社會學の對象の嚴密なる規定と、その對象を研究して行く正確なる方法とを顯現したのであつた。このウェーバーの試みに示されたやうな、社會學の根本問題の再吟味は、今日、なほ必要だと思惟せられら。そして、特に、各國に展開しつゝある學的諸傾向を整理し、秩序づける必要を認めるのである。

我國などは、明治時代以來のこととして、ひたすら、海外の研究や、學說の輸入と紹介に遑まなく、今次の世界戰爭前、我國文運の發達にもかゝはらず、社會科學方面においては、多くは、外國の糟粕を嘗め來たつたといふに止まる。しかるに、這般の敗戦は、國家として如何にも遺憾なことであるが、この敗戦を契機に、我國は社會再建の一大責務を負ふこととなつた機會に、社會認識・社會研究・社會學に對する要望は、期せずして、湧くが如くに熾烈化して來てゐる。我國社會學は、今日、曾てのフランス、ドイツ、そして現代米國におけるが如き、いたつて良好な發展條件のもとにあるといへるであらう。社會學研究者は、今後、獨自の建前をもつて、日本の社會學の開拓と、それによる日本社會再建と、さらに、それを通しての、わが日本の文化的國際進出を企てなければならぬ。

私自身は、戦前、戦時中から、現代社會學の上述せる研究組織の整頓と、研究推進のため、體系的三部作（改訂社會學原論、集團社會學原理、文化社會學原理等）を著し、また、それに附帶する幾多の研究を公刊したのである。私の信するところによれば、現代社會學は、嚴密なる方法論の基礎の上に、人間團結たる社會集團と、共同生活を意味する社會過程と、文化と呼ばれる社會形象の三事實を、主たる研究題材となすべきものであり、それによつて、社會的理論・法則を顯現すると同時に、顯現せられたそれらの理論・法則の把握のもとに、實際社會の革新・改善の指導に任じなくてはならぬ。社會學は、それ自體、科學であるとともに、その應用において實踐的たらねばならないとする。斯學の今後の發展は、必らずや、それらの點を確認するであらうと思ふ。

## 二、人間團結

1 個人と社會 社會學をもつて、特に人間社會事實を認識・研究するのは、人間生活が、個々離れ離れの形においていとなまれず、個人々々が互に相倚り、社會を形成してなされるためである。けだし、その場合にあつて、人間生活は個人生活の組み立てとして解釋さるべきでなく、社會生活といふ、特殊の現象として説明さるべきであるからである。個人と社會の間には、譬へていへば、物理學上の原子と元素、生物學上の細胞と有機體に類する關係が支配し、個人は、社會的要素たる意味において、その現實生活を行ふことが忘れられてはならぬ。もちろん、個人は生物的個體として獨立した存在をなし、その生理や、心理は、獨自の問題として科學研究の題材を供する。生理學や、心理學の存する所以であるが、しかし、人間生活は、この生理學や心理學だけでは、十分説明しきれない事實に充滿するのである。

例へば、人間は一定の運動カロリーを必要として生活し、それが西洋人の場合、二千五百、日本人の場合、二千三百單位であると計算せられてゐる。これにしたがつて、人間は食慾を有し、必要カロリー以下の食糧では空腹を感じ、同時にそれ以上の量に達すれば、満腹感をもつやうになる。しかし、これらの生理・心理的理論だけで、果して、人間の食生活は説明されるであらうか。曰く、いなであつて、先づ如何なる種類の食品によつて

二千數百カロリーの必要熱量を攝取するかは、社會事情によることであり、次に、同じ必要熱量をとるにしても、調理や、攝取の様式が異なり得る。これは全然、社會的に決定されると見做さなければならぬ。それどころではない。具體的人間は、社會事情の如何によつて、必要な生理的熱量以上のものをとり、また、時としては、それ以下ある程度までの減量を忍ばなければならないことすらある。空腹感や満腹感といつても、社會的標準が、つねに、物をいふ點を考へる必要があらう。

かやうに考へて來ると、個人と社會とは、ある對立を示すのを發見しよう。個人が社會において生活する結果、個人生活が、社會狀勢のもとに歪曲されるといふことである。たしかに、社會改造思想のうちには、この點からして、個人の全自由の生活を謳歌し、それを規制する、不自然な社會條件の排除を企圖するものが存した。古くは、ルソーの「民約論」にあらはれた思想であり、近代無政府主義の如き、最もよく、その立場を代表する。無政府主義といへば、單に、國家、國法、政府等を否定する思想であるかのやう解され易いが、その眞髓は、個人生活を社會的桎梏から解放しようとするものであつて、説くところは、個人に對する社會の否定的把握である。

個人に對する社會の關係を、無政府主義における如く悲觀的に取り上げ、或はその反對に、國家主義に見られるやうに、樂觀的に考察する場合もあるが、そもそも、個人と社會を對立せしめることが、誤まちだと稱し得るのである。個人と社會とは、これを概念上引離して考へることは出來ても、事實問題たるかぎり、その分離は好

ましいものではない。両者は、實際上、密接不可分關係に存するのであつて、故意の分離や、對立的考察が、事實の認識を誤まちに導びく。われわれは、先づ、その關係の十分なる認識から出發したいと思ふ。

人間は孤立的個人として、生存するものではないのである。多くの生物、殊に、高等哺乳動物によく立證せられる如く、生物個體は群棲すること、生存目的を達してゐる。蟻や、蜂、その他の昆蟲、魚類等にも、群棲するものがあり、溯ぼつては、植物群落の事實にも接するのは、そのゆゑからであつて、この群棲・群落は、生物間の生存競争が、種屬的になされるかぎり、自己防衛と對敵攻撃上、最も有數な生活形式だと判斷される。人間が、最も優れた高等動物として、孤立状態において生存せず、群棲的社會をなして生活するのは、生物的生活經驗の賜物であり、いはゞ、適者殘存の生活形態の隨一だと考へなければならぬ。それであるから、群棲的社會生活は、人間生來の性質となつてをり、いまさら、それを廢棄出來得るものではないのである。

孤立的人間では、生存が脅威され、生存不可能に陥ることは、生物的事實であるが、その生活經驗は、人間をして、心理的に於いて次の如く仕立てあげてゐる。すなはち、孤立状態においては、淋しき、苦しきの不愉快を味ははしめ、それが昂すれば、人の幻覺・錯覺を生じ、遂に神經病に見舞はしめる。獨房に拘禁される囚人の陥り易い、拘禁病などは、たしかに、その例であらう。これに反して、人間は同類とともにあるとき、愉快となり、氣分が引き立つ。友あり遠方より來る、また樂しからずや」とは、孔子の言であつたではないか。社交の意義、共同作業等の價値は、單に道德や經濟の眼光のみから、云々さるべき以上の、心理學的理由をもつであらう。個

人が、他の人々の前に、講演とか、撈撈とかすることを尻込みするのは、同類から離れ去る點からであつて、反對に、流行を追ひ、大勢に順應することが、人間らしさを示す。かくて、「百万人といへども、われ行かん」といふ勇敢なる個人の背後には、つねに、少數ながら隠された同志の者がつき纏ふ位である。

**2 團結、すなはち集團** 個人と社會は、對立的に考察してはならないのであつて、個人の生活分野として、社會が、取り上げられねばならぬ。しかして、個人の生活分野として社會が問題とされるとき、社會は、如何に構成せられるか考へられる必要が出て來る。社會は、いふまでもなく、多くの個人の——最少二人以上の個人の——相倚るところに生ずると思惟されるが、これら諸個人は、果たして、如何様の關係をもつて、社會の構成にいたるのであるか。われわれは、先づ、この問題に立ち向ひ、次いで、主なる實際上の社會諸形態の分析に進むであらう。

二人以上の多くの個人が、相倚つて社會を構成してゐるのは、昨日まで別々の若い男女が、縁あつて今日から夫婦となり、新家庭を作る例をもつて、最も明瞭であらう。多數の學生が、新學年の始め、學校に入學するが、そのうち、それぞれの者の間に、友人關係が成り立ち、友達仲間の形成されることも、同様の例である。旅は道連れといひ、旅行者の間に、自然に道中仲間の出來上がるのも、同じ事實であるが、しかし、社會の最少限をなす二人の個人の集まりや、殊に、恒久性をもたない、一時的關係に對して、社會の觀念を拒ばまうとする見方が支配してゐる。その集まりや、一時的關係は、多數人から成る、恒久的な社會のうちの事實であつても、まだ完

全な社會にいたり得ぬものだといふのである。

なるほど、世間の常識的既成觀念からすれば、その反対もまた、尤もな點があらう。前に述べた如く、サン・シモン以來、國家に對して社會を構想し、社會とは、國家の基盤であるやうな大規模の存在だとする見解さへ、もたれてゐるほどである。しかしながら、あたかも、かの動物學者・植物學者達が、名だたる鳥獸や、有用草木だけに、彼等の視野を限定することなく、生物そのもののもつ特質にしたがつて、その研究対象を選抜し、遂に出けらや、バクテリアの類にまで及ぶ如く、社會學者としても、社會の特徵を満足するかぎり、如何なる微小社會も、一時的社會も、さらに隠秘の社會も、有害社會も、これを、研究俎上に羅致して來なければならぬ義務がある。

國家・民族・階級・都會・農村・家族等は、何人が見ても、社會なることを認めるであらうが、それら諸社會のもつ本質的特徴は、何であらうか。それら諸社會の特徵は、諸個人が相寄り、一の團結狀態をなす點である。諸個人が、それぞれ孤立・獨存するのでなく、互に關係を有して、生活をともにする狀態であつて、簡單にいへば、共同生活體をなす點である。しかるに、社會が團結狀態、すなはち共同生活體と見做されるならば、以上あげた名だたる社會諸形態以外に、そのやうな種類のものは、無數に發見されるのであつて、組合・會社・協會・學校等とはより、教團・劇團・觀客・群集・徒黨等、一としてしからざるものはなく、やがて、新家庭も、友人仲間も、道連れ仲間も、その觀念のもとに入つて來る。いな、嚴正なる觀點をもつてすれば、汽車・電車の同乗

者やノ強盜と被害者や、袖ふり合ふも他生の縁といふ、行きすりの人々の間においてさへ、須臾にして消える小社會は、見出されると主張しなければならぬ。

大社會から小社會、その恒久的存在から一時的形態にいたるまで、社會學上においては、研究題材とすることを要するわけであるが、さきに述べた如く、世間の通念は、まゝ、そのことを拒む。種々の誤解が、その間生じ易いことをも、考慮のうちに入れてよいであらう。そこで、われわれは、特に、社會を意味するところの、諸個人の團結狀態、いはゞ共同生活體に對して、社會集團といふ名稱を附する。こゝに、社會集團と稱するのは、諸個人相倚つてなす特定の生活分野であるが、關係諸個人がそれぞれ孤立してをつては、事實は成り立つて來ない。關係諸個人が、一定の關係を有するにいたつて、その事實が生ずるわけであつて、その關係こそ、團結である。團結とは結合を意味し、諸個人が相互に結びつくところに、人間團結、すなはち社會集團が發見される次第である。

しかし、よくよく考へれば、團結といひ、結合と稱しても、その眞の意味を註釋しなければならぬ。要請に接する。團結・結合といへば、分かつたやうであるも、如何なる關係がそれであるのか、必らずしも明瞭とはいはれぬ。二人三脚の如き物理的結合がしかるのであるか、それとも、恩愛の絆といふ如き、精神的なそれがしかるのであるかといふやうな點に、疑義が存する。われわれは、その疑義に答ふべく、この場合の團結・結合は、共同生活營爲の可能な關係であるとする。共同生活の行はれる分野であるとも、いふことが出來よう。これ、さ

きにわれわれが、いま問題となつてゐる社會の規定を、簡單に共同生活體とした眞の意味でもある。

社會といふ概念は、著るしく多義的であるといへよう。よく、社會と社會生活といふことをいひ、これら混同し易い二つの概念を區別することもあるが、屢々、また、兩者を同一視することがある。さらに、社會を單なる生活分野たる以上、そこに存立する社會構造の意義に轉用する事實さへ存する。社會の名稱をめぐる、この混亂した事態は、整理を要するところのものであつて、われわれは、その名稱を外に、事實そのものに關して、先づ、社會集團の取り扱ひに入りたいと思ふ。

### 3 全體社會と部分社會

われわれ社會學者は、生物學者が、名だたる鳥獸や有用草木だけに研究を限定せぬと等しく、上は大規模・恒久的な團結から、下は微細な・一時的なそれにいたるまで、一般的に、社會集團を取り扱つて行く必要があるが、これら社會諸集團を見渡すとき、先づ眼につくのは、一方において、獨立性・封鎖性を有して、そこに住む人々の生活基盤となりつゝある、比較的形態の大なる、その存在からいつても永續的な團結の種類と、他方、それに對して、いまいふ種類の團結内にふくまれ、したがつて、形態がより小で、獨立性・封鎖性を缺き、たゞ人々の生活上の要具だと考へられ、それであるから、その存在も一時的と見做され得るやうな、いま一つの團結の種類とである。この對立は、國家や、民族や、都會や、農村等に、階級や、家族や、組合や、會社等と比較するとき、いたつて明らかに看取せられるはずである。

右の集團種類の差異は、主とするところ、團結の全體性と部分性の區別であり、一が生活基盤性をもつて恒久的存在をなすに對し、他は、生活要具性を示して一時的存在たるに止まる屬性を隨伴するといふことである。そこで、この分類が、英國のマッキンヴァー、コール以來、全體社會と部分社會の區別として理論化されて行つたことは、當を得たものであらうと思ふ。屢々世間では、その全體社會だけについて、社會の名稱をもつてし、部分社會に對して、その名稱を與へない事實の如きは、その間の差異を常識的に鑑別してゐたからのものであつて、區別は、それほど、顯著であるといへるであらう。

しかしながら、一層精細にこの分類を検討して行くとき、その區別が、嚴密ならざる二點を藏することを發見する。すなはち、その第一は、全體と部分といつても、事柄が絕對的なものでなく、相對的である點である。都會・農村等は、獨立性・封鎖性をもつといふが、しかし實際においては、國家や、民族など、より大なる集團内に、相對的に生活基盤であるといふのみ。國家や、民族さへ、いまでは、國際的・世界的な大社會の局部的形態だと見做されてよい點すら、あるであらう。そして、かくの如き場合、より小なる全體社會は、より大なる全體社會の生活要具としても考へられよう。一方、階級・大家族等においては、間々、獨立性・封鎖性が發見され、部分的團結をふくんでまがふ方なき生活基盤性を立證するものさへ認められる。

全體社會對部分社會の指定は、さらに第二に、それらの屬性の點で、批判の餘地を與へられる。全體社會は恒久的存在をなし、部分社會は一時的なそれに止まるといふが、國家は敗戦その他の理由によつて壊滅するも、階級、家族等は殘存するといふ例、また、都會・農村等は、盛衰の歴史を辿るが、階級・家族等は、世紀的沿革を

有することもある。教團などは、部分社會に數へられるも、まさしく、その顯著なる好例ではあるまいか。したがつて、恒久的・一時的等の存在性を、全體社會對部分社會の分類概念のうちに混入せしめることは、何としても、よろしくない。この分類においては、文字通り、どこまでも、全體性・部分性を標準たらしめなくてはならぬ。かくして、われわれは、全體社會・部分社會の分類について、分類概念の矯正をなしつゝ、それが相對的分類として許されるのを断つておきたいと思ふ。それとともに、われわれが、追及したいことは、これら全體社會と部分社會の區別の生ずる眞の理由であつて、そのことを深く吟味するとき、社會集團の構成に關する根本的原理の認識に導びかれるのである。

所謂全體社會とは、如何にして成り立つてゐるであらうか。われわれは、それに答へて、交通關係が多數の人をして共同生活にとり入れるからだとする。國家・民族等の全國的集團は、**現代的交通網の發達によつて**、廣汎なる地域に住む幾億・幾千萬の人口が、互に政治的・經濟的・文化的生活をともにするやうにして展開したのである。今日、交通機關の發達が國家・民族等の舊範圍以外に擴張せられつゝある状態のもとに、國際社會や、世界的社會こそ、眞の全體社會をなすことが感ぜられるのは、理由のないことではない一方、國家・民族範圍内の特定地方において、交通關係が緊密に集注する個處に、都會や、農村がそれぞれ特有の小規模ながら全體社會としての相貌を呈する。たしかに、農村などにあつて、所謂交通機關の施設は貧弱であるが、こゝでは、人間に生得的な移動器管としての脚がその役割を果たすのである。脚による交通、接觸關係が、農村的共同生活の範圍

を規定するのである。

人間の自然的な、脚による移動能力は、日常生活にあつて、半キロの距離を最も容易なるものとする。したがつて、農村聚落の如きは、平均一キロ平方の範圍をその限度たらしめてゐるのを見よう。しかし、自轉車を使用するにいたれば、その距離は著るしく擴張される。鐵道・電車・バス・船舶等の運輸機關や、郵便・電信・電話・ラジオ等の通信機關を利用するに及べば、その範圍は、千倍し、萬倍し、限り知られぬ。原始・古代の全體社會が、農村聚落様の狭小なる地域を掩ふに止まつたのに對し、現代・文明段階のそれが、國際的・世界的なる特質を有するにいたつたことは、けだし、理の當然であるとしよう。たゞ、接觸・交通度の疎密あることに應じて、これら全體諸社會が、相對的に確認され、事實が、段階的な系列をもつて示されるといふ結果が、そこから出て來るのみ。

**4 共同社會と利益社會** 全體社會と部分社會といふ、集團分類に對して、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトと稱する、有名ないま一つの區別が存する。全體社會・部分社會の分類が、英國社會學者の手によつて着手されたのに對し、これは、ドイツのテンニースによつて創唱され、全體社會・部分社會の區別よりも、反つて、學界に大なる影響を與へてゐる。テンニースは、早く、この分類を提出してをり、全體社會・部分社會のその如きも、彼の影響のもとに成り立つたと見るべき點がないではない。

ゲマインシャフト、ゲゼルシャフトといふ集團分類は、釋して、共同社會と利益社會となされる如く、一が、

本然的な共同生活體であるのに對し、他が、假初の團結であり、換言すれば、個々の利益・目的をもつて作爲されるそれだといふにある。例へば、民族・農村・家族等は、自然發生的であり、その構成員は、ながら特別の利益や目的のため、集團を作つてゐるのでなく、いはゞ結合のための結合として、それを構成する。そこで、その結合は全く本質的なものであつて、これが、ゲマインシャフトだと觀念される。それに反し、國家や、都會や、組合等を見れば、人工・作爲的なこと明らかであつて、その構成員は、それぞれ一定した利益・目的達成上、それらのものを作る。すなはち、結合は手段であるにすぎず、要具であるに他ならない。こゝに、その結合の假初のものなることが知られ、ゲゼルシャフトの概念が樹てられる。

テンニースは、このゲマインシャフト、ゲゼルシャフトの集團分類を施すに際して、實際においては、なほ、幾くつかのそれぞれの特徴を附帶せしめてゐる。ゲマインシャフトが、人々の生活上全體性をもつこと、これに反して、ゲゼルシャフトが、部分性を有するにすぎないこと、さらに、前者の恒久的存在なるに比し、後者の「時的存在なること等々、實に、これらの附帶的特徴の擧示こそ、かの全體社會と部分社會の分類に對して、テンニースが示唆を與へた點であるとともに、世上、彼の分類と、全體社會・部分社會の分類とを、混同せしめる原因となつたのである。しかし、理論上、テンニースの分類は、全體社會・部分社會の如き外形的な集團の區別ではない。もつと内面的なそれだといはなくてはならぬ。

すなはち、テンニースは、人々の交通・接觸といふ客觀的結合以上の、精神的結合に立ち入り、そこに、二種

類の存することを分析した者であつた。彼は、本質的結合と、假初の結合となしたが、よくよくその説くところを究はめれば、無目的な感情的融和の團結と、一定の目的をもつ意志的提携の團結の指摘である。ゲマインシャフトを共同社會となし、ゲゼルシャフトを利益社會と呼ぶ場合などにおいても、必ず、この點に誤解のないことを望まなくてはならない。民族・農村・家族等では、人々が、互に感情上において融和し、密なる共同生活を行ふ點で、ゲマインシャフトと觀念され、それに對して、國家・都會・組合等では、人々が、目的追及の意志から發して相提携し、その限りに於いて共同生活をなす點から、ゲゼルシャフトとして概念される。

ゲマインシャフト、ゲゼルシャフトのこの分類は、社會研究上、重要な、精神關係を取り上げた點に、大なる功績を残したものであらう。テンニースのこの分類が、不朽の貢獻だといはれる所以が、そこに存する。たゞ、現實上の諸集團を精細に觀察するとき、個々の集團は、決して彼の大まかに眺がめたやうに、ゲマインシャフト・ゲゼルシャフトのいづれかの範疇のみに屬せず、兩者のいづれの要素をも、ともに有することを發見する。例へば、ゲマインシャフトとして模範的だと稱せられる家族については、家族構成員たる親子・夫婦・兄弟姉妹がよく感情的融和の關係につながるの事實であるが、一面、彼等はまた、家政上・經濟上・教育上等において意志的提携を行ひ、いはゞ、組合様の結合をもなしつゝある。他方、ゲゼルシャフトに好例となされる組合についていつても、組合員は、なるほど、なんらかの利益・目的追及上意志的提携を専らにしてゐるもの、同時に、同輩として相親しみ、感情的融和の事實を示す。その點、組合もまた、家族的な團結であるのであ

テニエースによる、ゲマインシャフト・ゲゼルシャフトの區別は、むしろ、これを分類概念としてではなく、社會集團の必要なる二つの構成関係と見直すべきであらう。それは、集團の種類でなく、集團の成り立つ二つの要素関係であつて、一が他を排するのではなく、一に他が加はつて、現實の集團が存するわけである。そこで、ドイツのガイガーが、ゲマインシャフト・ゲゼルシャフトを集團形態としてではなく、相補ふ構成原理であると見たことは、注目すべき研究上の發展だとささなくてはなるまい。

しかるに、集團構成の問題について、私は、さきに、交通・接觸の関係をあげたのであつて、これと、いまいふ二つの関係は、如何に調整せられるのであるか。簡単にいへば、それら三つの関係が相よつて、現實の社會集團は構成されるのであつて、ゲマインシャフト・ゲゼルシャフトの構成原理性を認めることは、交通・接觸のそれを否定するものでないのである。現實の社會集團は、交通・接觸関係を第一の構成原理たらしめ、次に、ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト等、第二、第三のそれを附加して存立する。この點について、改めて、次節において説くとしてしよう。

**5 集團構成の三原理** 現實社會集團の構成には、交通・接觸関係と、ゲマインシャフトと、ゲゼルシャフトといふ、三つの原理を、ともに必要たらしめる。その第一の交通・接觸関係であるが、これは、人々の行為の相互傳達関係であつて、「へば、こちらの意志をあちらに傳へ、こちらから事物をあちらに渡す関係であ

る。交通、或は接觸と稱してゐるが、人々は接近してゐれば、この行為傳達関係を、なんら媒介なしに行ひ得る。言語によつて相手に話しかけ、手足を動かして相手に事物を手渡す。この直接的傳達関係が、普通、接觸と呼ばれるものであるが、この直接的接觸状態において、群集などの集團があらはれ來たことは、注意してよいところである。群集にかぎらず、すべて、集合と見做される集團は、この直接的接觸関係を本に成り立つものであるが、この傳達関係では、人々の行為の届き得る限度と、それを受け入れ得る限度が存し、高々、平均數十米内外の距離のうちにおいてしか、集合諸形態は生じ難いであらう。

直接的接觸関係を本とすることによつて、集合形態が一定小範囲に限定されるが、しかし、その點にすでに觸れておいた如く、人間には脚による移動能力が存し、日常容易い歩行によつて、互に接觸・交通し得る便宜をもつてゐる。すなはち、歩行によつて、直接的接觸を反覆する関係であつて、その関係を本に、集合以上の聚落といふ集團形態が成り立つ。例へば農村や、その一部をなす部落の如し。都會地などにおいても、町や、丁目が、それを代表する。これら聚落諸形態について、人間の歩行距離の上から、平均一キロ平方の限度が存することは、すでにいつてあるが、歩行以上の、交通機關を利用して行為傳達関係が開かれるとともに、接觸——すなはち、その場合においては交通と稱されるやうになるが、——關係は遠距離にも可能となり、國家・民族等の全國的存在や、國際社會、世界的社會の存立等が培かはれる。かくの如き、遠距離・廣汎な、交通機關を用ひる、交通關係を本とする集團諸形態は、一括して、社會圈と概念されるであらう。



少なからざる現實諸集團は、右にあげた接觸・交通關係のみをもつて存立してゐる。ある種の群集、始まつたばかりの植民地部落、國際新社會などは、みな、その例證であらう。しかし、少しく年月を経れば、それらの諸集團も、人々の間の親密化の進歩によつて、ゲマインシャフト性をもつやうになり、或は、彼等相互間の提携の芽生によつて、ゲゼルシャフト性を加へるやうになる。植民地部落が、内地の村落と變りない感情的融和を有する段階に入り、或は、母國の都會と同様な、意志的提携を示す状態に進む事實をもつて、それを考へることが出来る。しかし、前に述べた如く、あらゆる社會集團を通じて、その際、ゲマインシャフトのみ、或はゲゼルシャフトのみを添加するといふのでなく、通例、それら兩關係を、ともに、有するやうになるのである。

そのうち、ゲマインシャフトは、人々の感情的融和の關係であること、さきに述べた通りであつて、感情上、相倚る傾向、離れ難いといふ気持ちから成り立つ。民族・農村・家族の人々が結合するのは、かゝる感情を中心としてのことである。しかし、この感情は、始めの間は、それであつても、昂進し深められれば、互に個々の存在なることを忘れ、相手と一體不可分關係にあると思ふやうになる。友達が、感情上相倚る傾向、離れ難い気持ちをもつことから、一歩進んで、刎頭の友といふことになれば、親友として引き離し得ぬ一體をなす氣分をもつやうになるのは、その例である。親子關係、殊に母子の間などに、その點はよくあらはれてゐる。相愛の男女が、この一體不可分關係において、清死する事實などは、道徳問題としての非難は兎に角、社會學上から見れば、額される面をもつものである。

ゲマインシャフトに見る、これら深淺二つの場合は、融和感情の厚薄によるものであることは、明瞭であつて、普通の浅い場合のそれを、共屬感情と呼ぶのに對し、時にあらはれる深い場合のそれを、一體感と稱する。高度の民族や、落ちつきのある農村や、古い家族の人々などに、一體感は特質的なるものとして立證される。そして、この一體感は、平たくいへば、小我をすて、大我に目醒める心境であるが、友人一一人が、平等の立場で、相互に小我を忘れて同志大我意識をもつにいたるやうな場合と、少しくこれと異なり、母が子を自分の一部と信じ、子もまたそれを思ふやうに、一方的に小我が大我として擴大される場合がある。天皇を中心とする日本國民の一體感などは、まさしく、後の場合の絶好の例證であらう。

ゲゼルシャフトは、利益・目的追及の意志的提携關係であるが、簡単な場合として、相互協同と、相互交換の二形式がある。重い石を共同に押上げやうとする關係は前者であり、これに對して、それぞれの所有物を、交易しようとするのは、後者である。前の場合は、人々の目指す利益・目的が一致し、後の場合は、それが異なる。しかも、いづれの場合でも、相手の助力を籍りなければ、目的達成にいたらない點は一つである。普通、これら二形式が結びついて、先づ相互協同してある利益・目的を實現し、しかる後、相互の提供した努力に對する代償物を求めようとする複雑した關係や、同じやうに複雑はしてゐるが、相互交換を行つて、それを行ふことによつて反つて共同利益・目的を達成しようとするやうな關係もあらはれてゐる。従業員・社員・重役が營利會社を構成してゐるのは、前の場合の好例であり、公共團體において、各自が職務に對する報酬を得つゝも、實は、國家

目的に奉仕するといふのは、後の場合の一例だといへよう。

**6 三原理間の關係** しかれば、集團構成上の、以上三原理の間には、如何なる關係が存するのであるか。先づ、すべてのゲマインシャフトや、ゲゼルシャフト關係を主とする集團において、構成員間にかの接觸・交通關係を缺如するのは、絶無であるのを、強調したのである。もし、人々の單なる感情的融和、或は意志的提携といふ精神的結合によつて、社會集團が實現されるとすれば、行方不明の者と、あとに残された者との間にも、そのことになかつた以前と毫も違はない集團關係が繼續すべきはずであるし、死者と生存者の間にも、社會は存する道理である。しかるに、われわれが、それらの事實を容認しがたい所以は、接觸・交通が、それらいつれの場合にも斷たれてゐるといふ根本的理由による。要するに、あらゆる集團は、接觸・交通關係を、その第一構成原理たらしめ、ゲマインシャフト、ゲゼルシャフト等を、それ以上の、二次的構成諸原理としてゐるのである。

ゲマインシャフト、ゲゼルシャフトは、高次の集團構成二原理であるが、こゝに、これら兩原理の間に、また、次の如き興味ある規定關係が存する、すなはち、接觸・交通する人々にして、利益・目的追及上、意志的提携關係に入る場合を想像するに、各人は獨力で目的を達し得ず、その點から他人の協力を求めるわけであつて、しかも、それが相互的なのであるから、相互補足性と、特にその認識が第一條件をなしてゐる。經濟學者が、その關係を目して、有無相通關係だとしたことは、周知知られてゐることであるが、しかし、もし、これらの人々

互に相手に對して信頼の念をもつことがないなら、實際のゲゼルシャフトは成り立つことが出来ない。何人も、詐僞師や、不信者と意志的提携を行ふことを忌避するからである。しかしてこの信頼の念は信義の態度によつてのみ、増かはれるのである。して見れば、信義・信頼關係が、ゲゼルシャフトに重要な第二の條件をなすことが、明らかである。人が、いまいふ相互補足性を實力と解して、實力養成に努めて活動を期するのはよいが、それとともに、信義・信頼の道德性の涵養の大切なわけが、そこに存する。

しかるに、右の信義・信頼關係は、互に他人に齎す態度である點から、感情的融和の表現と考へられるものである。信義を守ることは、利害を超越して、他人に結びつくのでなければならぬであらう。信頼の念もまた、成り行きを度外視して、相手に依存する、氣を許した態度をもつて成り立つ。いづれも、相手に對する親和、すなはち感情的融和の事實であるが、これ、ゲマインシャフトの關係だと稱さなくてはならぬ。したがつて、ゲゼルシャフトの存立に對して、この程度のゲマインシャフトは、絶對的に必要である。ゲマインシャフトを俟つて、ゲゼルシャフトの生ずることが、これら兩原理の間の、一規定關係として認められる。

しかし、このゲマインシャフトよりゲゼルシャフトに及ぶところの規定關係は、また、可逆的であり得る點が、ないではないのであつて、それは、次の事實を見れば、示唆せられるはずである。すなはち、ゲマインシャフトの生ずる所以を考察するに、そこには有名な、ギディングスの同類意識説が存し、彼によれば、人々は互に同類たることを意識するにいたつて社會をなすと稱し、この社會生成の説明において、彼は、實は、ゲマインシャフ

トの成立を述べたと解せられるのである。世に、類は友を呼ぶといひ、馬は馬連れ、牛は牛連れともいつてゐる。相似た人々が相倚つて、親密なる集團をなすこと、血縁的家族や、同一傳統所有の農村や、同一文化をもつ民族等において、また、趣味・娯樂等の點で一致する人々が、友人仲間や、文化團體をなす例をもつても知られる。かくて、同類、すなはち相互的類似が、ゲマインシャフトの成立條件だといふ見方がとられるわけである。

そのことは、たしかに事實であるやうに見えて、實は、必ずしもしからざるのである。タルドが夙に指摘してゐるところであるが、同類は親和する反面、敵對關係に入ること、また屢々なのである。すべての闘争・競争關係は、相似る人々の間に生ずる。商人と競争するものは、商人以外の者でなく、しかも、同一商品を扱ふ他の商人である。それも、同じ町、同じ通りの者の場合、一層激烈であるといへよう。タルドは、階級と争ふものは、他の階級であり、國家と争ふものは類似の國家だといふ點まであげてゐる。要するに、同類親和説は一面觀であつて、同類は、利害の衝突なきかぎりにおいてのみ、ゲマインシャフトをなすと斷すべきであらう。

しかるに、他方、同類・異類の如何を問はず、人々は利害の一致あるとき、實に、ゲマインシャフト關係に入るのである。こゝに利害といふのは、廣汎な生活上の諸慾求に關するのであるが、夫婦が仲をよくし、友達が親しむ關係も、よくよく見究はめれば、生活上の利害の一致といふことに歸着しよう。翻つていへば、利害の衝突なきかぎりで同類の感性的融和に立ちいたるのは、裏からいつて、利害の一致がその奥に潜むがゆゑだといひ得るであらう。結局、ゲマインシャフトは、人々の利害の一致を一先條件たらしめるのであるが、かのゲゼルシャ

フトは、意志的提携關係として、この利害の一致を如實に立證するものであるから、ゲゼルシャフトの存するところ、ゲマインシャフト成立の根據に恵まれると判斷される。圓滑な取引關係を繼續する商人仲間、親友關係が生じ、業績をあげる會社・組合の構成員間に、親しみある同僚關係の増かはれて行くのも、これがためである。

### 7 國家と民族

社會諸集團のうち、最も目につくものは、大にしては國家と民族であらう。われわれの生活上、國家は一日もなくてはならないものであり、民族も、また、現在われわれの生活母體として、絶對的な意義を有する。何人が見ても、國家は他の集團の追従を許さぬ優勢な存在であり、民族は、民衆の郷土として、比類なき強固な團結である。しかも、これら兩者は、互に密に關係し合ふものであるから、その間に、混同が起る。兩者を峻別し、それぞれの確立と發展に必要な心構へをもつことは、われわれの重要な義務であること、もちろんであらう。

常識上、國家は、現代の模範的な全體社會であると見做されてゐて、法律學においては、領土・人口・主權を要素とする存在だと考へられてゐる。しかし、社會學より見るとき、領土は人々の接觸・交通を、人口はゲマインシャフトを、主權はゲゼルシャフトを、示唆するところであつて、一定地域たる領土の上に、多數の人々が感情的融和をなし、相率ひて政治的目的のために意志的提携を行ふ團結だと解してよいであらう。集團構成の三原理が、かくて國家の場合に、よく示されることになるが、國家は、そのうち、特に第三の政治的ゲゼルシャフト

たることを本質たらしめる集團である。こゝに、政治といふのに、社會生活の整頓・取締り、すなはち社會統制を意味する。國家は、最も確定的な社會統制の團結であつて、民衆生活を、外からする脅威に對して守り、内における秩序の保持を企圖するものである。それであるから、國家は、軍隊・警察力を所有し、行政・司法事務を擔當し、それらの組織と運営に必要な諸機構を藏するものである。

民衆が共同生活をなすに當つて、外敵の攻撃を防ぎ、内部の秩序を完遂するため、國家的ゲゼルシャフトを構成するのは、いたつて自然な事柄であるから、國家は、原始時代の方、いたる處に建設されたといふべきである。しかし、多くの初等國家は、強勢者、或は一部の階級の意志を中心として起こされ、したがつて、その機構も、實際の運営も、彼等の利益を中心としたことは争ひ難い。民衆が自發的に自己自身の目的のために、民主的國家を建設し、その機構と運営を整備するにいたつたのは、眞に近代のことであるといはなくてはならぬ。

しかして、國家の場合、注意せられるのは、國家が社會統制の團結たるところから、この社會統制によつて、民衆生活の外郭的限界が決定されることである。具體的にいへば、國家の範圍が、われわれ國民の、最も確定した生活分野となることであり、それゆゑ、爾餘の諸集團は、この國家的範圍の内部に生じ、たまたま、國際團結が発生することがあつても、つねに、いふに足りない微弱な存在たるに止まるといふことである。國際的勞働者團結や、國際聯盟の事實などは、よくその事實を立證するであらう。且つ、また、國家のもつ以上の性質は、内部の國民生活を統一的に指向づける結果として、國民生活の所産と見るべき、制度・慣習・思想等、一般的に文

化構造物と名づけるものを、ひろく形成せしめることになり、所謂國民文化樹立を得しめる。

さて、この國家と民族とが、常識上、屢々混同されるといつたが、それは、両者が多く人的範圍を同一ならしめることから来る。すなはち、民族的國家の事實があるゆゑからであるが、民族そのものは、集團として、特に共同文化を有する民衆が、ゲマインシャフト的團結をなしたるものを名づける。それは、現代において、數百萬から數億にも上る構成員から成り立つのを見らざらう。そして、彼等のもつ共同文化とは、人々が、風俗・言語・藝術・宗教・認識等の點で、共通の制度や、慣習や、思想等の持主であることをいふ。民族は、この共同文化を所有するゲマインシャフト團結であるが、特に親密なるゲマインシャフトをなすといふ點から、その構成員の親和の賜物として、彼等の所有する共同文化の統一化が、益々促進されて行くとともに、他方、互の通商關係も容易にされ、人種の統一に道が開ける事實がある。

永續的な民族的存在は、共同文化をいやが上にも昂揚し、同族性を培ひ、且つ深かめて行くのである。その結果、民族構成員間に、同一人種たる信念と、これに基づく種族的ゲマインシャフトが添加されるのを見るやうになる。この段階に達すると、民族は、もはや、單なる共同文化のみを紐帶とするゲマインシャフトたるのみでなく、同一血液を契機たらしめると信するそれを根幹とするにいたる。すなはち、民族は、文化團結たることから、種族團結たることに發展するのであつて、民族を血縁團體と見做す通説の如きは、この後期段階の民族を眼中におくからのことである。畢竟、民族の血縁團體たることは、結果現象であり、元來の存在は、共同文化の所

有を特色とする文化團體たる點にある。現代米國が、人種の點で寄り合ひ世帯でありながら、なほ、一種の民族的存在をなすのは、よくその間の消息を語らるであらう。

民族は、社會統制のために政治的ゲゼルシャフトを完成するにいたれば、國家として認められて来る。大和民族が、日本國家となる所以がそれであるが、國家をなす場合においても、共同文化を紐帯とするゲゼルシャフトたるかぎりにおいて、それは、なほ、民族と概念されてよい關係が存する。日本國家も、その觀點のもとでは、大和民族として認識されるのである。かくて、人的範圍の一致にもかゝらず、社會集團は、その團結性にしたがつて、個々に鑑別せられるものである。

**8 階級と家族** 國家や、民族等の、所謂全體社會に對して、階級及び家族の如きは、つねに、部分社會として存する。すなはち、より大なる社會集團たる國家や、民族の範圍内に包含されるものであつて、階級が全然獨立の存在をなしたり、家族が外部との社會關係をもたず、封鎖生活をいとむことは、想像されない。しかも、階級と家族は、古來、人間生活上、極く重要な役割を演じた集團であつて、現代においても、その重要性に變りはない。いな、階級の如きは、いまや、それが主體となつて、社會改革諸運動を頻發せしめてゐる點において、最も注意を喚起する、今日の集團だといふべきであり、家族もまた、われわれの身近かな肉身の者から、成り立つ集團として、將來に互つて大切な存在だと目せられる。マルクスは、階級闘争を唱道し、それによる社會運動を強調したこと、周知の如くであるが、彼は、階級を定

義して、數百萬の家族が、その生活状態を等しからしめ、他の社會人口に對立するものであるとしてゐる。例へば、労働者、農民、商工業者、資本家等々の如し。これをもつて、階級が、全體社會内の、特定生活状態の人口を指さすことは、よく分かるであらう。しかし、かくの如き特定生活状態にある人々は、普通、相互ひ、同類意識と利害關係からして、如何なる場合にも、何がしかのゲマインシャフトや、ゲゼルシャフトを構成するにいたるのであるから、階級は、單なる人口部類たる以上、彼等のなす團結だと認めてよいであらう。

階級は、かくて、社會集團の一種であると認められるが、問題は、その集團構成の契機に關する。屢々、階級は同一職業者の行ふ團結だと誤解せられて、中世時代のギルドや、ツンフトに例示されるが、それであるならば、同業組合たるだけの話であつて、社會階級といはれる特殊性はないであらう。階級は、實に、同一職業者の團結ではなく、同一身分者の集團なのである。こゝに同一身分といふのは、全體社會における人々の上下の地位、勢力の有無如何についていふ。尊貴・優強なる部類が、上流・支配階級をなすに對して、卑賤・劣弱なるそれが、下層・隷屬階級となる關係である。現代において、資本家が支配階級を形成し、労働者・農民が被支配階級となり、その中間に、中産階級を見出すのは、その例證をなすのである。

これらの社會諸階級の人々は、全體社會内部において、一般的な接觸・交通關係にありながら、それぞれ特に、感情的融和や、意志的提携關係に入つてゐるのであるが、これら特殊の階級的團結關係が深かめられて行くところに、一種の階級的封鎖・獨立性があらはれ來ることがある。結婚や、社交の階級化とか、職業や、地位の世

變化とかいふ現象に、そのことを看取されよう。階級が、職業關係だと誤認せられるのも、その結果であるが、一度、そのやうな、封鎖・獨立性に墮すとき、ゲマインシャフト性の強い階級は、全體社會の硬化を誘致し、ゲゼルシャフト性の表て立つそれは、相互間の敵對、すなはち、階級闘争の主體として立ち上がる。

さて、階級自體の如きも、ある意味から、家族を單位として構成されると見做されるやうに、家族は、よく、社會單位だといはれる。家族が社會單位なることは、全體社會の場合において、最も明瞭にいひ得られるところであるが、これ、如何なる個人も、身邊に家族をもち、この家族集團を提さげて、全體社會の接觸・交通關係に参加してゐるからである。家族は、もとより、夫婦・親子・兄弟姉妹が、同じ屋根の下に密接なる接觸を行ひつゝ、特に、血縁に基づくゲマインシャフト關係を深からしめ、同時に若干の生活目的から、ゲゼルシャフト關係をも、伴ふ集團である。この家族構成に關して、夫婦關係が主か、親子關係が主かといふ問題があるが、概して、古代家族は前者に重點が存し、現代のそれは、夫婦關係を中心とするやうに變つて來てゐる。

如何に親子・夫婦・兄弟姉妹であるからといつても、單に血縁的ゲマインシャフトのみによつて、家族として團結してゐるのでなく、經濟上・教育上等の利益・目的追及からする意志的提携關係が、相當重要な構成原理としてはたらいてゐるのは、實際の家族形態が、歴史上、種々に變へられて來てゐる事實に徴して考へられよう。すなはち、推測されるところによれば、最古の原始家族は母系であつて、母から娘への極く自然な親子關係にしたがつて構成されたが、戰爭・生産上の必要は、やがて、より強力な男性關係たる父から息子への父系にそれを

變更せしめ、また、古くは、軍事・自足經濟等の點から、兄弟姉妹・孫子等、すべての血縁者を網羅する大家族形態が、上層階級なりに認められたが、これも、また、事情の變化によつて、縮小される運命のもとにおかれた。相續人だけが殘るこの家族形態が、小家族である。家族は、また、その中心權力が父母いづれに屬するかの爲により、父權的家族と母權的家族に分たれる。

夫婦關係が主か、親子關係が主かのさきにあげた問題の如きも、實際は、周圍の事情が、決定してゐる。しかし、發生上からいへば、夫婦關係が先きで、親子關係をなすことはいふまでもないところであるが、この理論上、家族に最も重要な意味をもつ夫婦關係の如きも、同じく周圍の條件によつて、一妻多夫や、一夫多妻といふ普通の一夫一妻の婚姻とは異なるものが行はれることがある。前者は、經濟生活の窮乏や、またその結果である女性の嬰兒殺しによる女子の不足、後者は、封建時代の子孫繁殖の慾望や、富裕階級の恣意に發する現象である。しかし、古來、男女數の均衡と、經濟的理由は、一夫一妻婚姻を標準たらしめ、近代文明各國では、親子關係さへ除外した、この夫婦關係本位の、現代的小家族の形態を發生せしめてゐる。

### 9 都會と農村

國家・民族の集團範圍の内部に、都會と農村とが、鋭く對立する團結をなしてゐる。都會に對し、ひとり農業を主とする農村ばかりでなく、漁業によつて立つ漁村や、林業を専らにする山村なども、同じ對立を示すのではあるが、こゝでは、壓制的に多數である農村をあげて、これら村落の都市に對する特質を述べて見たい。最初に感ぜられるのは、都會が近代的香りの豊かな集團であるのに對し、農村が、歴史的傳統に

充滿する存在だといふ點であらう。しかし、都會と農村の差は、集團規模の大小とか、進歩性と停頓性、その他、社會的不安と安定とか、人口の流入と流出の關係とか、文化の高低とかいふ、いろいろの點に見られるであらう。しかも、これらのすべては、都會と農村の集團形態から、概むね、答へらるべき事實をなすのである。

都會は、社會集團として、人々の間接的交通關係を中心たらしめる。都會においても、そのモザイック的な要素をなす區や、通りや、町や、丁目や、界隈や、ビルディングや、隣り組や、家族などは、直接的接觸關係、乃至は、歩行による接觸・交通關係を本とする集團と認められるが、都會全體としては、市街電車・省線・オートバイ・バス・ハイヤー・貨物自動車・市内電話・同速達郵便・新聞の市内版・ラジオの都市放送・メツセンジャー・ボーイ・デパート・商店の市内配達等々の、特殊の通信機關と運輸機關、すなはち、都會的交通機關を媒介たらしめる交通關係を、團結紐帯たらしめてゐる。畢竟、都會は、進歩した、廣大な社會圈なのであつて、集合や、聚落の種類でない。都會は集團構成の第一原理たる交通關係、特に間接的なそれをもつて、本質的に成り立つてゐる。都會の構成が、すでに、かくの如き第一原理だけで充たされることは、人口が全国各地から集まつて發生を見る、新開地や、植民地區が、現實に都會として存立することから明らかなる事柄であらう。

しかし、いま例示した新開地や、植民地區も、年月を経れば、人々の間に幾何かの感情的融和と、意志的提携が生じて来る如く、普通の、歴史ある都會においては、市民の間に、ゲマインシャフト、ゲゼルシャフト等、集團構成の第二、第三諸原理もまた、隨伴するのである。都會に地方農村から人口の流入するのは、經濟的・政治

的・文化的吸引力がそれにあるゆゑである以上、都會人は、なんらか私益・目的追求の意志的提携をなす點は想像に餘りある。都會の日進月歩なることなどは、次々實現されるゲゼルシャフト關係の目的實現に負ふものであり、都會文化の向上の如きも、また、それから来る結果現象である。しかし、この進歩性は、秩序の安定をあとからあとから打ち破るのであるから、社會的不安を伴ふことになり易いのである。

都會の特色である進歩性、高い文化、社會的不安等、要するに近代の香りなるものが、以上の如く解釋される。しかし、都會も長年月の存在の揚句においては、住民の間に、自づと感情的融和のゲマインシャフト關係が醗酵されぬといふことはない。落ち付きのある下町の商人の間、教養ある山の手のインテリ階級などに、その事實を見るべく、そこに、「巴里にも古里がある」と稱せられる、家族的雰圍氣に接する。その關係が一般化され、深かめられて行く傾向は、都會の存続とともに著るしく、「ゲゼルシャフトから、ゲマインシャフトへ」の構成原理間の重點的推移を立證するであらう。

都會に對し、農村は、専ら、歩行的接觸といふ、集團構成の第一原理中の、特殊な接觸・交通關係を本として成り立つ。したがつて、規模の四・五キロ平方にも及ぶ一般の農村は、事實上、一キロ平方位の諸部落や、區や、隣り組に分かれたれ、それらが事實上確乎たる生活範圍をなすのである。行政的區劃が、社會學上の聚落範圍を如何ともしがたい事實である。たゞ、近來の農村に自轉車交通の盛かんとつたことは、聚落形態以上遙かに擴張された、農村範圍を實現せしめる事實がある。

農村は、都會に比して、同じ地域に、父祖傳來の生業を守る、永續的な集團であるか、住民の間に、ゲマインシャフト關係が、よく培かはれるのは、尤つともであらう。村民は高度の感情的融和を行ひ、一家族の親しみを示してゐる。これ、平和の農村とか、人情の醇朴とかいはれる點であつて、このゲマインシャフト特有の效果として、あらゆる面に保守的傾向が展開される。殊に、この状態にある人々が、特にそれといつて生活上の利益・目的のために意志的提携をなさない結果は、ゲゼルシャフト關係を稀薄ならしめ、利益・目的の實現を意味する新事實の創始や事柄の改良進歩に弱體なるのを語る。以上、農村の都會に對する停頓性・社會的安定・低い文化等、要するに歴史的傳統に充滿する事實は、その集團構成と密に關係をもつものである。

農村は自然のうちに、自然を相手として生活する集團であり、健康なる存在であるとともに、繁殖力をもつのであるが、その過剩人口を郷土に止まらしむべく、傳統的農村には、生産上の餘裕をもたぬ。一方、都會は、自然から遠ざかつて、不自然生活をいとむものであるから、不健康の結果として、人口減衰を來たさざるを得ない。都會の家族は、三代乃至五代をもつてその子孫が死滅するのである。殊に、日進月歩の都會においては、新事業の増加による人口吸収力が著るしいのである。それを補充すべく、また都會の吸引力にしたがつて農村を離れ、都會に向ふ、人口周流現象が生ずることになるのであつて、こゝに人口動態上の、都會と農村との對立が見られる。ドイツのハンゼン、アモン等の人口周流法則と呼ばれるものが、それを學説化してゐる。

### 10 群集と國際社會

こゝに新たに問題としようとする二集團は、これまで述べた諸集團の如く、

對立性はないのであるが、いまの時代に、最も關心を拂はれてよい、高度の政治性をもつものである。われわれが、革命群集とか、犯罪群集とかをいつて群集心理を示唆し、一方、戰時中我國が唱道してゐた東亞共榮圈や、今日、聯合國側でいつてゐる、新國際聯盟の構想等をあげれば、その點はよく分かるであらう。動搖期において、群集は表徴的な存在であり、世界史的現段階において、從來の國家・民族以上の國際社會の發展して行くのは、必至の趨勢に屬する。

群集は、その團結性についていふとき、かの直接的接觸を中心とする、集合形態以外のものではない。原頭・街上に蝟集する多人数の集まりなのである。一種の集會であるから、前にふれたやうに、人々の直接的接觸に伴ふところの、大略二十米突平方内外の空間的限定をもつ。しかし、群集が爾餘の集合形態たる、社交的會合や、教室や、講演會の聴衆や、劇場の觀客等と異なるところは、それが、殆んど偶然の産物であつて、さまざまの性質の人物から成り立つことにある。路傍の群集には、老人も居れば、片輪の者も交じる。しかし、十字路や待合室の群集といふ如く、來合はせた人々の純然たる集合でなく、なんらか出來事に引きつけられて出來上る群集、例へば喧嘩や、火事の際の群集になると、共通の興味を見出す人々から成り立つ點で、微かながら、ゲマインシャフトの存在を推定されよう。そして、これらの群集も、一度、警官の解散命令や、差し迫る危険等に直面すると、反抗・避難の目的から、意志的提携、すなはち、ゲゼルシャフト關係を生ずるにいたる。事實上、僅づかの程度であつても、群集は、ゲマインシャフト、ゲゼルシャフトをも、彷彿せしめるものである。



しかし、本質上、雜然たる群集形態においては、人々は接近した、喧躁の空氣の間に、また親しみのある多人數の中にゐる喜びから、感情の昂奮を來たし易く、且つ個人の行爲が、多數のうちに隠されるといふ點から、無責任に流れる氣味があつて、この感情の昂奮と無責任性を背景として、平常思ひもかけぬ、突拍子もない、積極行動に出づることがある。そのことを群集心理と呼ぶのであるが、それが不道德や、犯罪を構成するとき、犯罪群集の名が附せられる。特に、革命群集などの場合、亂暴狼籍をはたらくことが、フランスのル・ボンの指摘するところであつたが、革命時代において、秩序の維持が困難となり、群集取り締まりの軍隊や、警察力の失墜が、特に、群集の無責任性に拍車をかけることとなる。ル・ボンはなほ、「現代は群集時代である」と聲明した著名な學者であるが、群集は、その性質からいつて、ひとり現代の集團たるばかりでなく、過去の時代のそれでもある。たゞ、社會統制の弛緩に乗じて、現代、一層の群集心理を發揮するのみ。

國際社會は、いまや開けゆく、國際間の交通機關の進歩とともに、國境や、人種を立ち越える交通關係の發達に即して、諸國家・各民族が相倚つて、廣大なる新社會圈を構成して行くところに成り立つ、今日以後の全體社會である。極東の東亞の新社會や、西ヨーロッパ社會や、南北アメリカを連らねる大規模の新天地やが、それとして期待されよう。ロシア全體は、國際社會といひ難いが、これもまた、以上のものに準じて、そこに住む各民族を聯合して、各地域に跨がる統一社會を完成して行くであらう。世界の四大ブロック社會、乃至、廣域社會と呼ばれるものが、それである。

かうして、國際社會の、近き將來の世界における四分的對立が、餘測されることになるが、舊日本の念願としては、極東の新國際社會を、自己の指導のもとに、東亞共榮圈として、實現せしめようとするにあつた。しかし、東亞の新社會に例をとるも、國際社會は、交通關係を集團構成の中心原理たらしめるものであるから、單なる地理的接近をもつて、この新社會を構想することは、無益のことであらう。現に、大英帝國の如きは、地理的遠隔の諸地域を連ねて、一種の國際社會をなし、米國また、進歩せる現代的交通機關を利用して、米國傘下のそれを着企畫してゐる状態ではないか。

一方、國際社會といへども、爾餘の集團構成原理たるゲマインシャフト、ゲゼルシャフト等をふくみ、また、それによつて形態を規定される。フィリップスが米國と親和し、ビルマが英國と提携するといふ如き事實である。要するに、國際社會の現實的成立に關しては、國際的交通關係の實狀と、諸國家・各民族間のゲマインシャフト、ゲゼルシャフト關係が、物をいふのである。したがつて、世界各地のブロック社會なるものが實現される前に、場合によつては、世界諸國家・各民族が總體的に統一社會を完成するといふことが、あり得るかも知れないのである。

國際社會の生すべき根本的な交通關係といふ構成原理以上の、ゲマインシャフトの原理そのものは、一應、諸國家・各民族間の自然の好惡によつて決定される。それは、或ひは、文化關係の問題だといふことを得よう。しかし、ゲゼルシャフトの原理にいたれば、政治關係と、經濟關係が、斷然、事實を規制するところである。軍事

力や、貿易・通商が、諸國家・各民族を連ねる契機となつてはたらくものであるから、我國も、いまや、我國のもつ以上の諸關係にしたがひ、最も好適した國際新社會を選んで、その一員として、敗戦後の社會再建を平和的に、企畫して行くべきである。

### 三、共同生活

#### 1 社會生活

人間は、各個に離れた個人生活をなすのではなく、互ひに相倚り社會生活をいとなむのである。前章に述べた社會集團の事實の如きも、社會生活を行ふためのものであつて、社會生活を送るがため、人々の間に、それぞれの團結が、構成されるわけ合ひである。社會生活は、俗に共同生活といはれるものであるが、それは、人々互ひに關係し合つて生活することを意味し、相互扶助とか、協力とか、分業とかを行ふ現象を指さす。支配・服従關係のものなどもそれに入るが、普通は、共同生活觀念に屬せしめられない、鬭争・競争現象等も、結局社會生活の範疇に入れられてよいのである。これ、社會生活が、孤立的個人生活に對する概念であるのみならず、鬭争・競争等の事實が、本質的に、爾餘の共同生活のその如くに、人間間の關係現象であるからである。

社會生活については、よく、それが、人間間の動・反動であるとか、授受の作用であるとか稱せられる。要するに、作用と反作用の交換を、特質たらしめるのは、容易に吞み込めるところであらうと思ふ。なんらか社會集團を構成する人々は、この作用と反作用を繰り返し行ふことに、團結意義を認め、また、なんらか作用・反作用の社會生活をなす人々は、同時に一定の團結状態に入つてゐる。家族を構成する者が、家族生活をいとなみ、社

交生活をする人々が、社交團體をなすが如し。たゞ、例外のやうに思惟するのは、一方において、設立は見たものの、實際には活動を起さず仕舞の團體であるとか、他方において、敵對性をもつ作用・反作用すなはち、闘争・競争等を行ふ人々間に團結關係の存在しない事實であらう。

集團あれども、社會生活があらはれないといふ前の場合は、特殊の障礙が出て、必らず生ずべき社會生活を斷絶せしめたのでなければ、集團そのものが、もともと、形式的に作られ、毫も關與者の現實的關係に立脚してをらないことによるであらう。新夫婦が三々九度の盃を汲み交はしてゐる途端に、新郎・新婦のいづれかど心臓麻痺で死するなら、新夫婦生活は、永久に生ぜずに終らう。また、單に届け出でをしたり、發令されたりしただけの會社や、官廳だけでは、仕事は開始されようもないのである。最後のものの如きは、法律上團結であつても、いまだ現實的なそれとは認められない。

これに對して、社會生活あれども、團結狀態は存在しないといふ後の場合は、少しく分析を施さなければならぬものである。例へば、決闘する二人の簡單なる場合についていへば、二人の者は、利害の衝突からする排斥關係や、感情の反撥からする否定關係に立ち、したがつて、彼等の間には意志的提携も、感情的融和も、ともに毛ほども認められない。この意味において兩者は、團結關係をもたないこと明瞭であるが、しかし、それは、ゲマインシャフト、ゲゼルシャフトといふ、集團構成の第二、第三原理のみに關することであつて、第一原理たる接觸・交通の點からいへば、二人は、いま、最も密なる直接的接觸の關係にあるのである。彼等は集合狀態にあ

るのであつて、たゞ、それ以上の集團構成をなさないといふのみ。しかし、理論的にいつて、その程度においても、二人の者は、すでに、一種の集團狀態をなすのである。

以上述べたところを綜合すれば、社會集團は、構成員間の動・反動の社會生活の展開可能の基盤をなし、逆に、人間間に、なんらか社會生活の展示せられるところ、必らず社會集團が、舞臺として存在することになる。社會集團と社會生活との不可分の結びつきが、その結果、成り立つのであつて、われわれが、集團問題を取り扱つた上、いま進んで、社會生活の題目に入るのは、極めて自然の順序であらう。しかし、われわれが、社會生活の基盤たる人間團結そのものを、學術上、社會集團と呼ぶやうに、いま新たに題目とする社會生活を、こゝでもまた、その多義的解釋を防止すべく、社會過程と稱さうとする。

所謂、社會生活を意味する社會過程の現象は、すでに述べた如く、人々の作用・反作用であるから、つゞめて相互作用とすることが出来る。ドイツのジンメルが、社會をもつて、相互作用となした意義が、これによつて、理解されるであらうが、詳しくいへば、社會といはれる社會集團ではなく、社會生活たる社會過程が、相互作用の概念をなす。世にいふ社會、すなはち、社會集團は、かくの如き相互作用の展開可能な基盤である。そこで、相互作用の社會過程が、動態現象であるのに對し、社會集團は一種の靜態事實だと考へられる。社會集團は一の狀態を意味するものであるが、その舞臺の上に明滅・展示される社會過程は、それ以外の、機能現象たることを示してゐる。

とにかく、人間は、團結状態を構成しつゝ、所謂社會生活をいとむ。その生活過程を分析することは、われわれ自身の生活内容に立ち入ること、われわれとして大いに興味を覚ぼえる點でなくてはならぬ。社會過程の究明は、人間自體をその生活營爲の面から把握するに役立つはずのものである。

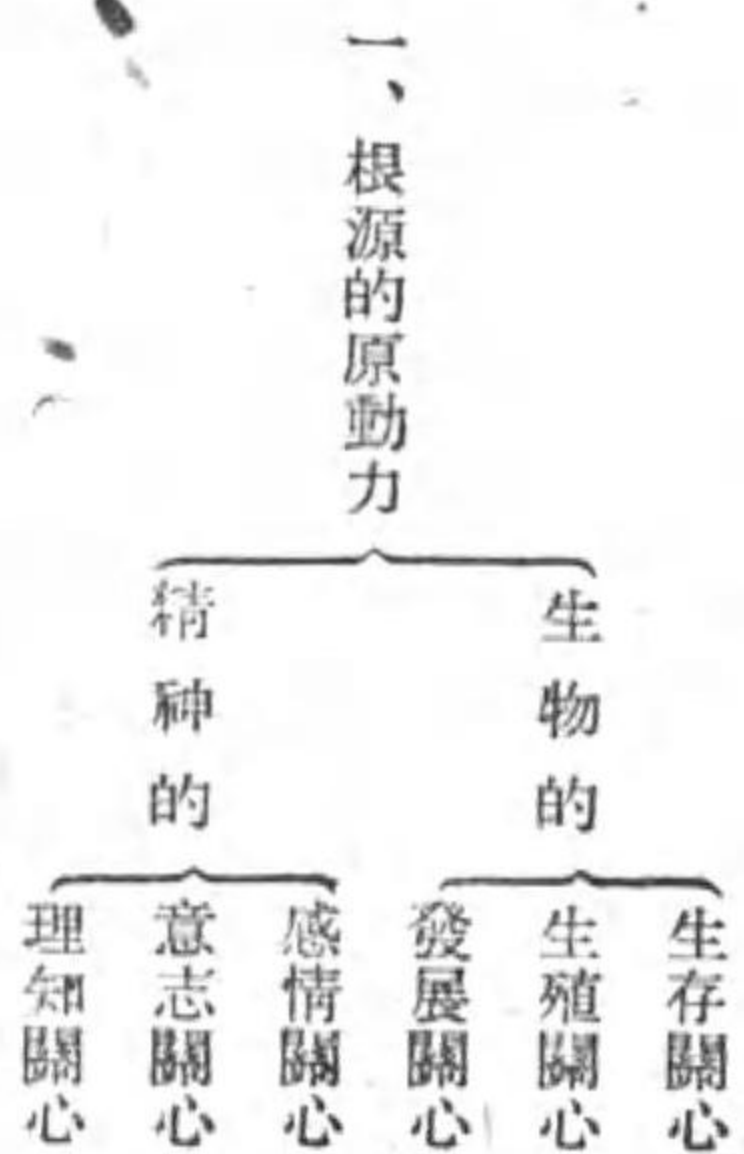
**2 生活原動力と生活環境** 人間生活は、すなはち、社會過程といふ生活過程をなすのであるから、社會過程が如何にして生起するかの問題は、一應、人間生活の原動力の考究として意義づけられるであらう。その問題から始めて、それに關聯する、生活環境の事實にも觸れて行きたいと考へる。

人間生活の原動力は何か哲學めく問題であるが、事柄を科學的に研究して行くかぎり、その原動力は、生理・心理的存在である人間の生の衝動だといはなくてはならぬ。すなはち、生きんとする慾望であつて、哲學問題としては、この生きんとする衝動を、宇宙原理に結びつけて解釋しようとするのであるが、科學の面においては、むしろ、この生の衝動が、如何なる形をもつて、現實存在するかを突きとめようとする。生理・心理的存在たる人間の生の衝動であるから、これもまた、生理的慾望と心理的慾望の両面をもつのであるが、從來、學者は、本能とか、關心とかいつて、その事實を取り扱つてゐる。

英國の社會心理學者マクドゥガルは、人間の生活原動力たる本能問題を考究して、最も功績をあげたが、彼は、人間を、根本的に生活に驅り立てる原動力として、次の十一の本能を數へてゐる。曰く、脱走本能・嫌惡本能・好奇本能・闘争本能・服從本能・自己主張本能・慈愛本能・生殖本能・群棲本能・獲得本能・建設本能等が、そ

れであつた。彼の分析は、微に入り細を穿がつてゐるもの、なほ、その過・不及を批判する者は絶えない。キツト総合的な、少數の關心をあげることで満足する社會學者や、今少し立ち入つて、饑餓本能とか、狩獵本能とか、清潔本能とか、放浪本能といふ種類を名づける心理學者も見られる。

マクドゥガル等の生活原動力の擧示は、大體、適當なるものと思はれるが、本能・關心は、結局、生理・心理的存在たる人間の生の慾望に發するところであるから、根源的なものとしては、生物的關心と、精神的關心とに大別され、次の表の如きを得ようと思ふ。



しかるに、人間は、つねに集團を作つて、他の個人と生活をともにし、物質的事物や、文化的價値に交渉ある生活をなす關係上、如上の個人的な、根源的生活原動力は、派生的な形のもとに、左の表の如く、示されるであらう。

對人關心  
對物關心  
超越關心

以上かかげた表は、いたつて大綱みのものであるが、もつて、生活原動力のあらましの把握には役立つであらう。しかし、こゝに注意せられなければならないのは、人間生活の現實の姿は、單に、その生活原動力からのみ推知出来ない點であつて、それは、人間を取り巻く、外界の生活條件が存するからのことである。人間の生活環境と呼ばれるものが、それであつて、ドイツのヴィーゼが、

二〇二 二〇三 X 編著

の公式のもとに、そのことを表現したのは、適切であつたであらう。そこで、われわれは、生活原動力の問題から進んで、生活環境の事實を考察しておかねばならぬ。

人間生活條件たる環境の第一として、自然環境の存することは、もちろんである。人間もまた、生物の一種として自然の子であるとともに、自然界の内に棲息する。したがつて、彼を圍繞するこの自然界の影響を受けとらざるを得ないことも當然であつて、こゝに、自然環境の條件性が生じて来る。このことは、何人にも首肯出来るが、一般生物と異なり、人間はこの世に生れて來るとともに、ひとり自然界を環境とするのみならず、同時に、文化的事物の間に自己を見出すものであつて、制度とか、慣習とか、思想とかいふ雰圍氣が、彼をつゝむ。制度

のもとに生き、慣習に縛られ、思想の陶冶を受けとるわけであつて、そこに文化環境の概念が成り立つ。生物は

自然環境のみを生活條件とするが、人間はそれに加はつて、文化環境を有する點が、特別なのである。

文化環境は、人間に對して、自然環境に次ぐ環境をなすが、他に残された環境として、社會環境の存在があげられてよい。社會環境とは、こゝでは個人に對し社會集團のもたらす諸の生活條件であつて、他人と相倚つて團結をなして生活する結果、他人との間に、關係・交渉を生じ、そこに、孤立生活に認められない感化・影響を受けとるのである。しかし、かの文化環境の如きも、詮じつめれば、それが社會集團のうちに、社會過程をまつて形成される、社會的構造物であつて見れば、廣義における社會環境に屬することになるのである。

人間現實の生活・諸行爲は、以上あげた生活原動力を本とし、これら生活諸環境の條件下に展開する。われわれは、心して、その關係を見失はない用意を整へてかゝらなければならぬ。

3 社會的行爲 ジンメルは、社會過程をもつて、人間間の相互作用と解したのであるが、嚴密にいへば、社會生活の作用・反作用が、相互化せられない場合もないではなからう。一方が呼び掛けるのに對し、他方が返事をしないといふ場合や、相手がウツカリ返事をしたのに、實は、呼び掛けがなかつたといふ例も、數多く存するからである。かやうな場合は、作用が相手に届かないとか、相手の側の空耳とかもあつて相互作用に障礙や、故障を生ぜしめる理由とともに、當事者のいづれの側かが、故意に、作用・反作用を避けることのあるのを注意すべきである。反作用を誘致すべきやうなジエスタアを示して、相手の出方を見たり、相手からの作用に

對して、これを黙殺する類である。これらの場合、相互作用はなく、たゞ、一方的行爲あるのみである。片戀、空返事、獨り合點、ドンキホーテリズム等、みな、悉く、その例であらう。

一方的行爲とともに、相互作用が表面上行はれても、實は作用・反作用が對應せず、兩者のそぐはない關係に終る、分裂現象の存することをも、指摘せねばならぬ。一體、社會過程における相互作用は、人間のことであるから、精神的なことを特徴とする。それゆゑジンメルの如きも、それが心的相互作用なる點を説くのであるが、たゞ、誤まつて解釋せられることのあるやうに、それは、純然たる精神と精神との間の相互作用といふわけではなく、有心者たる人間間の相互作用であるから、精神的特質をもつといふのみ。いはゞ、人間現實の肉體的相互作用であるが、精神がこもつてゐるといふのみなのである。さて、とにかく、社會的相互作用は、精神的なものであるから、外形的に相互作用が生じたとしても、その内面的な意味が一致しないならば完全なものとはいへないのである。例へば、一方の取引態度に對し、相手が應戰行動に出づるならば、相互作用とはいへ、社會的なものではなからう。この場合にも、外的事情がそれを制約することもあるが、また、當事者の意志がしからしめることがある。外交會談や、議會の問答や、商取引に行はれる駆け引と呼ばれるものは、特に、後の場合の適例となつて来る。

社會過程は、事實上、右の一方的行爲や、分裂現象も、時々、混入せしめるものであるが、しかし、大多數のそれは、正しい意味の相互作用、すなはち、當事者間の精神的意味のよく呼應した相互作用をなすであらう。呼

吸の合つた相互作用、例へば、一方の取引的態度に應じて、相手もまたそれに答へて取引的行動に出るとか、一方の支配的行爲に對して、他方もまたそれに準ずる被支配的立場をとるとか、一者の鬭争的身構へに向つて、他者もまた、それに抗して鬭争的身ごしらへをなすといふやうなものである。われわれは、この種の完全な相互作用について、後に、社會關係現象として説くであらう。

さて、一方的行爲にしても、分裂現象にしても、また、完全なる相互作用にしても、すべて社會過程は、有心的な人間行動として、精神的なるものであるから、單なる行動以上の行爲の概念を満足する。しかして、この行爲は、社會過程の場合において、相手たる他人へのはたらきかけをなすのであるから、相手ある行爲、すなはち、社會的行爲をなす。社會的行爲とは、對人關係的な精神的行動であるが、特に注意せらるべきは、この行動の結果が他人に波及するばかりでなく、精神において、その波及をあらかじめ心得てゐることであつて、行動の社會性が豫定せられてゐる點である。例へば、相手をしてしかじかせしめようとして、相手への行動を起こすのであつて、それゆゑ、豫定された反作用が相手に起こらざるとき、不完全な分裂現象が生じ、それが起こる限りにおいて、完全な相互作用がある結果になるわけである。

かくて、社會的行爲は、社會過程の最も分析的な要素をなすところのものであるが、社會集團の構成諸原理にしたがつて、およそ、次の如き特質を想定出来るであらう。すなはち、接觸・交通の構成原理によつて、人は相手たる他の集團構成員に對して、好むと好まざるにかゝはらず社會的行爲に出でざるを得ない關係におかれ、先

づ不可避的な社會的行爲をとる。獨唱といへども、満座の聴衆の意を迎へて歌はれる如し。次には、この關係において、相手が自己に對して如何なる態度をとつて來るか、また自分は相手に對し如何なる態度をもつてすべきかを知らんとして、相手調査的な社會的行爲に出でる。對座する人々は、つねに相手の氣配に氣をくばるであらう。最後に、この關係は、ゲマインシャフト、ゲゼルシャフト等高度の集團構成諸原理を缺くとき、感情的融和・意志的提携とは逆の、感情的反撥・意志的闘争にいたり易く、敵對的行爲を可能にするのである。闘争や、競争が、始めて接觸關係に入る人々の間に生じ、開けゆく交通關係とともに、國際關係が反つて緊張を生ずる所以がそれなのである。

ゲマインシャフトの存在によつて、社會的行爲は、頗る親和化するであらう。これは、いふまでもなく、人々の間に感情的融和の存在することからであつて、家族内で、互の態度や行動が、相互扶助化するのをもつて、そのことは推知出來よう。ゲゼルシャフトの存在は、また、社會的行爲の規格化を誘ふのであらう。意志的提携は、つねに、提携して何をなすかを豫定してゐるのであつて、豫定せられた作業・職務が、社會的行爲として、そこに展開するをもつてである。なほ、これらの集團構成諸原理の深淺・緊密如何に應じて、如上の特徴ある、内部の人々の社會的行爲は、また、程度上の強弱を示すであらうことも、當然であつて、容易く諒解し得るところであらう。

#### 4 社會過程の内容

社會生活を意味する社會過程は、以上の如く、要素的に、人々の社會的行爲か

ら組み立てられる。したがつて、社會過程の内容を云々せんとする場合においては、それを、その要素である社會的行爲に溯つて探求することが、一番たしかな仕方であると考へなければならぬ。しかし、それを究明するならば、社會生活が、如何なる内容から成るかといふ問題や、また、人間生活が社會生活をなす點からいつて、人間生活が如何なる内容をもつかといふ事柄にも正式解答を用意することにもならう。

すでに述べた如く、社會的行爲は、他人關係の行爲であり、すべて事實上の社會過程がそれであるにもかゝらず、よくよく、社會的行爲の實際を見ると、この他人關係性が、顯著なものと、しからずして、他人關係性が曖昧なるものに分かれたることを發見する。前のものでは、それが必然的であるのに對し、後のものでは、それが、必ずしも、必然的でない如くに看取せられる。例へば、言語現象などは、必らず他人に對する呼びかけ、乃至、他人からする應答でなければならぬのに反して、認識現象などは、獨りで眞理を研究するといふ例から知られるやうに、他人と没交渉にもなし得るものであらう。いな、認識現象などは、他人を相手とすることなく、眞理を相手とするものだとすら見做せるものである。

他の人間ではなく、人間以外のものを直接の相手とする行爲は、決して少数とは見做しがたいのである。認識現象以外でも、藝術現象や、娛樂現象や、宗教現象等、みな、しかりであらうと思ふ。生産・經濟・消費などもそれに入るであらう。すなはち、これらの行爲・現象においては、直接の相手は、價值であつたり、物質であつたりするのであつて、決して、他の人間ではない。高々、他人は、關係者として、それに參加して來るのみ。正

式に相手として認められる立場にあるものではないのである。

しかし、この問題を、なほ、よくよく突きつめて考へて行くと、如上、社會的行爲からいつて例外的な種類に見える諸現象・諸行爲も、なるほど、直接の相手としては價値的事物や、物質的事物をもつものであるが、間接的には、他の人間になんらか交渉をもつことをつねとするのであつて、他人が關係者として存する事實は掩ふべくもない。例へば、認識現象は、獨りでなし得る如くであつて、實は、言語を通して他の學者に教へられつゝ、また著述をなして、結果を他人に發表するといふ關係がある。認識現象以外の、一見、社會的行爲と認められないすべての種類の現象も、また、しかりである。結局、陽の社會的行爲と、陰の社會的行爲の差異しか、存在しないわけである。

そこで、われわれは、社會的行爲に、その陽の種類を意味する、直接的社會行爲と、陰の種類を意味する、間接的社會行爲とを區別するであらう。後者には、さらに、直接には物質相手の、對物的行爲と、直接には價値相手の、超越的行爲とが分かれたる。

#### 一、直接的社會行爲

これに屬するものとして、意味傳達現象を意味する、言語現象が最初に上げられよう。政治現象の如きは、最も重要なものであるが、これは、社會統制の行爲をいふのである。政治現象から規定せられるものを遵奉するのは、法律現象であるが、前者の能動的行爲であるのに比して、後者は受動的行爲をなす。教育現象が、また、こ

こに屬するが、これまた、能動性の行爲であつて、受動性をもつ習現象に對する教育現象は、集團内に蓄積された文化内容を選択して、未熟なる構成員に授與する、いたつて社會的特質に富む事實である。

#### 二、間接的社會行爲

イ、對物的行爲　物質を、直接、相手とする諸行爲であるが、先づ、物質の性質・形態を變更する技術的行爲を數へる。技術とは、物質の發掘・捕獲・加工・培養・飼育・治療・破壊等を總體的に意味する。現代の技術的行爲は科學の理論を本にして行はれるが、原始・古代のそれは、魔法を本に行はれ、呪術現象をなしたものである。かくて、われわれ人間の立場から效用を以てして技術がなされるとき、生産的行爲の概念が成り立つ。經濟的行爲は、ひろくは、生産を入れてもいはれ得るが、物質の運搬・移動を行ひ、人に對する關係をかけることが本來の意味である。すなはち、交換・分配といふ意味である。消費現象が、この經濟現象につづく。

ロ、超越的行爲　價値を直接の相手とするものであつて、宗教的行爲の如きは、神を相手とする點に、最も明瞭な、この種類を代表する。その他、眞・善・美等の諸價値を相手とする認識現象・道德現象・藝術現象等、これに屬する。道德現象は、その限りでは、超越的行爲であるが、實は、集團内の制度・慣習・思想等を遵奉する行爲であつて、爾餘の構成員が、これらのものを支持し、個人に遵奉を強制する點からいへば、道德現象は、直接的社會行爲、特に受動的なそれだと稱するを得よう。他に、娛樂現象があつて、これは、行爲そのものに感覺的な價値を見出すところのものである。



以上、社會的行爲の種類、したがって、社會過程の諸内容をあげることが出来た。人間生活は社會生活をなし、社會生活が社會過程であるから、社會過程における、如上の諸内容は、また人間生活の内容でもある。屢々、人間生活には、物質生活と精神生活の對立のあることをいふのであるが、かくの如き對立をあげるのは、眞理ではない。強めてあげるならば、純社會生活と、物質（相手の）生活と、價值（相手の）生活との別であらう。

### 5 社會關係現象

人々の間の社會的行爲が、正しい意味での作用・反作用を形成するにいたるならば、一方の取引の態度に對する、相手のそれに答へる取引的行動とか、一方の支配的行爲に對する、他方のそれに対する被支配的立場とか、一者の鬭争的身構へに對する、他方のそれに抗する鬭争的身ごしらへとかいふやうに、當事者の間の社會的諸行爲は、照應・連絡ある關係形態をなすであらう。それらの關係形態を、取引現象とか、支配現象とか、鬭争現象とか稱することになるが、その際においては、それらの關係形態を組立ててゐる、當事者の諸行爲を、社會的行爲たる點にしたがつてバラバラに取り上げずに、その照應・連絡した形態に應じて、綜合取り扱ふことが出来る。社會關係現象と呼ぶのが、すなはち、それである。

われわれが、それらの社會關係現象を、それを組立てる當事者の社會的諸行爲にまで溯つて取り上げるのは、もちろん、差支ないことである。取引現象を、一々これに關係する商人の個々の取引的態度や、行動にときどきして、その事實や、經過を説明する如し。例へば、甲は某々の品物を金に換へんとして、金をもつ乙に、一定の金額を提供して呉れば、その品物を引き渡す旨を傳へ、乙は、その一定の金額の支拂ひにおいて、某

々の品物を買入りたいと思ひ、その品物を所有する甲にそのよしを告げ、甲乙兩者の申出と受諾によつて、甲は乙に對して品物を引渡し、金を受け取る態度に出で、乙は、甲に對して金を手渡し、品物を買ひとする行動をとつたといふ如きである。しかし、見る通り、説明は冗長であつて、かくいはなくとも、甲乙は、品物と金とを交換する意圖に出で、兩者のその意向が合致して、取引が成立したといへば足りよう。

けだし、社會關係現象においては、相互に照應・連絡ある當事者の社會的諸行爲の間に、一方のとする態度、立場と、相手のとする行動・行爲との間に、共通の要素が見られるところであつて、右に例示した取引現象の場合ならば、甲乙ともになんらかの事物の提供において、他のなんらかの事物引き取りの意志や、それを相互に相手に傳へる態度や、また、それを實行する行動が、それである。そこで、それらの共通要素を契機として、現象をバラバラに解きほぐすことなく、綜合的に取り扱ふ便宜が開ける。その方が、簡便であり、事柄はそれによつてなら毀傷せられることがないゆゑからである。

取引現象の如き、對等の關係現象に關して、その事實は明瞭であり、鬭争・競争諸現象なども同じであるが、たゞ、支配・服従といふやうな、差等ある關係現象については、少しく注意を要する點もないではなからう。一方が、支配行爲に出づるに對して、他方は、被支配といふ反對の立場をとるからであるが、しかし、こゝにおいても、一方の行爲に意味されてゐる相手の被支配的立場といふ内容が、そのまゝ、他方に實現されることであつて、所謂共通要素が、こゝでも認められる。そして、この共通要素が、こゝでは、一方の行爲を顛倒した如く、

裏返して示されるといふのみ。

さて、社會關係現象は、一々その具體的事實をとつて行けば、無限であるといはなければならぬ。社會過程の壓倒的な多数のものは、實に、この社會關係現象たるをもつてである。しかし、それら無数のものを見通すべく、その基礎的諸種類を分かつことは、比較的容易であつて、われわれは、それとして、敵對現象と、上下現象と、和合現象の三つのものを分かつ。敵對現象とは、人々相争ひ、排斥し合ふ事實であり、上下現象とは、人々支配・服従を行ふ事實であり、和合現象は、人々相親しみ、助け合ふ事實である。社會關係現象の根本的種類が、これら、三つのものに分類せられることについては、一應、説明を與へておかねばならないところであつて、それを説明すれば、次の如くなるのである。

人々、社會過程をいとなむ際、その相手に對する態度として、相手の人格や、立場や、性質等を肯定するか、しからずして否定するかの相違があるであらう。お互ひ、否定し合ふのは、人々が、共同生活をいやがる場合であつて、そりが合はず、排撃する場合である。そこに成り立つ社會關係現象が敵對現象である。反撥や、抗争が、その例である。この場合、人々は、相互に自己を主張するのであつて、その點、平等の立場にあることが分かつ。それとまさしく反對に、人々相互に、肯定し合ふならば、これは、共同生活を欲する場合であつて、仲をよくし、協力する場合である。そこに、敵對現象と對照する、和合現象を見るのである。取引や、相互扶助が、その例であることは、もちろんであつて、この場合、人々は、相互に相手を尊重する關係上、平等の立場にあるこ

と明瞭である。

やゝ説明の複雑するのは、一方の肯定に對し、他方の否定をもつてする、第三の組み合はせといふべきである。一方の肯定は、他方が否定したのでは、關係現象は分裂を餘儀なくされる道理であるが、他方が、否定をもちつづけるのでなく、一方のもつ勢力に壓倒されて、止むなく本來の否定を肯定化して來る場合、そこに生ずるものが、支配・被支配の上下現象をなすのである。搾取や、指導が、その例となるが、この場合、人々が平等的立場にあるのでなく、まさしく、差等的・不平等の立場にあることは、一方の意志のみ行はれて、他方のそれは、禁遏・抑制されてゐることからして、知られるであらう。

社會關係現象は、大多數の社會過程をなすものであるから、社會過程の研究上、いまま少しその内容に立入つて、その理論を説くであらう。

## 6 基礎的社會諸現象

社會關係現象なるものをあげて、その基礎的種類をあげたが、いま、その一について、少し立入つた説明を與へて見たい。

一、敵對現象　これは、人々が、なほ平等と見做される立場で、互に、相手の人格・性質・立場などを、否定しつゝ行ふ社會關係現象の種類である。反撥や、抗争や、闘争や、競争が、その具體的な例であるのは、すでに、示唆してあるところである。この事實において、なほ、二つの小種類が分かれてよいであらう。一は、人の感情の對立から來る盲目的な排撃現象たる反撥現象、それに對して、他は、人々の利害・目的の衝突から來

る意志的排斥現象たる抗争現象である。未開人や、婦女子の敵對現象は、多く、感情的反撥現象であるが、文明人や、成年男子のそれは、意志的抗争現象に傾むく。反撥現象は、理由のないものであつて、解決に困難であるが、抗争現象は、相對立する人々の利益・目的を調整すれば、解決せられる面をもつてゐる。反撥現象は、破壊の原理であり、抗争現象は淘汰のそれである。なほ、敵對現象には、外形上、直接的敵對と間接的敵對の區別があつて、前者は、互に相手を前にして、相手と戦ふものであるに對し、後者は、一定の仕事をして、仕事の上において、相手を打ち敗らうとするものである。闘争は前のものであり、競争が後のものである。

二、上下現象 支配・服従の現象であることをいつたが、これが、一方の肯定に對し、他方が否定するが、一方の勢力によつてこの否定を肯定化するを餘儀なくされて生ずるものであることを説いた。しかるに、他方が否定を肯定化するに際し、感情的に一方の者になびいて行く場合と、しからずして、消極的な利益・目的追求の意志から、いたし方なくしたがつて行く場合とがあり、その差によつて、小區分が生ずる。こゝに感情的といふのは、例へば、一方の精神力に壓倒されて、斷はり切れないといふ如きものであり、意志的といふのは、例へば、一方の物質力に抗し得ず、止むなく關係をつゞけるといふやうなことである。人生意氣に感ずる、親分に對する子分關係、背に腹は代へられぬ、暴君に對する臣下の關係を對立して考へれば、その區別は吞み込めるであらう。前のものを承服現象となし、後のものを制壓現象となす。承服現象は、専ら同化の原理であり、制壓現象は、強制的同化を意味する適合の原理である。なほ、上下現象において、支配者の利益のみが見られ、服従者は犠牲を

拂ふばかりであれば、搾取の概念が成り立つ。しかし、上下現象はすべて搾取でないものであつて、服従者が利益を享くるときなどは、それであつて、その場合は、指導と稱せられる。上下現象は不平等の立場をもつて生ずる現象であるが、嚴密にいへば、一見、和合現象と認められるものでも、實は、輕度の上下現象たる點が、少ないのに氣付くであらう。夫婦生活が、よく分析して見ると、夫婦いづれかの支配性を、内容としてゐることなどが、その例である。

三、和合現象 これは、當事者が、平等の立場で、互に、相手の人格・性質・立場などを肯定して行ふ種類であつて、親和・協力・取引・社交などに、現實的な例證を見よう。この平和的な種類においても、二つの小種類は分かたれる。すなはち、感情的に、心からなる一致を示す場合と、利益・目的追求の意志上、互に援助するといふ如き場合であつて、前者は、家族生活、友人仲間の交際などに示され、後者は、組合・會社等の仕事の上に展開される。前者を親和現象となせば、後者は協力現象であらう。よく、共存共榮といふことをいふが、これが、和合現象たるは、もちろんであるが、共存をたゞ楽しむ場合と、相協力して共榮をはかることは、二つの場合であると考へられてよい。親和現象は、保存の原理としてはたつき、協力現象は、創造のそれとして作用するであらう。前に、農村の親和生活が保存に傾むき、都會の協力が、進歩を得しめることに觸れたが、その差は親和現象と協力現象の効果に他ならない。心からなる親和現象を行ふ人々は、相互に、相手をかばふことによつて、關係事物はよく保護されるが、一面、舊守保全の缺點をあらはす。協力するものにおいて、なんらか利益・

目的が狙ひとなつてゐる關係上、あとから、あとから、なにほどかの創造はいたされるゆゑである。

さて、以上社會關係現象に三大種類のあることは、その現象を大きな内容たらしめる社會過程や、社會過程をそのまま内容とする人間生活に、やはり根本的な三種類のふくまれるのを結論せしめるものとならう。人間生活や、社會過程は、敵對・上下・和合の三大局面をもつて成り立つ。これ、ダーウイン派が生存競争を力説し、ニーチエが強者の支配・弱者の服従を説き、また、クロボトキンが、相互扶助を論ずる所以であつて、彼等の見所は、綜合すれば、もつて、人間生活・社會過程の把握に役立つ。たゞ、彼等個々が一方的に強調する一つ一つの現象の指摘だけでは、如何にしても、物足りないものであつて、人間生活は生存競争のみといふダーウイン派の説も、それが、支配・服従のみと稱するニーチエ説も、また、それが、相互扶助のみと見るクロボトキンの立場も、それだけでは満點と考へるわけに行かない。彼等は各々、三分の一だけの眞理を言ひあててゐるのみ。

社會關係現象の三大種類は、それぞれ、また、二つづゝの小種類に分かたれてゐて、六種類のものが、展開することとなる。人間生活・社會過程は、複雑のやうに思はれて、しかも、理論の前では、存外、簡單な形態のものに捕捉される。理論は、それによつて複雑な事態を見通し、その處理まで示唆しようとするのである。

7 社會的模倣 社會關係現象について説いたが、これに附帶する二三の事實を、こゝに述べることにしたい。その第一は、模倣の現象であり。その第二は、傍觀者の役割であり、その第三は、社會的距離といふ事實である。これらいづれのものも、社會關係現象に隨伴して、われわれの注意しておかなければならない、社會

過程の事實をなすのである。

模倣 この模倣とは、所謂人眞似の現象をいふのであつて、社會關係現象をいとなむ人々の間に、本來の關係現象をいとなむとともに、それに隨伴して行ふところに、模倣が、社會關係現象と、その存在の幅を等しからしめる點が示される。いな、模倣は、かの一方的行爲や、分裂現象の場合でさへも、隨伴し得るのであるから、ひろく社會過程一般に、模倣の現象は、行き渡つてゐると見做さなければならぬ。それであるから、曾てフランスにおいて、タルドが、社會生活を研究せんとすれば、それと存在の幅を等しうし、且つ、客觀性をもつた、模倣の現象を取り扱はるべきだとなし、これを研究して、模倣の法則を明らかにし、それをもつて、社會法則視したものは、奇知的だといつてよろしい。しかし、模倣は如何に社會關係現象や、社會過程に隨伴する現象であるとしても、それが隨伴する事實とは混同してはならぬ。われわれは、模倣現象をどこまでも、社會關係現象や、社會過程に附隨する、第二次的現象として取り扱つて行かう。

模倣は、かくの如く、タルドによつて、重要視せられるのであるが、事實、社會過程のうち、これほど、顯著な現象もまた、少いであらう。友人仲間は、お互に、相手を眞似、家族の人々も、お互に模倣を行ふ結果、精神・動作等の上で、同一家風を示すのである。何より、流行の事實を見よ。これこそ、ひろく、全體社會の構成員間に、模倣が急激に行はれることをいふものではないか。戦時といはず、平時といはず、宣傳といふ作用があるが、これまた、巧みに應用された模倣現象に他ならないではないか。その他、教育の如きも、模倣現象を利用

した事柄と考へられよう。タルドは、同時代の人々の間に行はれる模倣のほか、異なる時代の人々の間に、縦の模倣の存することをいひ、それが、すなはち、傳統をなすのをあげたが、そのこともまた、記憶に止めてよいであらう。

しかし、タルド以來、模倣現象の研究の進んで來てゐることも、事實である。タルドは、模倣といへば、簡單な事實の如く考へてゐたが、事實そのものが、複雑してゐるのである。例へば、子供が無心に、大人を真似るのは、衝動的であるが、學者が、他の學者の説を批判してとり入れるのは、形は模倣の如くであつて、實は、單なる人真似ではあるまい。眞理に合致するや、いなやの批判と検討によつてしかるのであつて、合理的だと稱さなければならぬ。ゆゑに、模倣については、その種類を、先づ、鑑別して行かねばならぬ。模倣の種類として、われわれは、左の數種をあげる。いま、その一々を説明するであらう。

**一、衝動的模倣**　これは、前例の無心の子供の場合のやうに、なんら事柄を深く考へず、他人の行爲・態度を真似るものである。俄か雨にあひ、前を行く人が傘を開らくのを見て、自分もまた、無心に携へてゐる傘を開く。多くの群棲動物においては、この衝動的模倣が發達してゐるのを見るが、それは、けだし、生活の安全率から來たものであらう。人間もまた、階級的な社會的存在であるから、模倣の衝動にかられる。この場合でも、未開人や、婦女子が、特にしかりであるが、理知的人間の場合では、模倣せんとする衝動は強いも、それを抑制して、理知による批判を試みる點、この種の模倣が、下火となる結果を來たす。成年男子とともに、文明人にお

ける事實が、それである。

**二、優勝模倣**　これは、全く特殊の模倣である。つまり、優勝的地位にある者に對して、劣勢的立場に立つ者が、好んで行ふ模倣であつて、例へば、下層階級の者が、上層階級の者を模倣し、下僚が上役を真似し、農村の人々が、都會の人々を模倣し、後進國の人々が、先進國の人々を真似する如きものである。衝動的模倣と異り、無意識的でなく、意識的な點を注意すべきであるが、何故、かくの如き模倣現象のあらはれるかは、特に考察に價ひしよう。けだし、社會的劣勢者は、優勝者のなすところのものが、一から十まで有效・適切だとの魅力にかゝつてゐるのであつて、優勝者に威光を見出す結果、それに隣るのである。この模倣は、無心でなく、有心的であるが、いまだ、理知的批判を通さざる點で、大衆性や、後退性を暴露するであらう。

**三、合理的模倣**　さきあげた、學者の批判的模倣の場合が、よく、この種類を例證する。すなはち、他人の行爲を、自己の立場において、冷靜に批判・検討して、それが、眞に、有效・適切なるを見究はめて、初めて模倣する、さういふ種類のものであるから、選擇的模倣であり、意識的なものはもちろん、高度に理智的なものといはなくてはならぬ。したがつて、形は、模倣とはいへ、精神において、自發性を藏する。指導階級の行ふ模倣は、それであり、眞の指導者たるべき者は、専ら、この種の模倣に人真似を限定するであらう。

模倣の種類は、略ぼ、以上につきるが、こゝに附言しておきたいのは、すべての模倣は、無條件に成り立たないといふことである。模倣の客體と主體との間に、同一關心と、同一環境が存し、その限りで、同一行爲が成り

立つべき境遇にあるとき、一方の刺戟が、他方の模倣を誘ふのである。このことについては、さらに觸れる機会があるであらう。

**8 傍觀者の役割と社會的距離** 社會關係現象は、關與する當事者の間に行はれるものであるが、これらの當事者は、必ずしも、すべての集團構成員でなく、當事者以外、若干の集團構成員は、當該關係現象の外部に立つ場合が少くない。市場を構成する人々は多數であるが、そのうち、特定の二人の間に、取引現象が行はれて、他の人々は、それに關與しないといふやうな場合があらう。かくの如く、關係現象の圏外に立つ人々は、もちろん、それに觸れず、文字通り圏外にあることも少くないが、しかし、よく、傍觀者として、それを見守る場合がないではない。社會集團の團結關係は、關係現象の當事者以外の者を、この傍觀者たらしめる契機をなすとも、いへるであらう。

この傍觀者は、第三者とか、彌次馬とか、岡目とか、オブザーヴァーとか、審判官とか、場合々に、いろいろの名稱が與へられる。彼等は、現實に、關係現象の當事者ではないが、しかしそれを見守つてゐて、大きな影響を、現象の推移に對して與へる。例へば、一方が卑怯な行爲をすれば、難詰し、不法の態度に出れば、追及する。所謂毀譽褒貶の主體となるのであつて、これによつて、關係現象は、當事者のみの場合とは、非常に違つたものになされて行く。最初にあぐべきは、その人道化である。殘酷なる行爲は禁絶され、不道義のそれが、抑壓される。彌次馬の存在は、喧嘩を道德化するのである。第二にあぐべきは、關係現象の友愛化である。なるべく内々のものとして、角をたてず、圓滿裏に事を選ぶやうにさせられる。家長の存在が、家族内部のいざこざを、丸く収める例が、それであらう。第三には、關係現象の規律化であつて、集團的慣習・制度・思想にしたがつて、事實の處理のなされることである。審判官は、ルールにしたがつて、競技や、仕事を判定するのであつて、關係現象は、集團内部の約束・紀律にしたがはしめられる。

傍觀者のこれらの役割は、もとを訊せば、當事者と傍觀者とをともにふくむ、社會集團の構成原理に基づくものであつて、第一の人道化は、接觸・交通の原理をまつて生じ、第二の友愛化は、ゲマインシャフトの原理の上から來たり、第三の規律化は、ゲゼルシャフトの原理に基づくものである。しかし、それはそれとし、傍觀者の存在は、關係現象を人道化し、友愛化し、規律化することになるから、あらゆる關係現象、したがつて社會過程は、傍觀者のこの役割によつて、道德性を取得し、秩序性をも呈して來る。社會生活・人間生活が、道德・秩序と深く結びつく理由が、この點からも、理解せられてよいであらう。

われわれは、社會關係現象の種類をあげたが、この社會關係現象を行ふ人々の間には、その種類の異なるに應じて、自づと、親疎の區別が起こつて來る。例へば、敵對現象に立つ人々は、和合現象をいとむ人々の場合におけるよりも、疎隔してゐると見做されるのであつて、上下現象の當事者間の如きは、敵對現象の當事者間よりも、疎隔程度は、少いにしても、和合現象當事者の間柄に較べれば、なほ一段、親密程度が足りないといふ観測されよう。このことは、常識上においても、あの人は誰々に接近してゐる。彼等は相互に遠ざかつてゐる等の表現に

よつて、始終、問題とせられるところであつて、かくの如きすべての親密・疎隔関係を、社会的距離と稱する。社会的距離とは、社会過程をいとなむ、集團人の間の精神的なへだたりの意味をもつ。したがつて、隣り同志であるからといつても、人々が反目し、争ふ場合においては、社会的距離が大きく、遠く離れてゐても、親友・縁者は、社会的の距離が、いたつて少ないわけである。

すでに引例した如く、敵對現象に見る敵對關係は、和合現象における和合關係よりも、社会的距離を短縮し、上下現象の上下關係が、その中間となるのは、容易に理解されることであらう。結局、社会的距離は、敵對關係において大、上下關係において中、和合關係において小である。それによつて、社会的距離のスケールが、大きく示されるわけであるが、いま一步立入つて、このスケールを示すならば、次の如くなるであらう。

距離の大 ↑ ↓ 小

敵對關係(反撥關係—抗争關係)——上下關係(制壓關係—承服關係)——和合關係(協力關係—親和關係)

こゝに、如上の社会的距離のスケールを見ることによつて、われわれは、人々の間柄をして、なるべく距離の短縮化を狙ひとせねばならぬのを知る。和合關係、特に親和關係が、その理想であることはもちろんであるが、理想的ならざる敵對關係や、上下關係においても、出来るだけ、社会的距離の短縮化をはからなければならぬ。敵對關係をやめて、少くとも上下關係にもち來たすとか、上下關係をさらに和合關係に落ちつかせるとかいふことであつて、なほ、敵對關係のうちでも、盲目的な敵對たる反撥關係を、利害・目的を中心とする抗争關係にお

きかへ、上下關係によつても、たゞ強力の前にひれ伏す關係たる制壓關係をやめて、心からなる承服關係を招來するをもつて心得とすべきであらう。個人間のかくの如き措置は、多くの個人から成る集團間の關係についてもいへ、階級と階級の間や、國際間の問題にも、基本的示唆を與へるものと信ずる。

### 9 集團活動

社会過程をいとなむ集團人のことであつて、一つ一つの集團内において、各種類の生活活動が見られる。家族は家族生活を行ひ、農村・都會また、農村や、都會の活動をなす。國家や、民族が、國家活動、民族生活をいとなむこともまた、それであつて、すべて社会集團は原則として、特有なる社会過程の舞臺である。いま、かくの如き、集團内の社会過程を總體的に問題とすると、社会過程は集團活動の形をもつて目せられる。例へば、家族生活は、家族の集團活動であり、農村・都會には農村・都會の集團活動があり、國家や、民族もまた、國家活動、民族生活を、それぞれの集團活動として行ふものである。

集團活動は、しかし、右の意味においては、單に、社会集團内のそれぞれの社会過程を、集團的見地において名づけただけのことであつて、そもそも、各集團は、社会過程の展開する人的範圍をいふものである以上、名目的意味しかもつものでないであらう。すなはち、集團内の社会過程を、單に集團活動と名づけるのみのことのやうに見えるが、集團内の社会過程を集團的見地において、集團活動としてとり上げて來ると、われわれは、豫期せざる種々の発見をすることが出来る。以下それについて説明して行かう。

先づ、われわれが、例として路傍の群集と、傳統ある家族におけるそれぞれの集團活動を比較すると、群集が

如何にも亂雑・無規律の態度や行動に充滿してゐるのに對し、家族の方は、整頓した、規律ある生活を送るといふことが、目につく。前者の無軌道振りに對し、後者には秩序があるのである。この無規律・有規律の別は、集團活動における重要な差異であるから、こゝに、集團活動を分けて、無規律の集團活動と、有規律の集團活動とすることが可能である。

一、無規律の集團活動 普通、その構成員が偶然に蟬集し、階層、性別、年齢、性質、傾向等の點で無差別なる集團の場合において、各自は自由勝手に振舞ふものであるから、この型の亂雑なる集團活動が展開される。さきあげた路傍群集は、その適例であるが、大都會の生活や、新開地の活動や、また、植民地の有様などが、それであらう。精神病舎や、所謂烏合の衆において、そのことは、極端に走せる。かくの如くあげて來ると、この型の集團活動は、人々の單なる接觸・交通關係を本とする團結力の鈍い社會集團特有の現象なることが注意されよう。實に、この無規律集團活動は、社會集團の初歩的段階に通有なるものであつて、ゲマインシャフト・ケゼルシャフト等の高度の團結紐帶の發達とともに、解消される傾向にあるのである。したがつて、よく團結關係の發達を見た集團の場合においても、それらの高度の團結紐帶の引緩む際には、集團活動が無規律状態に還元されるためしがある。人心が擾亂されるとか、中央集權が止むとかいふ場合、國民生活が混亂して來る例は、それだとして考へることが出來よう。

二、有規律の集團活動 傳統的なる家族生活を、その例示としたが、すべて、集團構成の諸原理がよく備はる社會集團においては、ゲマインシャフト・ゲゼルシャフトの團結紐帶の存することにより、親密なる生活や、一定した提携的動作が行はれることにより、集團活動には、秩序・規律があらはれて來る。しかし、この秩序・規律は、その集團に、制度、慣習、思想等が形成せられて、集團人が、ひろく、それに則つて生活活動をいとなむにいたつて、一段、確定化するものといひ得るのである。家族生活も、新夫婦の家庭生活においてすでに若干の規律はあるも、子が生れてそれが育ち、家族の仕來りと稱する慣習的傳統が確定されるにいたつて、顯著なものとならう。それを、家風などといはれることになる。組合・會社の如きも、定款や、服務規則にしたがつて初めから規律があるが、それ以外の慣行・先例等が累積せられて行くところに、一層ハツキリした業務・生活上の規律があらはれて行くであらう。そして、家族においても、會社・組合においても、全構成員が、全體のため一致團結してはたらくやうな場合、最高度の集團活動が展開される。戦時の舉國一致の國民活動などは、まさしく、その適例とすることを得よう。

それらの例をあげてみると、有規律の集團活動にも、集團體操に見る如き單なる規律的活動の場合と、舉國一致と稱する如き、一點集注のそれとがふくまれるのを知らうと思ふ。一を、その尋常型とすれば、他は、非常型である。國民平時の集團活動と戦時のそれを比較すれば、その區別はよく分かり、一は集團人の社會過程の並行性に特色があり、他はその集注性に特質を認める。けだし、前の場合は、單なる制度・慣習・思想の効果によつて生ずるものであるのに反し、後の場合は、特に集團意識と稱する、特殊の思想の支配によつて成り立つ現象た



るゆゑである。いま、われわれが、後章述べるところ（四、文化の問題、4と9）を、あらかじめ前提していふと、前の場合は、文化の強制力による現象であり、後の場合は、社會統制に基づく事實であるといふことが出来る。讀者は、この點、後章當該個處を参照して、その理解を十分ならしめて欲しいと思ふ。

**10 無政府主義、自由主義、全體主義** 社會過程を集團の總體的立場から眺めて、集團活動として、取り上げるとき、根本的に三つの型の分かれたるのをいつたが、その型のいづれのものが、好ましい生活過程の種類であるかについて、從來、各種の主張を生じてをつた。大體、無政府主義は、最初の、無規律型を理想であるとし、自由主義は、有規律型の中の、單なる尋常型をとり、全體主義は、有規律型の中の、高度の非常型を實現しようとする。われわれは、この關係において、それら諸主張の内容をあげ、且つ、事柄の批判を試みて見よう。

無政府主義については、前にも觸れてゐるが、その主張は、單に政府を無くするといふものでなく、國家權力・政治・法律等が、あらゆる、個人に對する拘束力を破棄し、個人の自由を、その意味で、實現しようとはかる。無政府主義は、特に、この目的實現手段として、人心を衝動する、暗殺・凶行を敢へてする、「實行の宣傳」といふ直接行動をとる點で、極はめて危険な運動であるが、しかし、思想そのものとしては、無規律集團活動の主張、換言すれば、個人自由の主張であつて、一種の哲學思想たる趣きを濃くする。しかして、社會過程が、眞に無規律状態に放置せられるためには、集團構成が著るしく初歩的で止まることを要する。つまり、單なる接

觸・交通關係の初歩の程度をもつて満足しなければならぬ。

實に、ロシアのクロボトキンは、無政府主義の思想家として、ルーズな聚落形態の小集團生活を理想としてゐた。そして、彼はこの小集團生活において、かへつて、人々の相互扶助の親和現象が實現されると説くのである。この點は、些さか矛盾であると考えられよう。けれど、そのやうな親和現象は、人々の間にゲマインシャフト關係を前提たらしめ、ゲマインシャフト關係は、すでに、一種の有規律的集團活動を生ぜしめる原因となるゆゑである。同じく無政府主義を説く、ドイツのマックス・ステイルナーにいたると、その點に目醒めて、あらゆる集團團結をすて、唯我獨尊の孤立生活を主張とする。彼は、「社會を破壊する」と宣言したのであるが、かくては、無政府主義は、個人と社會の不可分關係に眼を閉ぢる、實現不可能の思想であるのを、見出たのである。

無政府主義が、無規律集團活動を禮讚する、空想的主張であるに對し、自由主義と、全體主義は、ともに、有規律的集團活動のもつ、それぞれの型を主張とする點、もはや、實現不可能なる點を見ない。要は、いづれの主張が、實際生活に適するかに存するであらう。

自由主義は、文字通りに解釋すれば、無政府主義の個人の自由の主張と區別しがたくなるであらうが、それは、自由主義の眞意ではない。自由主義の意味する自由は、無政府主義におけるそれの如く、無軌道的なものでなく、一定規律のもの自由であつて、まさしく、社會的自由であるといふべきものである。すなはち、制度・慣習・

思想等、文化諸存在の自然の規制（後にいふ、客観的強制力）は、これを甘受しつゝも、それらの意識的な強制を、可能な限度において、斥けようとする。そこで、一般に、個人に對して強制たることを感ぜしめる、集團意識の社會統制（後にいふ、社會的強制力）を忌避する。畢竟、有規律の集團活動中の、特に、尋常型を理想とするといひ得るであらう。

スペンサーが、自由主義の主張する如上の點が、「可からず」といふ、消極的禁制を認めるのにつきて、「可し」といふ、積極命令を認めるにいたらない状態としたことは、事柄の混亂を招ねくものゝやうであるが、しかし、事實を、よくよく、考察して行けば、領かれるところがあらう。すなはち、自由主義では、甚だしい規律紊亂に對してのみ、「可からず」の禁制をもつてする以外、大方、社會過程を自然のすゝみに委かせるものであつて、事に、一定方針を、下知しようとしてをらない。しかるに、その點で異なるものは、全體主義の立場である。全體主義の主張においては、集團活動の非常型が目ざされ、文化的諸存在のすべての規制が是認されるのみならず、集團總體の建前よりする、あらゆる構成員の生活過程の、一點集注化が意圖される。個人に對し、制度・慣習・思想等の重壓を加ふるとともに、特に、集團全體をあげての、協力一致が唱導されるのである。スペンサーが、それらの點を、「可からず」の消極的禁制のみならず、「可し」といふ積極命令を出だす、特殊の生活型だと指摘したのは、味はふべき點としよう。

しからば、自由主義と全體主義、それらのいづれの主張が、集團活動の實際に對して、適正なるものであるのか。われわれは、先づ、自由主義が、尋常型の規律的集團活動を理想とする點において、事なき、平和時代の主義として、妥當なる點を考へ、同時に、全體主義が、非常型の規律的集團活動を主張とする點において、非常時、戰時などの思想として、成り立つ所以を思はなければならぬ。兩者は、それぞれ、異なる状態のもとで有效なる點があらう。しかし、國際平和が恒久化し、國內事情も、また、安定期を迎ふべき將來においては、自由主義の全面的妥當性は、これを期待し、且つ願望されねばならないところとしよう。

#### 四、文化問題

1 文化とは何か われわれ人間が、生活する場合に、社會とともに重要なのは、文化であらう。社會が、われわれが相倚つて構成する集團として、われわれが互に行ふところの社會過程として、人間生活と引離しがたい事實・現象をなすとともに、文化が、また、人間生活特有の色彩として、高さとして随伴する。前に、人間のもつ生活環境として、自然環境以外、社會環境と文化環境の存することをあげたが、文化の問題は、その邊からして、すでに、いたつて大切だと考へなければならぬ。しかるに、文化の問題は、文化が人間生活環境をなすこと以上、深くその生活に浸透して、人間生活そのものの一大部面を形成してゐることに存する。文化は生活環境として、人間生活から遊離するものではなく、人間生活それ自體を代表する事實である。その點、文化は人間に對して、あたかも、社會の如き關係を有する。社會集團も、社會過程も、人間生活そのものの具現に他ならないのであるが、文化もまた、しかるのである。しかして、文化がしかる所以を尋ねて來ると、それが實に、社會を媒介たらしめるのを見出すのである。

しかし、われわれは、いま、文化の問題に入つて行く前に、文化概念について、少し検討する必要にせまられる。如何となれば、文化概念ほど曖昧なものはなく、種々なる意味がそれに附せられてゐるからである。普通、

文化といへば、生活の高さ、品位をいひあらはし、一定生活事實でなく、むしろ生活事實のもつ屬性だとされる。現代文化といへば、現代での高揚された生活状況を意味しよう。また、東洋文化といへば、東洋での洗練された生活傾向を指さすであらう。しかし、これでは、文化概念が文化的概念となり、名詞でなく、形容詞化する。適當なる文化概念は、形容詞としてでなしに、名詞として何を意味するかを問ふことを要する。しかるに、名詞としての文化概念がまた、著るしく多義に互り、そのうちから主なるものを拾ひ上げても、なほ、二三の異なる意義に使用せられるのを見よう。

先づ第一に、前の形容詞としての文化概念に連なるものとして、高尚・洗練せられた生活形態を意味する。都會文化とか、藝術文化とかいふとき、人は、高き、品位ある都會の生活形態と、高揚・彫琢せられた藝術思想・作品をいひ現はす。同じく、都會の生活形態であつても、犯罪や、不道德は都會文化に屬せしめず、また、藝術上の事物であつても、粗野な思想や、未發達の作品は、藝術文化以外のものであるとされる。したがつて、もとと同種類の生活事實の間において、價值的觀點から鑑別が行はれて、文化的なるものと、文化的ならざるものとが區別され、前者のみを、文化と稱するわけである。この文化概念は、ひろく行はれてゐるにかゝはらず、いたつて科學的ならざるものであるのはいふをまつまい。科學は、價値判斷を遠ざけて、先づ事實の把握を進める。毒草、害虫とても、生物概念にとり入れ、植物學者、動物學者の研究對象となされるのである。最初から、事實に價值的鑑別を施こし、文化概念を作るのは、科學上、違法であると見做さなければならぬ。

この點を避け、文化概念を、特殊の生活形態に當て嵌めたものとして、政治・經濟等の現實面に對する、超越面を意味する使用法が存する。すなはち、文化といへば、何かしらわれわれの物質生活に係はりのない、それ以上の精神生活關係の事實を指さすのである。哲學、宗教、藝術等が、その範圍であつて、それらの事實に關係するものが、文化であるとされる。例へば、哲學思想や、宗教儀式や、藝術作品が文化であるとされ、政治制度や經濟慣習等は、しからずとされるのである。かくの如く、文化が現實面の生活形態でなく、むしろ超越面のそれとして概念されるのは、一種の見方であらうが、われわれの問ひたいことは、この超越面の生活形態として、文化が果たして如何なる事實を、眞に指さすかといふ點である。

思ふに、最後の文化概念にあつて、その意味するところのものは、哲學思想や、宗教儀式や、藝術作品であるが、思想・儀式・作品等は、必らずしも同一種類の事物と目することが出来ない。すなはち、思想は、思想上の生活様式として、儀式は祭祀上の生活様式として、ともに生活様式として同種類のものではあらうが、作品そのものは、創作上の生活様式に結びつく、ある關聯事物以外のものでない。しかるに、われわれが問題とする社會の研究においては、その生活様式こそ重要なのであつて、人々集團をなして社會過程をいとなむ際、著るしいのは、生活様式といふ事實である。しかして、この生活様式たるや、ひとり所謂超越面の生活形態に示されるに止まらず、政治・經濟、その他あらゆる人間生活分野にあらはさるる事實である。家族、階級、都會、農村、國家、民族等の各集團の社會過程のうち、それぞれ特有の生活様式がにじみ出るが、それは、あらゆる生活面を通し

てのことである。

文化概念において、ひとり超越面における生活様式とかがらず、あらゆる生活面における生活様式を一括して、文化と稱することが、許されて來てゐる。原始文化、民族文化、生活文化等の使用法が、それであらう。われわれは、科學的眼光のもとに、この最後の文化概念をとりたい。そして、この文化概念こそ、人間生活環境として逸してならない文化環境を意味するものとなるのである。

## 2 文化の事實

文化とは、ひろく、人間生活様式を意味するものとするが、かね／＼いふ如く、人間生活は同時に、社會生活であるから、文化が人間生活様式たる以上、それはまた、社會生活様式をなすものだといはなくてはならぬ。文化は、畢竟、社會過程様式たるものである。こゝに、文化の社會的本質を見るべく、われわれが、曾て、社會的、文化的環境といふことを説いた際、社會環境と、文化環境とが、密に關係すると述べたことは、そのことを示唆した事柄であつたのである。

文化は人間生活様式、したがつて、社會過程様式であるが、こゝに、さらに問はなければならないことは、生活様式とか、社會過程様式とかいふ際の、様式といふ意味であらう。様式とは一定の仕方、遣り方を意味する。生活の一定した仕方、社會過程の遣り方が、それであつて、生活をするにも、社會過程をいとなむにも、種々なる方式・型があるのであつて、様式と稱するのは、その一定した方式・型を指さすゆゑに、文化は生活様式・社會過程様式として、人間生活や、社會過程の筋道を示す、その一定した方式・型である。郷に入れば、郷にし

たがへといひ、國に入つて、その風習を問ふといはれてゐるが、集團毎に、生活過程に、一定の筋道が存し、それが、文化と見做されるのである。

文化が生活様式として、集團毎に示される一定の生活方式、社會過程の型なることは、文化の内容が、制度・慣習・思想等から成り立つ事實を説明するであらう。内容的にいつて、文化の實質は、制度・慣習・思想等以外のものでない。けだし制度とは、集團人の生活、すなはち社會過程の一定した行動規矩であり、慣習とは、その一定した行爲の筋道であり、思想もまた、その一定した思惟型をなすからである。制度・慣習・思想等は、みな、現實的、或は精神的な生活様式であつて、文化内容をなすのであるが、こゝに注意しなければならぬことは、これらの文化諸内容を見れば、氣がつくやうに、生活様式たる文化は、正確にいふと、生活過程そのものに出る事實なること、もちろんであるが、同時に、生活過程のいとなみから離れた、獨自の存在をなす點である。この點は、制度において、特に明瞭に看取せられ、制度は、つねに法令、規則等に明示されて、生活過程そのものから獨立し、むしろ、生活過程に對して、一定の方式・型に依るべきを命ずる、その原形として存する。思想の如きもまた、その點が著るしく、慣習も考へやうによつて、郷に入ればしたがはなくはならぬ、生活過程の規準だとも見做されるのである。

制度・慣習・思想等の文化内容を見て來ると、生活過程そのものの様式といはんよりも、むしろ、その様式原形たる點が感ぜられるが、これは、まさしく事實の真相を穿つたものといふべきである。けだし、文化は生活様

式として、生活過程に直接にしみ出るものではあるが、この生活様式たるや、集團人がひろくそれに頼るといふ點から、一種の社會的勢力を附與され、個々の人々は、この社會的勢力のもとに、それを生活過程の原形として取り上げるやうになる。制度において、その點が最も明瞭であり、思想・慣習においても、原理的に、同様のことがいへる。それであるから、文化は、すべて、單なる生活様式たる以上、生活原形たるものであり、生活原形として、人々の生活過程に準據すべき、方式・型を示すものだといはなくてはならぬ。文化環境と稱する、文化の生活條件性が、こゝに、窮極的説明を與へられるのを見よう。

文化が、單なる生活様式たる以上の、生活原形たることは、社會集團を構成する大多數の人々が、この生活様式を頼りとして生活するからであるから、文化は集團内に社會過程のいとなみをもち、形成せられるものだとしなければならぬ。かくて、個々の集團毎に、それぞれ特有の文化の存することが分かつて來よう。一つ一つの都會文化、農村文化、地方文化、民族文化等の分かれたる理由が、それであつて、こゝに、郷土文化とか、東洋文化とかいふ、特殊の文化問題もまた、局限された、或は廣汎なる集團的地盤に結びつけて考察すべきであることも、示唆せられるところである。

かくの如く、文化が社會集團を地盤とし、この地盤の上のいとなまれる社會過程をまつて形成される、特異の構造物なることは、文化をもつて社會構造物と認めさせる根據となる。文化が、社會構造物と見られるのは、それが集團内部に、社會過程の間より昇華し來たる社會的形成物であるからである。學術上の名辭として、文化をまつて、社會形象と稱することは、まさしく、その意味からのことである。しかし、社會形象たる文化は、單に、集團的社會過程の間から昇華されるといふだけでなく、すでに示唆したやうに、その存在は、逆に社會過程のいとなみに對して、原形として、その方式・型を指示してをり、郷に入れば郷にしたがはしめる、拘束性を發揮するのである。これをもつてすれば、文化は生活條件として特殊の環境をなすものであるが、その眞相を掴むときには、社會的に外部環境ではなく、内部環境をなすものと考へなくてはならぬ。

文化概念を規定し、その事實を分析して來るならば、文化の社會性は、いたつて顯者であり、その本質をなすことが分かつて來る。文化は、人間生活、すなはち社會生活に密に關聯する環境事物であること以上、それ自體、社會的一事實として存し、この社會的一事實として存することは、社會學上、文化を單に社會に關聯する外的事實として考察するのではなく、内的事實として研究すべきを要請して來る。

3 文化の生成 以上、文化の事實を、種々の角度から説明したのであるが、こゝに、進んで、社會過程の原形をなす文化の生成問題を、分析したいと思ふ。文化は、如何にして成るかの問題であるが、われわれは、この問題を、社會形象たる文化の、一般問題として取り上げて行きたいのである。

文化は、生活様式であるといつたが、單なる社會過程にしみ出る生活様式が、こゝでは、最初に吟味されなければならぬ。その意味の生活様式は、特定集團内の社會過程にあらはされる、方式・型であつて、例へば、我國の食生活の生活様式は米食だといふ如く、集團構成員の生活過程にひろく、通じて示される同一生活形態に

他ならない。かくの如き同一生活形態は、各集團の社會過程のうちに、夥しくあらはれるものであつて、かの規律ある集團活動の大半の事實が、それだと稱することが出來よう。衣食住の方面から、政治・經濟その他の分野にいたるまで、同一生活形態は、あまねく普及し、反覆せられる事實をなす。

しからば、集團内において、この同一生活形態は、何がゆゑに、普及し、反覆を見るかといふに、それは、集團構成員が、略ぼ同様の意慾をもつて、同一條件下に生活するからだといはなくてはならぬ。すでにいふ如く、人間行爲は、生活意慾たる關心と、生活條件たる環境の相關々係より生じ、それらのものの相等しいところに、結果される行爲の一致をあらはす。同一社會集團の場合において、集團構成員は、多くの場合、關心を等しからしめ、且つ、環境をも等しからしめるといふことがいへ、そのかぎりにおいて、同一生活形態につく現象を生ずる。もちろん、この現象は、各人についていへば、生活經驗のもたらすものである點があり、種々の試行錯誤の揚句、他の人々と等しい生活形態につく手続きがあり得るであらう。また、人々の間において、かの模倣が行はれて、衝動的に、或は優勝者をモデルに、或は合理的に、等しい生活形態に歸一する經過もあり得ようと思ふ。これらの自主的な、或は依存的な手続き上の經過は、あるにしても、根本要因たる關心と環境の一致する以上、集團人が、原則として、同一生活形態をあらはすのは、當然のことだと考へられる。

みなの方が、政治生活において、經濟生活において、またその他の生活面において、同一形態を示し來るといふ場合において、その同一形態の生活そのものには、何かしら、それに依らざるべからざる力が認められるであらう。この力は、もともと、關心と環境の相關々係から、その生活形態が合宜のものだといふ判断を中心とする、試行錯誤の手續きにより締結せられたものにおいて、そのことは最も明瞭であるが、たとへば模倣過程によつてとられたものにあつても、種々の程度において、その判断は存在するのである。しかして、同一生活形態に認められる、それに依らざるべからざる力といふのは、畢竟、この合宜性の判断からして、集團人が、その生活方式・生活型を支持し、採用する關係から生ずる。こゝにいたつて、同一生活形態は、單にひろく普及・反覆される、社會過程そのものといふだけでなくて、その方式・型が、獨立して觀念されて、生活過程の原形たる意味で抽象せられて來る。

例へば、慣習であるが、その一部の解釋が、人々の生活過程そのものに普及し、反覆されるものをそれとするが、その意味では、慣習はまだ同一生活形態以上のものではない。しかるに、慣習に倣ふとか、慣習をとり入れるとかいふやうになると、同一生活形態自體を指さすことから轉じて、その方式・型を問題として來る。事實の内容ではなく、事實の形式であつて、この形式が、倣ふべき、とり入るべき生活過程の原形となされるのである。慣習の場合から、思想の場合に進めば、なほさらであらう。或る意味では、みなの方が行ふ思考生活上の同一形態が思想ともいへるが、その思考方式・型といふ形式が、思考事實といふ實質から引き離されて、時代思想とか、新思想とかいはれるやうになるのである。

制度の場合にいたつて、そのことが、決定的になることは、前にも示唆しておいたところである。何人も、制

度をもつて、集團人の生活過程の同一形態だとする者は、ないであらう。制度は、生活過程の方式・型そのもの、その形式だと稱するであらう。しかし、法律制度が、しばしば、慣習から生ずるといはれる如く、制度も、發生上、同一生活形態にその淵源を有することが、多いのである。たゞその形式たる方式・型が、はやく、分離せられて、生活過程の原形たる點が、十分、顯現されてゐるといふのみ。

文化の生成は、それであるから、最も根本的には、集團人の、彼等の一定關心を本に、所與の環境のもとで同一生活形態を示し、その生活形態の方式・型そのものを、生活原形として支持・採用する關係によるものと結論してよい。文化は、この點から、決定的に、社會的所産であり、社會事實をなすといはなくてはならぬ。文化が、何かしら實際生活から離れた、精神的事實であるかの如く考へるのは、全的に、誤謬だと見做してよいのである。文化はある點において、精神的事實であらう。集團人によつて觀念せられる生活原形といふ表象をなすからである。しかし、この表象そのものが、現實的社會關聯中に、社會形象として醸成せられることを見れば、文化の把握は、専ら、社會學的になされなければならぬ、要請のもとにあらう。

4 文化の強制力 文化は生活様式であるが、眞の意味では、生活原形と稱するを適當とする、人々の生活過程がそれによらざるべからざるやうな、基準的特質をもつてゐる。制度において、そのことが、最も明瞭であるが、思想や、慣習においても、同じ特質の立證せられることは、繰り返して説明したところである。かくの如く、文化が、生活原形をなす所以は、集團人が、こぞつて文化に對して、支持・採用の態度に出でてゐるか

らであるが、集團人が、文化を支持・採用するといふことそれ自體は、集團人のもつ關心と環境の相關々係から來たり、一定の關心を、所與の環境内に満足せしめるやうな行爲としては、文化と呼ぶ、生活原形をそのまゝ實行することを、合宜的なりとする判断に基づく。

例へば、日本人は米食の慣習をもつのであるが、米の飯を食ふといふ生活様式が、日本の生活原形として、日本人に支持・採用せられてゐるのである。しかし、日本人が、米食慣習を支持・採用するのは、日本人の食慾を、この豊葦原の瑞穂といふ環境のもとに繼續的に満足するためには、最も容易な、經濟的な、榮養價に豐む米の飯を食ふことである。それをもつて適切・妥當であるとなして、慣習に示されるところにつくのである。慣習の集團人による支持・採用關係は、かやうに分析せられるものであつて、すべての文化は、大なり小なり、集團人との間に、このやうな支持・採用關係を與へられて、存在する。文化の生活原形性は、かくして、集團人の側からする、支持・採用關係に由來するものであるが、この支持・採用が、人々の關心・環境の相關々係よりたゞらされる、合宜性の判断を中心とするものについては、なほ、少し、説明を補なはなければならぬ點がある。

すなはち、集團人は一定した關心を、所與の環境内に満足して行かうといふ際、試行錯誤や、模倣の手續きによつて、合宜的と判断する生活様式に歸一するのであるが、その手續きたる試行錯誤について見れば、これは、自ら經驗を重ねて、誤ちを改め、正道につく仕方であるから、最後に到達した行爲に對する自信は大であり、合



宜性の判断は、まことにハッキリ存する。たゞ、この場合においても、始めはハッキリしてゐても、行爲が習慣づけられるにしたがひ、自動的となつて、合宜性の判断意識が、微弱化することがないではない。模倣についていふとき、模倣の種類によつて、合宜性の判断は、著るしく低下するのを見るのであつて、かの合理的模倣の種類であれば、他人の行ふ行爲について、それが合理的だと見做されるとき、その行爲につくのであるから、合宜性の判断は、高度に存する。しかし、かの衝動模倣や、優勝模倣の種類にいたれば、たゞ盲目的衝動や、優勝者の牽引力にかられて、他人と等しい行爲に出づるわけであつて、その行爲をもつて、果たして合宜的だと判断するや、いなや、頗る怪しいといはなければならぬ。しかし、その場合に合はない、非合宜性の判断が、はたらいて行爲を阻止しないといふところに、消極的ながら、ある合宜性の判断は、潜在すると見てよいであらう。

いづれにしても、集團人が文化的生活様式を支持・採用する際の問題として、合宜性の判断を中心とするといへても、その判断そのものが、つねに、顯在意識において、強く作用するのを、必しないのである。時に、習慣的支持を行ひ、また、潜在意識の採用に流れ、支持・採用が微弱化することが少くない。換言すれば、集團人は文化的生活様式を、自らすすんで、自主的に支持・採用するのでなく、受身的に、一種の強制たるかの如く、受けとる事實を見る。個人としては、時々、文化的な生活様式から逸脱する、他の恣意的行爲をなさうとすることさへ、生じて來よう。しかし、かやうな場合においても、關心・環境の相關々係から、根本的に規定せられてゐる、文化的な生活様式は、集團人に對して、結局、支持・採用を促がし、それ以外の行爲に流れることは不適正なることが、事實をもつて教へられることになるから、人々は、已むなく、文化的な生活様式にしたがつて來るのである。

いまあげた關係において、文化の強制力なるものが、あらはれて來る。集團人の文化的な生活様式に對する合宜性の判断を中心とする支持・採用は、まさしく、生活原形たる文化の存在を確定してゐるものであるが、その反面において、この支持・採用の事實をめぐつて、文化の集團人に對する強制と見做される現象が、成り立つ。文化的な生活様式が、強制力をもつて、集團人に迫まると感ぜられる事實である。ゆゑに、この強制力は、主觀的に生ずるものであるが、しかし、さらに客觀的にいふと、文化的な生活様式は、一度それが集團人によつて、生活原形として支持・採用を見る上においては、たとへその支持・採用の事實が、人々の自主的な、顯在意識におけるハッキリした、合宜性の判断によるものであつても、なほ、その原形通りのものが、人々の生活過程に實現されるといふ關係によつて、客觀的に強制力をもつものだと見做すことを得るであらう。個々の學者によつて、常住検討を加へられる科學理論といふ一思想の如きも、この點からは、強制力をもつといふことがいへる。

文化の強制力には、かくして、主觀的・客觀的な二様の解釋が存するわけであつて、文化は、一般に客觀的強制力をもち、時に、主觀的強制力さへ具へる。これが、文化の拘束性といはれる事實である。そして、これらの強制力によつて、生活原形たることから、集團現實の生活過程に、日々に實現されるといふ結果になる。

## 5 文化の傳承・傳播

文化は、社會集團の生活原形であつて、特定集團の、特定時代に、特定文化

が存在する關係を示すであらう。ただし、ここにおいても、文化が、生活様式として、根本的に、集團人の關心・環境の相關々係から生じてゐるといふことが、決定してゐる。もし、集團が異なるならば、それを構成する構成員が違ひ、構成員の生活慾望たる關心に差を生じ、一方、集團によつて生活環境もまた違ふのであるから、これらを契機たらしめる文化形態は、當然、差異して来る。その差異は、家族と會社における、家族精神と服務規律といふが如き、種類上の區別にまで及ぶこともあるが、すでに、同一種類の文化についても、日本の民族精神が、支那の民族精神と異なり、米國の經濟制度が、ソ聯の經濟制度と違ふ如く、相違を示す。しかし、たとへ、同一集團の場合といへども、時代が異なつて、集團人の關心・環境に、なんらか變化が生ずるとき、また、文化の變遷といふ事實を招來するのである。文化は、かくて、集團毎に異なり、時代によつても、違ふといふ結果を來たす。文化の集團性と、時代性と稱してよい事實であらう。

しかるに、文化が集團によつて異なり、時代によつて、また違ふことは、文化が、根本的に、集團人の關心・環境の相關々係に基づいて存在することであつて、他に深い理由はないのであるから、もし、こゝに數集團があつて、それらの集團の構成員が、略ぼ同様の關心を抱き、また、彼等の環境も、大體類似のものであるとすると、そのうちの一集團に見られる文化は、爾餘の諸集團においても、また、存在すべき理由をもつのである。現代國家の一つが、デモクラシーの政治制度をもつとき、他の國家もまた、デモクラシーの政治制度をもつてもよい關係や、一農村が出來秋の村芝居の慣習を有するとき、隣接町村もまた、それと等しい行事を始めてしかるべき關

係が、考へられらるであらう。もちろん、そのやうな關係においては、期せずして、他集團が、一集團に見られる文化と同じものを、發生・存在せしめることが、少くないのであつて、遠隔して交通の絶えてなかつた數地方などに、類似の風習や、道德上の慣習などを見出すのは、その例としよう。しかるに、これらの諸集團が相互に接觸・交通關係をもつてゐると、そのうち一集團に見られる文化にして、爾餘の集團がまだそれを所有するにいたらないとき、後者は、前者の文化を、容易にとり入れて、自己の文化たらしめる現象を生ずる。

この、一集團の文化を、集團人の關心・環境の相關々係において等しい、爾餘の諸集團が、そのまゝとり入れることを、文化の傳播事實と稱する。文化の傳播は、實に、歴史上、反覆せられる事實であり、且つ、世界的な事實である。ギリシア文化が、ローマ、ゲルマン諸民族に傳播し、つひに、西ヨーロッパ各國に擴大された事實や、東洋において佛教文化が、印度から支那、支那から日本へと東漸せる事實をあげただけでも、事柄は分かるであらう。しかし、文化の傳播が著るしい事實である結果、文化は如何なる場合にても、集團間に傳播するものだと誤解を生じ易いが、それは、全く間違ひである。集團間に、集團人の關心・環境の相關々係の等しいものがなければ、文化の傳播は、起り得べくもないのであつて、北方のエスキモ文化が、熱帯諸民族に傳播することもなければ、大陸の蒙古文化が、そのまゝ、島嶼地帯の南方地域に、擴大されるはずもない。文化の傳播が、文化の社會學的分析から答へらるべき現象であるのは、この點からして、明瞭であらうと思ふ。

文化の傳播は、異集團間の、構的關係であるのに對し、同一集團における、縦の關係として、文化の傳承事實

が存する。文化の傳播が、いはゞ空間的な文化の移植であるのに較べて、文化の傳承は、その時間的な相續といへる。日本精神の如き思想が、我が各時代に存在をつゞけるのは、それが、各時代に傳承せられるからであつて、文化の傳承が、また、文化の傳播の如く、歴史上の一大事實であり、且つ世界的な事實をもなす。大にしては、各民族、一として固有の文化の傳承をなさないものなく、小にしては、各家族のそれぞれにしても、なんらか祖先の生活様式を、受け繼がないといふものを見ない。

文化の傳承を見る者が、また、文化はあらゆる場合に傳承されると説くにいたるが、それは、しかし、誤まりなのである。文化は生活様式乃至、その原型として、集團人の關心・環境の相關々係を本として存する。したがつて、文化の傳播の際と同じく、集團人の關心・環境が等しいといふかぎりにおいて、前代の文化が、後代によつてとり入れられる。現民族の構成員の關心・環境が、昔の構成員たる祖先のそれと變らざる點において、古代の民族文化が、そのまゝ、現代の民族文化として受け繼がれるのみ。そこで、ヨーロッパ各地から、新天地たるアメリカに移住した白人の子孫の如き、決して、舊ヨーロッパの文化を、そのまゝ、傳承することなく、アメリカ特有の新文化を建設するにいたつたではないか。我國が明治維新の際、徳川文化を清算して、明治の新文化を作り出したのも、他の好例であらうと思ふ。

かやうに觀察して來ると、文化の傳播も、その傳承も、形の上からいへば、文化の横の擴がりや、縦の延長であるが、その實際は、「傳播し、傳承する當該集團の、内部事情に結びつく」と解さなければならぬ。集團内部の事

情たる、集團人の關心・環境の相關々係が、一定の生活様式、乃至原形を要求するのであつて、その要求に應ずるものが、外部に、或は過去に發見せられるにしたがつて、文化の傳播と、傳承の事實が生ずるわけである。

**6 文化の變遷** 文化の傳播と、傳承の事實を究はめた上において、文化の變遷を論ずることは、比較的、容易にされる。すなはち、文化の變遷は、文化のそのまゝの繼承たる、文化の傳承に對立してとり上げらるべき事實であるが、この事實もまた、その傳播と傳承のそれにおけるやうに、文化の集團人による支持・採用關係を本として、醸成されるがゆゑである。

文化は、よく他集團に傳播し、自己集團内において、傳承せられるとともに、自己集團の内部において、變化を見るのである。時間的經過とともに、文化が歴史的な變遷をあらはす。例へば、我國において、奈良朝文化は、平安朝文化となり、平安朝文化は、源平・鎌倉時代の文化に變はり、それがまた、戰國時代の文化に推移し、つひに、徳川時代の文化を経て、明治以來の現代文化に進んでゐる。いまや、この明治以來の文化も、新局面を迎へて、一大變遷期に乗りかゝつて來てゐるのである。これからの日本文化が、如何に變容して來るか、時代に生を享けるわれわれとして、絶大な注目と興味を拂ふところであつて、それにつけても、文化の變遷問題は重大視してよいであらう。

文化の傳播や、傳承が、決して偶然に起こるものでないと等しく、文化の變遷が、恣意的に成り立つと考ふべきではない。文化の變遷もまた、社會的關聯にしたがつて、成るのであつて、結局、文化を支持・採用する、集

團人の關心・環境の相關々係が、こゝでも、支配する。すなはち、われわれが、その傳承の事實に關して突きとめたやうに、集團人の關心にして同一であり、環境もまた變はらない場合においては、祖先のもつた文化は、子孫によつて、舊形態を改めず、そのまゝ持續的に、支持・採用を見て、傳承せられるにいたるが、もし、しからずして、集團人の關心・環境にして、變化を生ずる場合においては、舊時代の文化は、新時代の異なる文化によつて、置き代へられるといふ結果を生ずる。文化はこゝに、變遷するわけであつて、そのことが、繰り返へされるときに、幾多の變遷が、文化の上において示され、文化の變遷の歴史が回顧せられることになる。文化史といふ研究の如きは、専ら、その記録として、意義づけられるものである。

文化の變遷は、先づ、文化史によつて、記録せられるところであるが、その科學的な説明は、如上の社會的關聯にしたがつてなされることを要する。そこで、文化は、變遷の問題においても、社會學的觀點を必要たらしめるものであるが、いま、文化の變遷の根本契機をなす、集團人の關心・環境の相關々係についていふと、その二大要因たる關心・環境のうち、人間の生活慾望を意味する關心の方は、時間的・歴史的に、さまで變化するものとは思惟されないであらう。同一人をもつて構成されてゐる間、如何なる集團も、この要因に變化はないと見るべきであり、また、たとへ、子孫によつて祖先が置き代はられ、後繼者によつて先行者を引き繼がれるときにも、集團構成がそのまゝであるかぎり、集團人の關心そのものは、人間として、人種として、且つまた、特定集團人として、著るしい變化は起こらないと稱すべきであらう。これは、特殊の人々の、性別・年令別・氣質の相異と

いふ、瑣末現象を除いて、一般的にいへるところであるが、それから離れて、環境の方を見ると、これは容易に見透しがたい常時的變化をなすことを、發見する。同じ民族であつても、時代によつて置かれる立場が異なり、同じ都會・農村といへども、歴史的に生活條件が變はり、また同一家族でさへ、時間的に、周囲の事情が違つて來るのである。したがつて、文化の變遷を決定する、關心・環境の相關々係において、われわれの注目すべきは、環境要因の變化の問題である。

そこで、集團人の環境についていふと、曾て述べたやうに、三種類の大きな環境があり、自然環境が第一、社會環境が第二、文化環境が第三といふことになる。進んで、これら三つの環境の一々の變化についていふと、自然環境は、根本的に大切な環境であるにもかゝらず、變化の點においては、必らずしも、重大だと考へることが、出來ない。天災・地變・豊凶等の變化が生じないではないし、もちろん四季の移り變りはあるが、さうしなれば、異變が起こるはずもないし、四季の移り變りの如きは、循環的でさへある。且つ、自然環境の變化は、社會學的問題をなすものでないから、われわれはしばらく、これを除外することが許されよう。次に社會環境であるが、この場合、社會環境と見られるものは、當該集團に對する外部の關係であつて、外の集團との對立・支配・服従・平等の諸關係を意味する。これは、頗ぶる重要性をもち、その關係の變化は、集團文化に對して絶大な影響力を與へるであらう。平和時代の日本文化が、這般の大戦中如何に歪曲・變形せしめられたかを見れば、その點は、明らかであらう。たゞし、文化の變遷を、一集團の問題として、これを内部的だけの關係について考

察することが、先づ、必要であるから、われわれとして、重大ではあるが、この社會環境をも、かりに捨象して、分析を進めて見たい。

さうなると、残るところは、文化環境のみであつて、文化環境における變化が、集團文化の、少くとも内部的變遷に對して、決定的な役割を行ふものなることを發見する。しかも、そのことは、事實であつて、近い例をとつても、徳川時代の文化は、戰國亂世の軍事制度や、遁世思想の支配のあとを受けて、新幕府制度とか、現世思想の樹立によつて、會てなき都會的町人文化として發現したのである。維新の政治制度、經濟慣習の切り換へによつて、明治時代の文化が、衣食住の末にいたるまで劃期的變遷を來たしたことも、もちろんであつた。

**7 唯物史觀批判** 前項、説明したところによれば、文化の變遷を、一集團内のものとしてとり上げれば、他の如何なる要因よりも、文化環境の變化が、決定性をあらはすといふ結論である。集團的文化の變遷は、一に、集團内に起る文化そのものの變化に觸發されるといふことであるが、しかし、この説明は、何人も發見するやうに、自己撞着の説明であつて、矛盾そのものであり、少くとも、循環論以上のものでないことに氣付く。文化の變遷は、専ら文化の變化に由來するといふのであるから、それでは、満足な説明として、到底、許さるべきでなからう。しかるに、事實は、決してさうではないのであつて、文化の變遷が、専ら文化の變化に由來するとのことは、その文化の變遷が、文化諸存在間の、相互的規定に基づくことを意味し、その關係こそ、實に、文化の變遷の核心をなすのである。

すなはち、上來の説明の眞意とするところは、先づ、こゝに宗教思想といふ一文化形態があつて、それが、運世的なものから、現世的なものへと變遷するのは、同じ集團内の他の文化形態たる、政治制度が、軍事的なるものから、平和的なるものへ變化した、その影響のもとに成り立つことを指さし、一方、この政治制度が、軍事的なものから、平和的なるものへと變遷するのは、同一集團内のまた他の文化形態たる經濟慣習が、自立的なものから、封建的なるものへ變化する感化を蒙つて生ずることを意味し、また、他方、經濟慣習が、封建的なるものから、資本主義的なるものへ變遷するのが、同じ集團内の文化形態である宗教思想が、非合理的なものから、合理的なものへ變化する餘波をうけることであることを示す。個々の文化形態の機微の變化が、互に作用し合つて、全體の文化體系に變遷が招來されると、解釋すべきものなのである。

しかし、實際上においては、個々の文化形態が、機微の小變化を來たすことにより、全體の文化體系に變化が誘致せられること以外、特殊の文化形態の變化を中心たらしめ、その變化の線に沿つて、爾餘のすべての諸形態が、大略、一方的決定を受けとることが看取され、この手続きから、事實が招來せられるのである。例へば、前記の政治制度、經濟慣習、宗教思想間の相互規定關係において、政治制度の變化そのものが、中心的役割を演じ、逆の規定はないことはないが、専ら、この優勢な政治制度の變化をめぐつて、經濟慣習も、宗教思想も、それにしたがひ變遷するといふ事實である。したがつて、文化の變遷は、事實上、ある中心的文化形態の變化を、最大契機たらしめて、現出せられるのである。

たゞ、われわれが、警戒せねばならないことは、如上の中心的文化形態が、あらゆる集團と、そのすべての時代に一定すると見るべからざることである。マルクスの唯物史観は、ありとあらゆる集團と、その各時代を通じて、右の中心的文化形態が、生産關係と呼ぶ、經濟上の生産制度に一定すると説くのであるが、その主張は、決して事實でないであらう。最近、戦時中、我國で現出された文化の驚ろくべき變遷の如きは、全く、軍事制度の、異常の變化に負ふたではないか。いま、かくの如き特殊の例をとらずとも、近世初期のヨーロッパ文化が、ルネッサンスの文藝復興と稱する、學問・藝術上の思想の變化に即應して發展し、我國近代文化が、維新の際、輸入せられた、政治上の新制度をめぐつて、總體的進歩をかもし出したのを、考ふべきである。

文化の變遷に支配する中心的文化形態が、決して單一の生産制度に限定されないことは、畢竟、實際事實の驗證にまつ他はないが、われわれは、その事實に照らして、マルクスの唯物史観を斥けようとし、また、斥け得ると信ずる。しかば、諸集團と、その各時代において、時として政治制度が、時として經濟習慣が、また、時としては、宗教思想などが、中心的文化形態として、總體的な文化體系のうちにいままあけた一方の決定性を取つて來る根據は如何。マルクス唯物史観は、この關係において、その掲げるところの唯一決定者としての生産制度が、物質的なる理由を説くが、それは、また、遽かに肯認出來ない事柄である。生産制度は、一文化形態であつて、それ自體、物質的なるものではない。すでにいふ如く、物質關係的なる生活様式たるものである。したがつて、兩餘のあらゆる生活様式たる文化形態と、いささかも、その存在の點において優劣勢の區別はない。文

化形態のあるものが、他に立ちまされ、或は他に劣る優劣の存在をなすのは、一に、集團人のそれに対する支持・採用の強弱如何にかゝり、しかして、集團人が、つねに、物質關係的な特殊の文化形態にのみ、絶對的支持・採用をあへてするものではないのである。印度における宗教思想の優勢なる支持關係や、方今見られる政治制度の一義的尊重の事實を見れば、その點は、よく分かるであらう。

結局、中心的文化形態たる力をもつてあらはれるのは、集團人の支持・採用關係において、最も強力なる文化の種類である。諸集團において、その各時代において、その種類は變つて來るが、中心となる文化形態に變化が起こると、その環境的變化に應じて、集團人の一般的な生活過程が變動し、生活様式の總體的變更に立ちいたつて、彼等が支持・採用する兩餘の文化形態が變遷し、こゝに全體的文化體系の變遷事實があらはれるのである。文化の變遷は、専ら、この手続きのもとに、遂行されるといふべきである。

**8 集團意識** 文化と呼ぶ、社會形象の問題において、集團意識といふ、特殊の内容を除外することが、許されない。その事實を説明するとともに、その作用である、社會統制の現象に進んで行かう。

文化は、社會構造物たる意味において、社會形象であるが、その一半の事實は、社會意識だと稱することが出来る。社會的構造物であるが、生活様式として、人々の外面的・具體的な行動様式と、内面的・精神的な思考様式に分かれたれ、そのうち、後者は、所謂思想形態をなすゆゑである。政治・經濟・教育・學問・道德・宗教・藝術諸思想が、それであつて、社會的に形成される、精神的意識的構造物といふに當たる。しかし、普通、社會意

識といふと、右の如き、單なる文化的思想形態の種類を指さす以上、一層深い意味をもつた、特殊の思想形態を意味することが、事實であらう。例へば、集團全體の理念たる民族理想とか、集團そのものの生活原理たる國家意志とか、また、全集團の問題處理に關する總意・輿論とかいふ種類にかぎつて、社會意識を考へようとする。この見方においては、思想形態のうち、個人乃至一部分の問題に關して存するそれを除外し、専ら、集團全體の運命に關して成り立つものを、しかりとする。畢竟、集團意識を指さす見方となつてゐる。

そもそも、文化的思想形態は、内面的・精神的な生活様式として、思考様式をなすものであるが、われわれ人間の思考は、人間が生理・心理的統一體たる點から、この統一體としての個人中心のものであることが多く、個人的思考の形で存し、思考様式としても、個人主義的思想たる場合が夥だしい。經濟思想にしても、道徳思想にしても、その點は顯著であらうと思ふ。しかし、すべての思想形態が、みな、さうであるかといへば、必ずしもしからず、部分的には、個人主義的思想の種類に對して、全體主義的思想たるものも、少なからず存するのである。すでにあげた、民族的理想とか、國家意志とか、總意・輿論の如きは、悉く、集團全體の運命に關して抱だかれる思想形態であつて、個人、或は一部の問題に關するそれではない。民族・國家等の、集團全體を如何にせんとする、全體主義的思想をなすのを見る。かゝる特殊の思想形態が、こゝにはんとする集團意識となるのである。

集團意識は、まさしく、事實的存在であるが、この特殊な思想形態が、如何にして發生するかと説明せられなければならぬ。集團意識もまた、文化の一種類であるから、發生手続きは、さきにあげた一般的な文化のそれを踏襲してゐる。集團人の關心・環境の相關々係より、この思想形態もまた、支持・採用せられるにいたるのである。そこで、その發生手続きの形式に關するかぎり、特にいふべきことはないが、その内容をなす、集團全體の運命に關する思考なるものが、如何にして生ずるかといふ問題が、問はなければならないわけである。

集團意識に内容となる、集團全體の運命に關する思考といふのは、個人中心の、普通の思考に對立する、集團本位の思考であつて、全體中心のそれをいふ。民族・國家・その他、自己の屬する集團全體を、如何んせんとする、かの全體主義的思考であるが、かゝる思考は、實に、ゲマインシャフトの深い一體感の團結の場合に、人々に生ずる全く特別な精神生活である。わが國民が、上下よく一致してゐるところに、民族・國家を如何んせんと考へがあらはれて來、家族の人々が、相親和する場合、一家全體の運命を思ふ念が、各人により抱だかれる。かゝる全體主義的思考も、普通の個人主義のその如く、もともと個人によつてなされるものであるが、この思考内容が、爾餘の集團構成員によつても、抱だかれる結果、思考上の生活様式となり、その生活原形として昇華して文化的集團意識となるのである。

集團意識が、かくの如き關係において成立を見るのであるが、一度、成立の曉においては、他の文化形態と同じく、強制力を發揮し、集團人の思考過程を規制して來る。民族理想や、國家意志が、國民個々の精神生活を嚮導し、總意・輿論が、民衆各自の考へを指向するといふ如し。しかも、他の文化形態の場合と異なり、集團全體

の動向としてこの嚮導・指向を與へんとするところに、集團總力が結びつけられ、その強制力は、文化一般の場合に見る、主觀的強制力や、客觀的強制力たる以上、絶對的な集團的強制力としてはたらいて來るのである。集團意識のもつ強制力は、單なる文化の拘束に比し、遙かに強く、聽かれざる場合、集團總力を傾けて強行を期するといふ程度のものである。

集團意識は、その思考内容のそれぞれの、觀念・意志・感情のいづれを主とするものであるかにしたがひ、社會理想と、總意と、集團感情の三種類に分類することが、出來よう。民族理想とか、國家意志とか、輿論とか、群集心理とか稱するのは、それらの個々の發現であらう。あらゆる集團に、永續性をもつ集團意識のあるとともに、時々刻々變化して止まないそのあることも、事實であらう。民族理想と、群集心理を比較するとき、そのことは、よく分かつて來るが、その強制力は、いづれの場合においても、等しく絶對的である。それが國家意志の場合、主權と觀念され、輿論の場合、多數の壓迫と稱せられる。かくして、この強制力を伴つて、社會統制といふ現象が起つて來るのであつて、われわれは、轉じて、その事實の説明を試みたいと思ふ。

**9 社會統制** 統制の語は、戰時中から普及し、統制の事實は、われわれ身をもつて體驗したところでもある。しかし、統制といへば、何かしら、強壓的な特殊の政治のやうに思はれてゐるが、それならば強制的政治であつて、眞の意味の統制といふことは異なる。眞の意味の統制とは、社會統制を指さし、普通に政治とか、統治とか稱されてゐる事實をひろくいふのである。こゝに、政治とか、統治とか稱する事實を、ひろく社會統制

視するのは、政治や、統治の事實が、常識上考へられてゐるやうに、國家集團のみに限定せられず、他のあらゆる集團に、同一種類の事實が、認め得られるからである。都會や、農村にも、政治現象はあるであらう。會社や、組合にも、それらしいものが仄見されよう。隣組や、家族などでさへ、政治的事實を包含するのである。

それは、そのはずである。もともと、政治や、統治といふことは、集團の外からする脅威を排し、内部問題を處理する意味の作用なのである。もつて、集團的存在を確保し、共同生活を安穩に繼續しようとする。如何なる集團の場合であつても、自己の集團を破壊し、滅亡せしめようとする傾向はなく、その存続・發展を計らうとするものばかりであるから、政治、統治の事實・現象は、必然的にあらはれて來る。決して國家集團だけのことではないのである。しかし、それがあらはれて來るのは、根本的に、集團意識の生成と存在によるのであるから、甚だ社會的なるものだといはなくてはならぬ。事實が、一般的に、社會統制と呼ばれてよいのも、そのためである。前項に述べたところの集團意識が生じて來ると、それは、多くの思想と異なり、集團全體の立場において考へられた思想形態であるから、種々なる事柄に對し、集團存続と、その發展を期する觀點から、整頓を企圖とする。國家の意志は、外國の侵略企圖を絶滅せんとし、輿論は、當面の案件處理を内容とするが、みな、集團そのものの存在・發展を窮極の目的としてゐる。これ、如何なる集團の場合であつても、自己の集團を破壊し、滅亡せしめようとする傾向が見られず、反對に、その存続・發展を計らうとするものばかりであるといふ、前に述べた事實が歸結せられる所以であるが、このことは、集團意識の生成・存立を前提たらしめるものであるから、裏から



いへば、集團意識の存在のないところに、その事實もまた、認められない結果を生ずる。團結力の弱體化した民族や、都會・農村・家族等において、集團的存續・發展の意圖が、棄にたくも、見られないのは、そのゆゑからである。

さて、國家のみならず、あらゆる集團は、集團意識を盛り上げるとき、集團的存續・發展の目的から、外部的脅威を排し、内部的問題を處理すべく、種々なる事柄に對し整頓作用を行ふ。これが、社會統制であり、この社會統制は、政治や、統治に具體的にあらはれて來るのであるが、普通に見る文化の拘束に比し、強制力を伴ふ點が、最も注意せられるところである。この強制力は、國家意志の場合、主權として、輿論の場合、強壓力としてはたらくことは、前にもあげた。したがつて、社會統制は、事實上、強制力を伴ふ社會的整頓だと解釋してよろしい。あらゆる集團内の社會諸事實、集團團結にしても、生活過程にしても、文化事實にしても、整頓と取締りとを與へられるのである。あるものは禁遏され、あるものは奨励され、あるものは抑制され、あるものは促進される。結局、集團的存續・發展の大目的から、消極的に禁止されるものと、積極的に勸奨されるものとが、出て來るわけである。統制といへば、その禁止面についてのみいふ如く思はれてゐるが、他に、勸奨面の存する事實を忘るべきでないのである。

われわれは、社會統制が、決して國家集團にのみ限定されない、廣汎なる社會事實であることをいつたが、しかし、國家において、社會統制が、極めて明確に行はれることを認めなくてはならぬ。けだし、國家は、社會統制を行ふための、ゲゼルシャフト團結をば、主たる團結關係たらしめてゐるからであつて、語を換へれば、國家は、専門的な統制機關であるゆゑである。したがつて、國家が統制を意味する、政治・統治を行ふのは當然であつて、われわれは、國家において、社會統制作用の最も明瞭なあらはれに接する。社會統制には、輿論に見る如き不確定のものと、國家意志に見る如き確定的のものとが分かれるが、確定的なものになると、統制手段として、幾多の機關を要することとなる。主權者、議會、政府、官廳、軍隊、警察、官公吏等が、それであつて、國家の場合、それらの機關の存在が、また、いたつて顯著であるのは、いふまでもない。それら、諸機關相互の關係を、俗に、統制機構と稱してゐるが、統制機構としては、他に、統制上の諸制度があるのであつて、憲法、行政法、民法、刑法、商法、その他の法律が、その主なるものである。

社會統制によつて、集團内のあらゆる社會事實は、整理・取締りを受ける。具體的にその統制作用を受けるとものは、個々人であるから、個人は、社會統制において、最も重要な強制力に接するであらう。前に述べた個人に對する、社會の客觀的強制力や、主觀的強制力に對し、こゝにさらに、社會的強制力があげられてよいのである。しかし、この最後の強制力に主體となる、集團意識は、餘程これを練りに練らぬと、賢明であり、妥當ならざることまた、あり得るのであるから、社會統制の適正を期するためには、集團意識の鍊成を必要條件たらしめよう。舊日本の如き、國家意志や、輿論構成上、手ぬかりをした結果として、統制に過誤を來たし、あらぬ方に國民が誘導されて、敗戦の憂目を見たといひ得るのである。

## 10 集團的性格

集團意識は、特異の文化形態であるが、結局、種々なる文化的存在の一種であつて、社會形象たるに他ならないのである。社會集團の内に、社會過程の營なみが行はれて、社會形象としての文化が生じ、その一種として集團意識も存する。したがつて、集團意識が、社會形象、すなはち文化の一問題として論ぜらるべき理由があつたが、いま、われわれは、再び文化一般が、集團を基盤たらしめて生成・存在する關係から、各集團において、それぞれ、特殊の性格を展示するといふ事實に觸れて行かねばならないのである。

文化が、集團毎に、全體として特殊の性格をもつ事實が、それであつて、日本文化、支那文化、東洋文化、西洋文化等、みな、それぞれの特質をあらはすことが、注意せられてゐる。日本文化は、つねに枯淡・簡素であるといひ、支那文化は、専ら濃厚・複雑であるといはれ、東洋文化の諦觀的であるのに對し、西洋文化は、能動的だと稱せられる。このことは、あらゆる集團の文化についていはれるところであつて、一の都會文化が、武士氣質であるのに對し、他の都會文化が町人傾向を示し、一農村の文化がいたつて封建的たるに對し、隣りの農村文化が、大いに近代化してゐるといふ如き事實があげられる。小にして、會社・組合・隣組・家族等、個々に、内に藏する文化に特異性をもつことは、それら諸集團の各々の独自の性格・特質としてあげられるところでもある。實に、集團文化のこの特異性は、集團文化のもつ性格として意識せられず、集團構成員のもつ共通の特質の如く見做される場合が多かつたのである。例へば、民族文化の性格たる日本的傾向をもつて、國民性であると稱し、個々の日本人が生來的にもつ人種的性質であるかの如く取扱つて來た。民族性などといふ語が、よく、それに對

して與へられてをつたのである。人間には人種の別があり、各人種、それぞれ、生理・心理的性質を異にする點があるから、同じ人種をもつて構成される集團において、人種的性質が示されないわけではないが、通例目につく如き、集團諸現象の性格的差異は、むしろ、概ね、集團文化の特質からいたされる。その證據には、如何に國民性・民族性に見做されるものであつても、時代によつて、變遷する事實があつて、これを、時代精神などと稱してゐるが、時代精神の差はいたつて顯著であり、わが日本が、あるときは退嬰的であつたものが、進取的となつた如きは、その一例にすぎないところであらう。國民性の事實や、時代精神の事實、みな悉く、文化の集團的性格のしからしめるところであつて、文化の拘束のもとに、社會過程が、集團毎に、また集團の時代毎に、それぞれ、特異性を發現するゆゑからである。

いまいふ如く、文化の集團的性格は、單に集團毎に認められる、特異のものであるばかりでなく、集團の時代毎に示される、特殊の事實であることを、注意せられなければならぬ。もちろん、それは、集團文化が、各時代に變化するからのものであつて、同一集團でも、そのもつ文化が、歴史的に異つて來るゆゑであるといはなければならぬ。我國徳川時代の文化が、維新を契機として、明治の新文化に變遷するところに、時代的な性格の差が示されて來る。しかも、よくよく事實を研究して來るなら、所謂歴史的時代の區別の如きは、集團文化の性格上の差にしたがつて、なされることであることまで、分かつて來ようと思ふ。何故、人は、徳川時代と明治時代とを分かつか。實に、これは、徳川時代の文化の性格が、明治時代のそれと、根本的に差異する事實によるので

ある。こゝにおいても、直接的には、徳川時代と、明治時代の社會過程のいとなみが、格段の相違をあらはすことからすることであるが、根本的には、兩時代の社會過程が相違することが、兩時代それぞれの文化の性格の差に基づくことが、決定的な事柄なのである。

文化の集團的性格は、集團毎、したがつて、また、集團の時代毎に示される特質・特異性であるから、集團間、したがつて、また、集團の時代間の比較によつて得られるものである。文化の集團的性格は、その意味では、外的比較によつて把握せられるところであるが、この性格は、集團内のあらゆる文化形態に通じてあらはれる、統一的特質なる點も、忘れられてはならない事柄である。文化の日本の性格は、政治制度にも、經濟慣習にも、學問思想にも瀰漫するであらう。その他、衣食住の文化形態にも及よんでゐるはずのものである。要するに、文化の集團的性格は、あらゆる集團文化の隅々まで、それを露呈する、文化諸形態共通の特質であらねばならぬ。もし、かゝる統一した、共通の特質が、いまだ集團文化の諸要素たる各文化形態に存しないなら、外的比較によつて、集團文化の性格について、なんら、いふことを得ないであらう。

しかるに、如何に集團文化といつても、文化混沌期と稱せられるやうな時期にあつては、統一的な共通の特質が、まだ、全體の文化諸形態に實現されず、個々の文化形態が矛盾・對立した特質に彩られるのみなのである。幕末から明治維新にかけて、そのやうな事實が、日本文化に示されてゐた。敗戦日本の現状も、また、しかりであらう。しかし、同一集團の人々のもつ關心・環境の同一關係は、永く、集團文化の内容の矛盾・對立を許さず

相互の調和を得させる結果、統一的・共通の特質が、全文化諸形態に示されて行き、文化混沌期がその安定期によつて引きつがれるのである。文化の集團的性格が、顯著となるのは、この安定期においてである。

## 五、社會動向

1 社會進化 社會事實に關し、主要問題をあげて説明した上、こゝに、社會の動向について述べたいと思ふ。社會とか、社會生活とか稱する事實は、社會集團、社會過程、社會形象等の三様の現象に亘る、相當複雑したものであるが、それらの事象の主たる點を分析した上、残された問題は、これらのものが、全體として如何なる動きを見せて、われわれ人間生活を推進せしめるかといふことである。社會事實は、つねに一定の法則のもとにとり行はれてゐる。社會集團にしても、社會過程にしても、また、社會形象にしても、この點から、理論研究の對象たり得るものであつて、われわれは、その基本的なものをつけて、分析を施したのであるが、いま、それらの分析を綜合する意味をもつて、社會動向を大觀して見たい。もちろん、以下において説く、社會動向についても、これまでの分析的研究の都度、個々に觸れてはゐるが、改めて、その關係の事柄だけをぬき出し、前後の連絡をつけて、事柄を十分に説明したい。そして、それを、特に、現實問題に結びつけ、これからの、必要なる社會的展望をも用意したいところである。

社會事實が、如何に分析せられるかは、學問上、最も重要な研究であるとともに、社會事實が、綜合的に、如何なる動きを見せるかと、興味ある題材たるを失はないであらう。それであるから、社會學の始祖であるコン

トは、社會學を大別して社會靜學の部門と、社會動學の部門とは分けた位であつて、彼の如きは、専ら、社會の動きを取扱ふ、社會動學に研究の重點をおいた程であつた。コントは、その方面において、かなり成功はしてつたものの、社會事實の十分な分析を先立たせないところの綜合研究には、若干、手落ちがあつたのである。

われわれは、前に述べた分析研究をもとし、それを基礎に、社會動向を論ずる綜合研究に入つて行かう。社會の動き、即ちその動向については、コントが、彼の社會動學をもつて説いた如く、社會進化の觀念が、永く支配したのである。社會諸事實は、進歩し、發展するといふ見方であつて、これは、十九世紀における現實的社會事實の改善・向上の雰囲気のもたらした、思想上の反映と見做され、十九世紀末までつゞいたところのものである。ダーウィンの生物進化論は、これに百萬の援兵を送つてゐる。生物一般が進化する以上、社會も亦進化するのが、當然だといふことであつて、社會動向は、すなはち、社會進化に他ならないとする通念が成り立つた。今日でも、社會進化の觀念こそ、最新學說であるかのやうに考へ、全體の社會動向のみならず、個々の社會現象たる、政治・法律・經濟・精神的事項、その他に對して、進化的觀點を適用するものは、絶えない。それは、マルクス主義理論の例をとつても領づかれる事柄だらうと信ずる。

しかし、學問、特に、社會學の進歩は、社會事實に關するかぎり、この安易なる進化觀を、そのまゝ承認せしめなくなつて來てゐる。社會進化觀に對する懷疑であつて、いま一度、事柄を再吟味しなければならぬことを要請しつゝあるのである。そもそも、社會進化觀はヨーロッパの歴史をもつて證據立てゝゐたのであつて、エヂプト、ユデア、アツシリア、バビロン等の社會事實が、ギリシア、ローマのそれを通して、西ヨーロッパの社會事實に發展したことを柄にとるが、古代近東諸民族にしても、ギリシア、ローマ諸國家にしても、また、近代ヨーロッパ社會にしても、みな、それぞれ別異の集團をなし、別個の社會事實を展開したものであり、決して單一なるものとして、進歩し來たつたものではない。相互に關係する點はあつたが、同じものの發展ではなかつた。歴史的連絡はあつたが、社會的連續とはいへないものである。しかるに、こゝに社會的連續を假定し、歴史的發展をもつて、社會的進歩と見たのは、重大過失であつたのである。

社會動向を問はんとすれば、古代近東各民族について、ギリシア、ローマ各國家について、また、近代ヨーロッパ社會について、個々に示された社會事實の推移のあとを究はめなければならぬ。しかして、それを究はめるならば、發展・進歩どころか、停頓・衰亡現象が、數多く、發見される。社會事實は、進化觀が簡單に見てゐたやうに、一路改善・向上するものではない。これは、全體の事實についても、部分的な事實についても、いひ得られることであるから、社會進化觀は、事實上の根據を失ふことになる。事實上の根據を失ふ以上、科學理論として、もはや、一文の價値もないのは、もとよりであらう。

社會進化觀は、結局、十九世紀的學問思想であつたにすぎない。この社會進化觀を遠ざけて、事實に即して、社會動向を究明して行くのが、二十世紀の科學の務めであるといはなければならぬ。それには、社會諸事實をよく分析し、その分析研究の上に、綜合的な結論を用意し、もつて、社會動向の把握に進むといふ必要を見る。

われわれが、社會動向の問題が、いたつて興味ある題材であるにかゝらず、錯綜した、社會事實の分析を先立て、その説明を試みたのは、このためであつた。しかも、十九世紀の雰圍氣内に成立を見た社會進化觀は、二十世紀に到來した社會諸問題、相次ぐ戦争、生活不安等、好ましからぬ逆轉傾向の出現によつて、思想上にも背景を失ふやうになつたのである。正しい認識は、その外的影響も出来るだけ遠ざけ、事實の真相を掴むといふことではなくてはならぬであらう。

## 2 歴史主義

十九世紀が、現實の社會諸事實の改善、向上のために、社會認識に、進化觀といふ發展・進歩の觀念を植ゑつけたのは、それ自體、社會學から説明してよい、興味ある事實であつた。先にあげた、認識の社會的決定の一つの場合をなすからである。しかるに、根本的に同じ關係は、二十世紀の現實社會情勢と、社會認識の間においても生じてゐる。十九世紀も終りに近づくにしたがひ、社會問題の幅濶があつて、各國は、相ついでこれに悩まされ、二十世紀を迎へて、戦争・動亂の反覆、社會不安・動搖が、いよいよきびしくなつたのである。この事情のもとにおいて、社會事實が、つねに、發展・進歩するとは、何人にも考へ得られぬ虛妄の見方となつて了ひ、社會動向に關して、十九世紀の樂觀から、二十世紀の悲觀的見解を生ずるやうになつた。社會動向に關する暗中摸索の時代が到來したのであつて、社會進化觀が、歴史主義、その他によつて、置き代へられて行つたのも、これがためである。

社會諸事實が、必らずしも、つねに、發展・進歩するものとかぎらないのは、すでに、實際の事實から、反證せられるところである。周圍の雰圍氣も、もはや、そのやうな安易の理論を許容するものでもない。こゝにおいて、二十世紀の見方としては、社會動向を、たゞ見透しがたい變遷事實として取り上げる傾向を生じて來た。社會動向を發展もし、しかしながら逆轉もする、進化・退化兩様の面をもつところの、あるがまゝの歴史的な事實と觀するのである。それには、法則もなければ、理論も立て得ぬとするのであつて、これが、所謂歴史主義の見方である。歴史主義は、社會動向に關する、これまでの進化觀の反動として、發展・進歩を認めぬとともに、およそ、法則・理論を斷念するのであつて、科學研究を、この事實に關するかぎり、諦めようとする態度をさへ仄めかすのである。歴史は、社會事實の動向を示すが、この歴史は、つひに、端睨すべからざる變化そのものとして、歴史であるにすぎないといふ。

この歴史主義の主張が、社會進化觀に對して、一層、社會動向の實相に近づいてゐる點は、看過出来ないところであらう。進化觀は、あまりにも單純な見方であり、幼稚な理論でさへあつた。いづこの社會事實も、みな、それぞれ特有の徑路をとつて變遷するといふこと、そこに歴史の事實の存することは、明らかな事柄だらうと思ふ。甲國の歴史と、乙國の歴史と異なること、一集團の沿革と、他集團のそれとが、區別せられる所以が、そこに存するわけであつて、この歴史的差異を無視して、みな悉く、同一徑路の發展・進歩をなすかに見做すことは、事實を無視するものである。歴史主義は、よく事實の實際を見て取り、社會進化觀の虛妄性を窺いてゐる。しかし、歴史主義の缺點は、進化觀の否定であるに止まつて、自ら、積極的に、なんら社會動向に關する法則を突き

とめず、理論提供をなさざることにある。かくては、われわれが、社會動向に關して、歴史主義に依頼しがたい、ある不満を感じるのである。

事實上、社會事實の動きたる、社會動向は、歴史主義の見る如く、たゞ變遷・變化そのものであらうか。例へば、學問研究の如きは、進歩して止まず、工藝・技術の如きも、つねに發展するものである。政治運営・經濟活動なども、大きな目をもつてすれば、進化的なる點は、掩ひがたいであらう。その他、社會事實の個々のものに、進化といはずとも、何がしかの變遷法則の感ぜられるのも、たしかな點であらうと思ふ。いづれにしても、社會動向を、たゞ、變遷そのものと観することは、あまりに歴史に偏した見方で、科學を等閑に附する譏りを免れないと思はれる。したがつて、この關係を反省して來るとき、歴史主義への小反動として、進化觀を、部分的に復活した、折衷的見解があらはれるのは、當然である。

われわれは、前に、文化に對して文明を區別した、アルフレッド・ウェーバーの學說に觸れたが、實に、このウェーバーの如きは、社會進化觀と、歴史主義とを調和し、その中間をとらんとする者であつた。彼によれば、文明とは科學、技術、政治の類をいひ、これらのものは、つねに發展・進歩の進化的展開をあらはす。しかるに、哲學・宗教・藝術等にいたつては、見透しがたき、恣意的變遷を示すのであつて、これが、文明に對する文化の事實であると稱する。文明は進化し、文化はたゞ變遷して止まなまいふところに、社會事實を二様に分けて、それらの動向を、進化觀と歴史主義の各々によつて説明する、ウェーバーの妥協態度を認めるであらう。

しかしながら、アルフレッド・ウェーバーの學說は、まことに巧智な理論であるが、結局、妥協主義・折衷主義に他ならないであらう。彼には、文明的進化の事實と、文化的變遷のそれとに對する、基礎附けの説明さへ缺けるのである。科學研究では、この基礎附けこそ肝要であつて、それを缺いて、理論のみを押しつけるのは、邪道である。ウェーバーにおいて、その短所は遺憾なく暴露せられてゐるのであつて、われわれは、彼の學問に倣はず、眞の社會動向を、社會諸事實の分析から得られる、十分な基礎法則をもつて説明して行かねばならぬ。同じくドイツの學者、エルンスト・トレルッチは、元來、歴史主義者であつたが、晩年、歴史主義の立場から、社會學者として轉身することを宣言してゐる。まことに、社會事實の分析をまつて、社會動向の徹底した説明が、庶幾せられるといはなければならぬ。

**3 社會進動** 社會事實のうち、あるものは進化し、他のものは單に變遷するといふ、進化觀と歴史主義兩者の中間を行く學說は、巧妙の如くであつて、實は妥協・折衷に他ならないであらう。しかし、これら三者の、共通の缺點は、社會動向を十分觀察しなかつたことと、それを説明するに、社會事實の分析を怠つてゐることである。したがつて、われは、その二點について用意を密にし、もつて、社會動向の綜合的把握につくすことが必要である。先づ、社會動向の事實について觀察し、次に、その觀察したところのものを、われわれの社會事實の分析理論をもつて説明して行くこととしよう。そして、先づ、こゝでは、社會動向が、進動として、一定の法則的發展傾向をあらはす點を、略説しておかう。

十九世紀的社會進化觀は、結局、西洋史をもとに、社會事實の發展・進歩をあげたが、それは、すでにあげた如く、同一集團と、その藏する事實の動きであつたのでなく、歴史的系列の諸集團と、その藏した事實を、前後連結したといふに他ならないのであつた。これをもつて、社會進化の法則だとしたのは、十九世紀の雰圍氣に誤またれ、一地方の歴史をそのまま、法則として取り上げた手ぬかりであつた。もし、この研究態度が許されるとするならば、われわれは、西洋史に對して、東洋史をあげ、全く別の社會進化の法則を提供出來よう。いな、こゝでは、社會進化の法則ではなく、社會退化の法則をば、提供するにいたるかも知れない。事實上、歴史は、社會事實の進歩と退歩、發展と衰亡とを、交互に織り出すものであり、しかも、個々の場合々々に、他と異なる關係と事情のもとに、唯一的なる變遷形態をあらはし示すのである。したがつて、西洋史が、東洋史と異なる如く、それらのものゝ一部をなす、各民族・國家、その他の諸集團の個々の歴史もまた、それぞれに異なるのである。

歴史主義の見方のすぐれた點が、それをもつて感得されるであらう。歴史主義は、社會動向たる歴史の事實をもつて、たゞ單なる變遷なりとし、見透しがたい發展と衰亡とする。進歩もあれば、退歩もあり、個々の場合、恣意的な徑路があるのみとし、法則もなければ、理論も出ないとする。しかし、よくよく事實をたしかめて來ると、ある事實については、進化的動向が取り上げられ、少なくとも、變遷法則の存在が感ぜられるのである。これ、アルフレッド・ウェーバー等の、妥協的折衷論の生じて來る所以であるが、われわれは、同一集團についてであれば、大まかながら、各種の社會事實に、一定した變遷法則、特に發展法則を指摘出來ると信する者である。

社會事實は、いたるところにおいて、複雑なる條件のもとに存する。したがつて、その變遷動向の如きも、もとより、この複雑なる條件の變化によるのであるから、社會動向は、いづれの個所、いづれの時期においても、各、別異のものとして、歴史的なる差異を示さぬわけには行かない。フランス革命と、明治維新と、ロシアの共產革命の例をあげても、そのことは、よく、分かるであらう。各國の歴史が、みなそれぞれ別個の歴史として書き綴られる所以の如きは、その最大の證據であらう。かくの如く、社會動向は、個々の集團と時代によつて、事實上、比較を許さぬ差異性を示すが、しかし、一面からいふと、この差異性は、社會事實が、複雑なる條件のもとに展開する所以であるから、條件のうち、もし同一條件にして藏せられるならば、そのかぎりにおいて、同一動向が歸結せられることを、排除するものではない。つまり、社會動向を決する一部の條件が、共通であれば、その程度において、社會動向には、法則性が示され、理論化手続きが可能となされて來るはずである。

われわれは、社會動向の問題において、具體的には、それぞれ別異の歴史的變遷のうちに、部分的に一定した變遷法則、特に發展法則の存在を感ずる者であるが、その説明を、如上述べた意味において、追及したいと考へる。しかるに、社會事實のこれまで説いた、分析研究によるなら、社會動向を支配する、ある同一條件は、各種の社會事實に、つねに隨伴するのであつて、それを手がかりに、われわれは、社會動向の法則的な把握を行こなつて行きたいと思ふ。かねがねいふ如く、それは、分析研究の結論たる意味の綜合研究たるのであるが、具體的に複雑した社會動向の、ある一部に關する理論であるから、事實を大まかに掴むといふのは、忘れられてはなら



ない點となるのである。

以上の意味から、社會動向を、社會進動といひ代へるを得ようと思ふ。社會事實の大まかなる進化、社會動向の一部の發展・進歩といふことである。しかし、われわれのあげる、大まかなる進化動向こそ、社會事實の藏する重要傾向をなすのであるから、それは一部の動向であるとはいへ、基本的なるものだといはなくてはならぬ。社會進動は、社會動向に、つねに、基本となつてはたらく、重要々素である。社會動向を見透す上において、社會進動は、根本認識として、その任務を果たすであらう。しかし、社會事實は、社會學上、社會集團と、社會過程と、社會形象の三つの方面に分かたれるのであつて、社會進動もまた、これら三方面的事實に亘つて立證せられるのである。すでに、これら三方面的社會事實を分析したわれわれとして、それらの藏する法則に即して、その進動を説明するのは、容易とされてゐるであらう。以下の數節を、それらの進動事實と、その説明にあてたいと考へる。社會事實の分析研究から、綜合研究へ進み、社會動向の認識達成の途が、開られるであらう。

4 人間團結の擴大 社會進動の最初の事柄として、われわれは、社會集團の進動々向をあげてよからうと思ふ。社會集團は、人間團結として、あらゆる社會事實に基盤となるのであるが、その事實を分析して來た者として、われわれは、綜合的に、社會集團動向として、社會集團は、常住、その團結範圍を擴大するといふ結論をもつやうにされるのである。集團擴大の進動傾向が、それであつて、このことが、すべての社會進動に基盤事實となつてはたらく。しかし、社會集團といつても、全體社會もあれば、部分社會もあり、その他、各種多

様の團結性を有するものであつて、そこに、集團擴大の進動傾向を、一概に、あげることは出來ないであらう。いま、われわれが、その傾向として指摘しようとするものは、全體社會のそれであつて、全體社會が、團結範圍の擴大を來たすところに、部分諸社會も、また、可能なる限度において、擴大傾向を示し、もつて、爾餘の社會諸事實の基盤である、社會集團一般の擴大的進動が、成り立つわけである。

人間生活として、個人の孤立生活が許されず、諸個人相倚つて、集團を組み立てるのは、必然現象であるが、その團結形態は、總體として、つねに、外部に向かつて擴張し、集團分野が、増大して行く事實を見る。總體的團結形態は、かねていふ如く、全體社會と呼ばれるものであつて、部族、部族聯合體、民族、國際社會等を、各時代における代表型とするが、これらのものは、一つのものから、他のものへといふ繼起關係におかれ、部族から部族聯合體へ、部族聯合體から民族へ、民族から國際社會へと、發展するのである。これら個々の全體社會についていつても、小部族から大部族へ、小部族聯合體から大部族聯合體へ、小民族から大民族へ、小國際社會から大國際社會へといふ、小から大への擴大的發展が立證されよう。それは、ひろく未開段階の事實であるのみならず、歴史的事實でもあり、また、われわれ眼前の事實をなすものでもある。われわれの劫初の祖先は、部落様の小天地において生活したが、數萬年の長期間に亘る、戦争と、征服と、併合手續きによつて、繰り返し、繰り返し、異部族、異民族と、共同生活をなすやうに運命づけられ、つひに、現代民族を形成するやうになつた。しかして、現代諸民族も、また、いまや、相互の關係の密接化に伴なつて、國際社會に投合しようとしてゐる。

右の如き、全體社會における、集團擴大傾向か、内部の部分諸社會の同じ傾向を誘致してゐることも、見通してはならぬ。眞の全體社會に準ずる、地方とか、都會とか、農村とかが、膨張・増大するのはもちろん、階級・職業團體・會社・組合等の諸團結も、狭まゐものから、廣ういものへと擴大するのである。現代での、國際集團の簇生事實の如きが、最もよく、その事實を例證しようと思ふ。なかには、家族の如く、大家族の形態から、小家族の形態へと、逆に、集團範圍を縮小するものもないではないが、それは例外をなす、特殊事情に基づくところであらう。しかも、古い家族形態の團結關係をなした、親族關係についていふなら、その範圍は、やはり、各地方に推し擴ろげられつゝある。親密な友人關係が、昔は同一界限、同一聚落内に生ずるに止まつたのに反し、今日、全國に、或は、國際的にさへ成り立つことも、異例ではない。

右の如き、實際上の集團擴大傾向は、如何に、説明されるであらうか。これを説明するものは、社會集團の團結原理であらねばならない。集團々結の原理としては、人々の接觸・交通が最も基本をなし、感情の融和を意味する、ゲマインシャフト、意志の協同をいふ、ゲゼルシャフトを、第二、第三とするのであるが、このうち、接觸・交通關係の動向こそ、その鍵であつて、人々の間のこの團結關係が、時間的・歴史的に、順次、延長せられるところに、集團擴大の根源が與へられる。いま、その理論を説明するであらう。

人々の間の接觸といひ、交通といふが、本来的には、行爲の傳達關係であることは、すでに、説いた事柄である。この行爲の傳達關係たる、接觸・交通は、最初は、なんらの手段を用ゐず、われわれ人間に自然に具はる、

肉體的表出器官と、同じ受容器官によつて行はれる。肢體・音聲によつて、相手に呼びかけ、眼や、耳等の五官を通して、相手からの呼びかけをとり入れる。そこに、接近した個處にのみ有効である、直接的接觸があるが、しかし、やがては、信號、文字、メガフォン、擴聲機、聽音機等々の通信手段や、道路・橋梁・使者・乗物・舟車等々の運輸手段を發明して、接觸は相當距離する場合においても、行はれるやうになる。これらの通信手段や、運輸手段が、いよいよ高度化されて、郵便・電信・電話・無線といふ如き、また、汽車・汽船・隧道・航空機といふ如き、近代的交通機關の採用にいたれば、接觸・交通は、無限の距離に引き伸ばされよう。

もともと、これらの交通機關の發明・採用は、一定集團内の生活たる社會過程を便するためのものであるが、一度交通機關が設備されると、その設備は、この集團内部のものとして利用されるにとどまらず、多くは、外部に向かつて、思はざる效用を生ずる。國內放送のラジオの電波が、國外にまで達する事實は、よく、そのことを立證するであらう。交通機關のこの客觀性ともいふべき特性が、接觸・交通といふ集團構成の第一原理を、常住伸長して、遠距離の團結に基礎を與へ、遠距離の團結が、第一原理において基礎を與へられる結果として、集團擴大が、逐次に歸結せられるといふことになる。しかし、それが、接觸・交通のおし及ぶ全範圍たる、全體社會において、特徴的に示される進動々向たるものが、自然のこととなるのである。

**5 共同生活の調和** 交通機關の發明・採用と、特にそれのもつ客觀性によつて、全體社會の擴大がなされ、ついで一般的な各種集團の同じ傾向が招來される。そこに、社會集團の進動傾向が認められるが、この

集團擴大傾向に隨伴する、集團を基盤たらしめる、集團人の生活々動たる、社會過程においては、如何なる動向が看取されるであらうか。

こゝに、先づ、注意しておかねばならないことは、集團擴大は、人口増殖といふことと別個の事柄だといふ點である。集團擴大が、社會學的事實であるに反し、人口増殖は、生物學上の問題である。したがつて、たとへ、生物として人間が大いに増殖するとしても、集團構成諸原理が、増殖した人間の間に成り立たないならば、實際の社會集團は、膨張もせず、増大も來たさないものである。未開人種が、増殖しながら、舊態依然、部族的聚落形態を、彼等の集團的限度としてゐることは、その間の消息を語り、一方、文明人が、人口の點において、まゝ減衰さへ來たしつゝも、大帝國を樹て、國際社會の經營に進出するのは、集團擴大が、人口問題を超越して成立する所以を語たる。

けだし、集團擴大は、人口の増減如何にかゝはらず、所與の人的資源の上に、集團々結關係が、その範圍を擴張する事實である。したがつて、諸人種・諸種族・諸民族の存在からいへば、それらの存在は、集團擴大の進動傾向によつて、逐次、併合される運命にあるのであつて、集團擴大は、これら各單位を併合する、統一作用を演ずる。このことは、ひとり、如上にあげた、人種上の特有諸集團のみではなく、他のあらゆる性質上において異なる各種集團についても、同じやうにいへるであらう。そこで、集團擴大とともに先づ見られるものは、人種、文化等の點で、これまで異質的であつた者が、一つの共同生活にもち來たされるといふことであり、こゝに、社

會過程の著しい特徴が示されて來るのである。

如何なる集團の場合にあつても、その構成員が、生得的性質において異なり、後來的性質の上でも差があるとせば、相互の誤解や、猜疑や、利害の衝突等から、感情の反撥、意志の抗争を生じ易いといふのが、つねである。いま、集團擴大により、これまで無關係であつた、各種の異質的集團單位が、より大なる集團關係のうちに抱擁せられて來るのであるから、各單位の間に、敵對現象、特に、その初發的を反撥現象が、火花を散らすといふことが、避けがたいであらう。事實上、集團擴大の動向とともに、最初に認められるは、新たに接觸・交通關係を生じて來てゐる、諸集團間の對峙・戰爭の現象であつて、歴史に顧みても、部族間、部族聯合體間、民族間の對峙や、戰爭は、接觸・交通關係といふ、集團構成上の第一原理が、それら諸單位の間に、成り立つときのことである。常識から見ると、各單位は、それぞれ、儼然と獨立してゐる如くであるが、理論上では、各單位は、すでに、より大なる集團關係のうちに抱擁され、この擴大された新集團最初の、特有なる社會過程として、敵對現象や、特にその反撥現象が展開してゐるのである。

集團擴大とともに展開する、初發的な敵對現象、特にそのうちの反撥現象は、そのまゝ繼續せられるであらうか。決して、しからずであつて、たゞ盲目的な反感に基づく敵對現象、すなはち、反撥現象は、理由なきことを悟られて、利害の眞の衝突による意志の抗争、すなはち、抗争現象に轉じて行く。國際戰爭が、人種の憎しみや、宗教關係の感情的要素を次第に遠ざけ、經濟上、思想上の意志の貫徹に存することを、明らかならしめて來つゝ

あるのは、その一證左であらう。しかし、この敵對現象も、永く、反復せられるものでなく、諸單位間に勝負の決せられるとともに、多くは、支配・服従關係に入り、上下現象があらはされることとなる。この支配・服従關係と、上下現象の出現により、擴大新集團の成立は、もはや、常識上にも、疑問の餘地を残さぬところの事實とならう。例せば、宗主國と、その隸屬國であるが、兩者を連らねて、一帝國が構成される事實である。

こゝに展開する上下現象においても、その初めは、強制支配の、制壓現象に始まるであらうが、制壓現象を特質づける、利害一天張りの意志關係は、相互の利害の調節からして、感情融和の承服現象への移りを促がす。この程度をもつてしても、擴大集團を特質づける社會過程は、大いに、調和傾向をあらはすものであるが、この調和傾向は、さらに、承服現象が、相互の平等的立場の承認により、和合現象、特に、その最初のものたる、意志上の協力現象に轉じ、この協力現象が、再轉して、完全なる感情融和の、親和現象に歸すること、完成される。こゝに、逐次、展開する社會關係現象の動向は、結局、擴大集團内の社會關係の合理化そのものの結果以外のものでないであつて、かの社會的距離の短縮化の線に沿ふ、社會關係現象の進動々向なのである。

要するに、社會過程の動向としては、社會的距離短縮化の線に沿ふ、調和傾向が看取されるであらう。われわれは、集團擴大毎に、この社會過程の調和が、反覆せられる點を忘れてはならないが、それが、つねに、より高次の集團構成單位間に展示せられて行くことを思へば、社會過程のこの進動事實は、段階的たると同時に、諸段階を連らねる、一般的動向だと見做してよいであらう。

## 6 文化内容の充實

集團は、常住、擴大し、その生活々動たる社會過程は、調和を實現して行く。これが、社會集團と、その生活過程の進動事實であるが、社會學的第三事實たる、社會形象の進動々向として、如何なるものが、あげられようか。社會形象は、俗にいふ文化であるから、われわれは、ひとり、社會學的興味においてでなく、ひろく、教養上の關心をもつて、この問題に接するものであらう。

社會形象は、所謂文化であるが、その意味は、生活様式といふこと、特に生活原形といふことである。内容をあげていへば、制度・慣習・思想等に亘る、社會的構造物なることも、繰り返した點である。社會的構造物といはれる如く、集團内に、社會過程の營なみをまつて、生成・存立せしめられる、生活過程の所産であるが、同時に、一度、生成・存立するやうになると、制度において、最もよく看取されるやうに、生活過程を、逆に、拘束・支配する關係を生ずる。生活原形といふのは、その意味からであることも、縷述してある。この社會形象の動向については、その變遷を論じたことが、基礎になることは、もちろんのことである。社會形象は、根本的に、集團人の關心・環境の相關々係に基づいて生成され、存立し、また變化を來たすが、特に重要なのは、環境諸條件である。いま、集團擴大の大勢とともに、この環境諸條件は、如何に變化し、それにより、社會形象に如何なる進動事實が看取されるか。

そのことを説く前、われわれとして、別に注意しておくべき一事がある。それは、社會形象たる文化は、たとへ、集團人の同一關心・環境の相關々係のもとにおいても、生活様式として、つねに、工夫・改善せられて、よ

りよきものに、仕立て上げられる傾向を有することである。政治制度は、試煉によつて改正され、經濟慣習は、逐年、一層合理化され、藝術思想も、また、次第に、洗練されて來るのである。けだし、所與の環境のもとで、集團人の關心を疏通せんとするとき、初めは環境條件に對し、大まかに適應する生活様式をもつてするも、試行錯誤や、合理的模倣をもつて、より精密に適應するものを工夫・發見して、順次、高度、精緻な生活様式の採用に立ちいたるがゆゑである。その動向は、合理化であり、また、單なる合理化以上の、醇美化でもある。われわれは、すでに、文化生成の分析において、試行錯誤・模倣の手續き等に關し、この合理化・醇美化動向を示唆しておいたが、これを、改めて、取り上げておかねばならぬ。

さて、集團擴大とともに、社會形象の動向を決する、環境諸條件には、如何なる變化がもたらされるであらうか。集團擴大によつて、示されて來る環境條件の變化は、自然環境の面でも、社會環境の面でも、また、文化環境の面でも、特殊的・限定的なものから、一般的・普遍的なものといふ徑路である。海洋的民族は、國際社會の發展につれ、大陸的環境をも有するにいたらう。これまで、特定の國家とだけ、隣接してゐた國家は、爾餘の諸國家とも接壤するやうにならう。しかして、民族も、國家も、廣大なる諸民族・諸國家の共存圏に入ることによつて、ありとあらゆる文化形態に接することゝならう。このことは、すべての集團擴大の場合、反覆實現される事實であるから、社會形象は、この環境條件の一般化・普遍化のために、郷土的なるものから、全國的なるものへ、全國的なるものから、人類的・世界的なるものへと、その性質・内容をかへて行かう。一國家特有の政治

制度が、諸國家共通のそれに轉じ、郷土的慣習が清算せられて、世界的慣習に變はり、固陋なる神秘思想が、公明な科學思想になつて行くのは、その實例とするに足りよう。

もちろん、集團擴大の各段階毎に、舊環境に代はる、廣大・複雑の新環境があらはれることであるから、社會形象は、切りかへられた新環境のもとで、古きものを解體して、新らしきものを生成せしめる、刷新・改修作用を、間に挿さむことは、事實である。そして、かゝる刷新・改修作用の初めにおいて、文化混沌期があらはれ、これが、新環境の繼續によつて、文化安定期に移行し、各段階の始末がなされることは、あたかも社會過程の動向における場合と、變りはない。さきにあげた、社會形象の合理化・醇美化の動向の如きも、文化安定期のうちにおける、特徴的な小動向だと見られぬものでは、ないであらう。

しかし、社會形象の動向としては、擴大する集團進動の事實に即して、人道化・世界化しつつ、同時に、合理化・醇美化するといふのが、その大筋である。人道化・世界化が、主要であつて、合理化・醇美化が、それに附帯するであらう。かくの如く見るとき、社會形象の進動も、また、動かし得ないところであつて、われわれは、總體からいつて、それを、充實だとしよう。社會集團が擴大し、社會過程が調和し、社會形象が、充實するところに、社會進動の大綱が示されてゐるのであつて、社會動向は、この大まかな進動傾向を藏するものである。しかして、單に、社會動向の一部において、この進動事實が、藏されてゐるといふのみならず、社會事實の現實動向は、この社會學的進動法則を樞軸たらしめて、展開して行くのである。けだし、社會事實の現實動向とすつて

も、それが、つねに、爾餘の複雑した、自然的・生物的・心理的諸要素を交しへ、したがつて、それら諸要素の規制を受けとることはあつても、主たる契機を、必らず社會事實たる點に有するものであつて、社會事實のもつ、固有の進動法則こそ、核心をなすゆゑである。

### 7 社會進動の意義

社會集團は擴大し、社會過程は調和し、社會形象は充實して行くところに、社會進動傾向が認められるが、われわれは、こゝに、それらの動向の意義をたしかめておきたい。すなはち、こゝに問はんとするのは、社會進動の示すところの原理、乃至方向であつて、かくの如き、進動原理、乃至方向を探知するのは、われわれが、社會事實に對して、實踐態度を決する上に、大なる指導と、示唆を與へることであると信ずる。

社會集團は擴大に擴大を重ねる。全體社會が、先づ、擴大されるが、それは、集團團結に最も基礎となる、接觸・交通關係が擴張されることであるから、之れ以上の集團構成原理である、ゲマインシャフトや、ゲゼルシャフトの諸關係にも、自づと影響するのは、當然であつて、これらの團結關係も、また、増大する。交友關係がひろきに亘り、組合關係が遠きに及ぶであらう。こゝに、われわれは、多くの、部分諸社會が外郭的全體社會の擴大に即して、同じく擴大し、行く傾向を見るが、しかも、これらすべての集團擴大傾向は、量的増大のみでなく、同時に、質的擴充傾向をあらはす點を、忘れてはならぬ。接觸・交通關係は、濃密となり、ゲマインシャフト關係は、深厚となり、また、ゲゼルシャフト關係も、緊密となる。集團擴大といふ形式的事實は、これらの實質

内容を促進するのであつて、人々は、接近化し、友愛化し、協同化する。すなはち、團結關係における、空間の克服であり、感情の一致であり、意志の統一であり、あらゆる意味から、人々の間の密接化が、歸結されるとしてあつて、人々の關係は、近く、深く、強く結びつけられるといふ意義が見出される。

次に、われわれは、社會過程の調和傾向をあげたが、この調和が、如上の團結關係における、接近化、友愛化、協同化と、表裏相なすものであるのは、社會過程の調和傾向が、かの社會的距離の短縮化といふ事實であることから、察知せられる事柄であらう。敵對關係が上下關係に移り、上下關係が和合關係に轉じ、しかも、敵對關係のうちにおいても、反感による反撥關係が、利害の衝突からする抗爭關係へ、上下關係のうちにおいても、利益追求の協力關係から、心からなる親和關係へと進むことは、みな、接近化、友愛化、協同化の現象だといへよう。しかるに、社會過程における、如上の調和傾向は、先づ、分業化を、一指標とするであらう。敵對關係が、上下關係に移ることは、結局、相手を利用する態度に基づき、上下關係が、和合關係に轉ずることも、特に、積極的な、相手の利用意圖に發する。この相手の利用といふことは、自己にない、相手の性質を利用せんとすることであるから、仕事の分擔を意味し、分業化に歸着する。社會過程の調和動向は、分業化の意義を伴なふ。次に、この分業化と、さきの友愛化とは、結びついて、互に、相手を自己と同様に評價し、尊敬する結果を來たし、ここに、平等化の事實をもたらすのである。かくて、人々は、次第に、平等の立場に立つて、各自の長所を發揮し

て分業するゆゑに、自由の増進が見られるであらう。そこで、社會過程の進動中において、人々は、分業化し、平等化し、自由化すると認められる。社會過程の進動上の意義が、これらの點に、示されてゐる。

われわれは、社會形象の充實といふ問題についても、次の如き諸點の意義を、汲みとり得ようとする。社會形象たる文化の事實は、郷土的・地方的なものから、人類的・世界的なものに進んで行き、同時に、合理化・醇美化して行く。しかるに、それが、人類的・世界的なものになつて行くのは、人道化することである。こゝに人道化といふのは、普遍的な人間性を實現するといふ意味であつて、いはば、形式的な傾向である。しかるに、社會形象は、その内容において、環境條件中あらゆる特殊性の藏せられることをうつつして、多種類化、すなはち、多様化がかもし出される。同じ衣食住の生活様式も、個々の場合々々の種類を多からしめるのである。しかし、社會形象の充實傾向は、これらの人道化、多様化のみならず、さらに、洗煉化によつて示される。すなはち、大まかな適應性を示す生活様式が、次第に、合理化・醇美化せられることである。社會形象進動のもつ諸意義は、人道化、複雑化、洗煉化等である。

さて、社會諸事實の進動々向のもつ意義を検討したのであるが、各方面の社會事實の進動を究明した上、最も注意されねばならないことは、それら進動傾向を實現して行く、われわれ人間の能力であらねばならぬ。われわれ人間の主たる意欲は、感情・意志たること、もちろんであるが、これらを嚮導するものがあつて、始めて目的達成にいたる點を思ふと、理性のはたきこそ、その主要能力だと見做さなくてはならぬ。社會進動は、實に

人間理性の高度化を要件たらしめ、それによつて集團擴大も、過程の調和も、形象の充實も、いたされるといはなくてはならぬ。理性の高度化、すなはち、教智化こそ、その要因である。しかし、この教智化要因は、手續きとして、人々の生活態度の適應化を要件としよう。所與の環境状況に適應せんとする積極的態度なしに、如何なる教智化も、意味をなさぬ。しかるに、教智化・適應化をもつて、社會進動が實現せられるところに、能率化は、必至のことであるから、これを入れて、社會進動の、一般的意義としては、教智化、適應化、能率化の三原理をかゝけてよいであらう。

### 8 現實社會

われわれは、社會事實について、科學研究のもたらした法則を、理論的に述べて來たが、いま、翻がへつて、現實の社會情勢を顧みるとき、安易なる學問上の論義が、實際と、如何にかけ離れてゐるかに關し、痛感を禁じ得ない。社會學といふ如き、比較的、現實的意義を感じられる科學のことであるから、もつともつと、現實の社會情勢に接近した研究であらねばならないと思はれるにかゝはらず、その研究や、理論が、かなり、現實から離れた、高踏的な匂ひをもつてゐる。實に、現實社會情勢は、抜きさしならぬ、われわれの生活打開を迫り、國家としても、個人としても、現下の窮境を切りぬけ、社會を再建するに必要な多くの手段・方法の一つとして、學問、科學、殊には、社會學に期待するところ、いたつて大なるものがある。

我國は、國家として、最も思むべき、全面的敗戦の不幸を招いてゐるのである。社會集團として、國家は、民族的存在と發展のために、外部からする脅威を遠ざけ、内部における問題處理につくすべき社會統制を主要任

務とするものであるが、無條件降伏は、いまや、日本國家が、この任務遂行上、一大蹉跎を來たし、今後も永く、その完遂を期しがたい状況にあるのを、示してゐる。舊日本國家は、まさしく、破摧せられたのであつて、その結果、社會統制の正常作用は、停止され、ために、社會不安と、國民生活の動搖とが、醸成されるにいたつてゐる。それに、迫車をかけるものが、戦時のあとを受けた、財政・經濟上の困難であり、精神・道義上の混亂である。社會統制の全的缺陷を救ふものは、戰勝聯合國側の、公明なる政治上の指導であり、財政・經濟上の困難にも同情的救済があり、且つ、また、精神・道義上の混亂にも、好意的援助があるが、至難の局面は、全國民の塗炭の苦しみと、暗澹たる前途の見透しと、時々、絶望的な氣分の支配を、如何ともしがたいのである。

かくの如き、不幸な難局を招來するにいたつたことは、舊日本の指導者層の、戦争責任に歸せられてゐる。あらゆる場合、世の指導者は、その有する優勝地位ゆゑに、社有の動向に對して、大なる決定力を發揚する。かの優勝模倣の占める、社會過程上の役割や、同じく、社會形象生成上における、その作用が、その關係を説明するであらう。況んや、この指導者にして、集團意識の形成上、決定的作業をいとなみ、社會統制の施行において、その現實的運営に當るにおいてをや。したがつて、舊指導者層が、現状に對する責任を追求せられてゐるのは、當然の事柄と考へられるが、しからば、その指導者の責任が追求せられるとき、彼等の過誤は、何處にあつたか。指導者層は、國民に對して、所謂必勝の信念たるものを強要し、滅私奉公、公益優先、挺身協戮等の態度を號令したが、そもそも、彼等自身、その信念と態度において、缺如したではないかといふことが、指摘せられてゐる。

まことに世の指導者は、國民に對して、それぞれの必勝・愛國の精神と行爲を宣傳する以前、自己のそれにおいて、師表的實踐を銳意せねばならない。しかるに、舊指導者層において、ともすると、そのことが、満足でなかつたのである。國家の危機が、その間隙を縫つて醸成せられた。しかしながら、こゝに問はなければならぬことは、よし、指導者層が、如上の信念と態度において、十分なる者であつたとしても、社會認識上において、必要なる知見の把握を怠つてゐたとするなら、信念は内容的裏づけを缺き、態度は、實質上、空轉せざるを得なかつたであらうといふ點である。實に、顧みて敗戦によつて來る所以を分析すると、我國舊指導者に責むべきことは、その點を、最も重しとしてゐるのである。

簡単にいへば、指導者層は、我國と世界における、現實的社會諸事實の、眞の認識を等閑に附してゐたのであつて、神秘的な政治・軍事思想に捉はれ、形而上學的な法律萬能の習性から脱皮し得ない者であつた。ために、社會現實の事實を無視し、社會法則・理論を外に、たゞユートピアの實現に驚進せんとした。そこには、なんら社會諸事實の實狀と、その法則・理論にしたがふ、健全なる企畫的態度が認め得られなかつたのである。しかし、この指導者を、指導者たらしめてゐた、國民の側にも、責任はあるのであつて、過去の指導者にも、全責任を轉嫁してよいのではない。

實に、我が國民全體においても、指導者層と同様なる、現實社會諸事實に關する、普通の認識にも貧困でありすぎた。教養上において、道學的修養のみが強調せられて、それに若干の自然科学の要素が、つけ加へられてを



つたが、木に竹をつぐ、この種の教育は、國民思想上、精神分裂症を培養するのみであつたからして、社會過程の現實生活のうちに、如何なる態度をとることが、安全、賢明であり、如何なる行爲に出づることが、危険・暗愚であるかに關する、判定に、全的無能力たることを暴露してゐた。要するところ、舊日本は、指導者層と、一般國民大衆をあけて、現實社會事實の認識に缺格者たることを立證したのであるから、無知と、不見識のうちに、戦争遂行の投機をあへてしたものといはねばならない。その結果は、つひに、國家の破滅であつて、二千年の國史は汚がされ、維新以來、營々苦心の、近代國家形態が、一舉にして、倒壊するにいたつたのである。

### 9 社會再建

敗戦日本の現難局は、個々に見れば、食糧難であり、住宅難であり、政治難であり、思想難、また、數々の艱難であつて、この難局を打開すべく、われわれ國民は、社會再建の大事業に奮起しなければならぬ。國破れて、山河ありと、古人は嘆じたものであるが、國家は破れても、民族的存在が、殘こされてゐるところに、その存在を有意義ならしむべく、あらゆる、その構成員が、銳意、努力するのが、緊要である。戦勝聯合國側も、我が民族的存在までを否定し、今後の日本の平和的存続・發展を阻止しようとする者ではない。いな、聯合國の眞の意志は、過誤に満ちた、舊日本國家を是正し、眞實なる、新日本民族の生育を、促進しようとするにあるのである。かくの如き、好望なる國際的期待と待遇のもとにおいて、日本國民が、新らたなる意氣込みをもつて、自己の問題として、社會再建に乗り出さねばならぬといふことは、權利であるとともに、義務でもあるであらう。

現下の個々の難局面を處理することは、新段階の新指導者の經驗と、手腕にまつこと多しといはなければならぬ。そして、關係國民各層・各自が、誠心誠意、それに協賛する建前をとらなければならぬ。かくの如き、新舉國一致の態勢のもので、曠古の現難局も、解決される緒につくところであらう。しかしながら、全體の事業を通じて、過去の失敗の轍を踏まず、眞に社會再建の大目的を達成するためには、格別、考慮を拂らふことを要する。すなはち、前節述べた如く、舊日本の一般的缺陷として、社會諸事實に對する、上下の認識そのものが、ほとんど、皆無であつたのであるから、われわれは、先づ、その點に目醒め、今後においては、社會科學、特に、その基礎方面を擔當する、社會學の研究を促進・普及せしめなければならぬ。新指導者層の簡拔上、社會現實社會諸事實の認識の確しかな者、その法則・理論に通曉してゐる者のみ、適格者として推挽するを要する。そして、國民一般としても、今後においては、同じく、社會の現實性の認識、その法則・理論の、出来るだけの教養を、身につけるやうにせねばならない。

それによつて、過去の日本を誤まつた、指導者層の、神秘的政治思想や、法律萬能の行き方が、正しい企畫的指導性に發展するであらう。また、一般國民大衆側の、木を竹についだ、道學的修養と、自然科學の斷片的教養との結びつきが、渾然たる、科學的社會認識と、同じ自然認識の融合・調和によつて、健實なる國民精神と、それに應ずる態度を實現するにいたるであらう。新指導者層の、その文明的特性と、新國民大衆の、この向上した態度によつて、始めて、再建日本の曙光が、認められると考へなくてはならぬ。

しかして、如上の意味の、過去の日本の清算は、同時に、その社會再建の要綱をなすものだとなさなくてはならぬ。全國民の上下を通じての、現實的社會諸事實に関する認識、その法則、理論の促進・培養は、ひとり、過去の舊日本に缺けたるものを、消極的に補ふといふ以上、積極的な、再建推進力の隨一として、はたらくものである。如何となれば、今後の、社會再建の大事業は、現にわれわれ日本國民が墮つてゐる、社會的窮境であつて、この窮境そのものが、一の僞はらざる社會事實であり、しかして、この窮境を打開して、われわれが達せんとする、彼岸の、再建社會が、また、明らかに、他の社會事實をなすものであるからである。これらの社會事實、いづれも、社會科學的、特に、社會學的認識によつて、その有する法則・理論が、顯現せらるべきものなる以上、それを無視することが、再建を妨たぐることである反面、それを把握するのが、再建の基礎的要請だと、思はなければならぬ。

われわれは、社會事實に関する本書の説明において、最も主要なる點のみを抜粋してゐるのであるから、われわれの掲げた法則や、理論のみで、現實問題たる日本社會再建に、すべての認識が十分なりとはいへない。これ、社會學の一般的研究内容を説明した、これまでのところをもつてして、如何にも、實際問題と縁遠いものである。感想を生ずる所以であるが、社會事實の認識は、つねに、必要に應じて、大筋の認識、つまり一般的・抽象的認識から、特殊的・具體的認識へと移行すべきものであつて、現實的社會事實への對應などの場合において、その事實を、特に、特殊的に、具體的に研究し、把握することが肝要である。しかし、それゆゑ、事實の、一般的、

抽象的認識が、不必要となるものではないのであつて、むしろ、一般的・抽象的認識の心得の上に、特殊的・具體的研究が、可能とされる關係がある。けれど、いづれの場合においても、これらの認識・研究は、科學的態度と方法によつて眞ねかれてゐ、一方の認識が、他方の研究を嚮導し、後者の研究が、前者の認識を補成するものだからである。

日本社會再建に對し、社會科學、特に、社會學の要望される所以は、大體、以上述べた如くであるが、これに關聯して、先づ、一二の點を、附言しておきたい。日本社會再建は、決して、軍國日本の再興を意味するものではないからである。それこそ、社會進動の法則に基づき、平和的新日本の建設を目ざすべきものである。かくて、内におけるデモクラシー原理の實現と、外に於ける國際社會の尊重が、なされる。そもそも、戰勝聯合諸國は、多く社會學の開拓に熱心なる國柄であつて、社會學的理論をもとに、社會再建を企圖することこそ、聯合國側の賛同を得べき、眞の日本復興の大道なりとさへ、信ぜられるところである。

**10 これからの問題** 敗戦日本は、社會再建にいたらなければならぬ。しからば、これからの方圖として、如何なる仕事か、なされなければならないのであるか。われわれは、社會事實の研究から得られた法則と、特に、社會動向に關して擷んだ、その進動理論に鑑がみて、この問題を略述したいと思ふ。

今次の大戦は、東洋においても、西洋においても、人類未曾有の慘禍であつて、諸民族・諸國家間の闘争が、如何に呪ふべき不幸事であるかを、われわれの骨身に徹して體驗したところであつた。將來、かくの如き戰爭の

再度の勃發を防止すべく、あらゆる手段を講ずることが、緊要であるが、戰爭原因を溯つて考究すると、各國指導者層・軍部・民衆の野望や、過誤は存したにしても、根本的には、現代的交通機關の發達につれて、諸國家・諸民族が、社會的に大いに接近せしめられ、接觸關係を密ならしめつゝ、感情の行き違ひや、利益の衝突を來たしたることによらう。社會進動の理論からいへば、集團擴大の際、不可避免的に生ずる、舊集團諸單位間の敵對現象の大きなあらはれだと思ふべきならぬ。この敵對關係を、相互の間のよき理解と正しい解決に誘ひくことをせず、野望をもつて民衆を率きゐ、民衆も、また、それに盲從する過誤を犯かした點に、戰敗國の失敗が存した。少くとも、我國が、そのうちの一國だつたことは、たしかである。

戰爭中、我國では、開らけ行く、東洋における國際新社會に對して、東亞共同體とか、東亞共榮圈なる名稱が附せられてゐた。名稱それ自體は、まことに正當であつて、集團擴大の進動法則に基づき、諸民族・諸國家間の接近化、友愛化、協同化の實現を意味する以上、いままつて、それを否定すべき根據はないであらう。たゞ、東洋諸國家・諸民族だけの、關係にそれをかぎり、殊に、一國の制覇のもとに、これを實現しようとのみ考へたところに、重大なる過誤があつた。理想としては、どこまでも、看板に伴はりのない、眞の國際共同生活體たるべき、廣域新社會を、眞面目に實現する努力である。しかして、今日、聯合國側の銳意しつゝある、國際聯合の構想が、まさしく、それ以外のものではない以上、我國としても、進んで、その企畫の完遂に參與すべきであるのは、もちろんの事柄である。

聯合國側が、舊日本について、封建性を指摘し、その爰除を期してゐるのは、我が國のこれまでの社會過程が、いまだ、各層、各面の十分なる、分業化、平等化、自由化といふ、社會進動のこの方面の法則體現にいたつてゐなかつたことによる點が、多いであらう。もつともつと、我が國民は、實際生活上において、互の長所を發揮する、自然の作業分擔を、強めて行かねばならぬ。各人の平等的立場を尊重し、また、各個の自由の原則を樹立して來なければならぬ。國內で、これらのことが必要であるのみならず、國外において、また、それらのことが、要求せられ、國際新社會の諸民族・諸國家間の關係において、經濟的分業化の如き、政治的平等化の如き、また、道義的自由の如きが、貫徹せられなければならぬ。國際生活上、我國が、過去の獨占的な、支配的な、また、強制的な態度を清算して、平和新日本として更生する所以が、そこにあらうと思ふ。

われわれが、進んで、新日本の社會形象たる文化の點についていふなら、こゝにおいても、また、社會進動の法則に忠實であるべく、人道化、多様化、洗煉化の原理から逸脱すべきではないであらう。舊時代においては、ともすると、我が固有文化の護持のみに汲々として、文化の人間性に眼を閉ぢようとしてゐたのである。しかし、かくては、世界的田舎文化の固守に墮するのであつて、これからのこととして、その陋態を清算して、ひろい人間性に基づく、清々しい文化建設に努めなければならぬ。そして、その決意のもとにおいては、郷土的・日本の特殊の生活諸様式ばかりでなく、必要に応じて國際的・世界的な生活諸様式も、盛かんにとり入れることを奨励せねばなるまい。一體、我國は維新以來、むしろ、それを得意としてゐた位であつて、たゞ、今後におい

ても、採用補短といふ合理的模倣の格守に、注意を拂らふべきのみ。なほ、これと同時に、過去の我國に於いて、いささか不得手であつた、文化の工夫、改善にも努め、その合理化から醇美化への途を、一段促進すべきであらう。

これからの新日本において、心すべき問題は、以上の如くであるが、社會進動の窮極理論に照らして、それらの事實を順調に實現して行くために、國民知能の叡知化こそ、特別要件だとしなければならぬ。この點において、すでに、自然科学の高度の培養は、いま、何人にも感ぜられてゐる點であるが、われわれは、さらに、社會科學の教養の不可缺性を指摘してゐるのである。人間生活が、自然を相手とすると同時に、社會事實のうちに取り行はれることは、それへの高度の適應化を要求する。この高度の適應化こそ、また、社會進動の窮極的原理であつて、あらゆる努力を傾倒して、この適應化の推進を狙ひとし、自然科学的技術の昂揚とともに、社會科學的企畫完遂を庶幾するを要する。かくて、能率的な新日本の出現に立ちいたるべく、それが、進動理論の示す、能率化といふ最後の原理に一致するは、いふまでもなからう。その際、發揮せられる、日本の新能率こそ、平和日本、デモクラシー日本、高度文化の日本の誇りであつてよいであらう。

## 附 録